
合鍵

歌月 碧威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

合鍵

【Nコード】

N4258D

【作者名】

歌月 碧威

【あらすじ】

両親が海外赴任をする事になり、一人暮らしをする事になった桜音。女の子の一人暮らしは心配だと、両親はある人物との同居を提案してきた。その人は、桜音の通う学校で王子と呼ばれる人物で…

プロローグ

しかし、歌いすぎた。

気休め程度に、喉をさすってみる。

さつきまで春休み最後の遊び収めと称し、友達とカラオケで盛り上がっていたのだ。

明日起きるの七時ぐらいでいいかな……なんて事を考えながら玄関のドアを引き、足を踏み入れた。

「ただいま」

「おかえり。桜音」

えっ。

聞きなれない声に出迎えられたので、思わず顔を上げる。

そこにはキューティクルの傷んでいない黒髪に、整った顔立ちをした長身の青年が立っていた。

そのへんの雑誌に載っていても違和感はないだろう。

「在原海……」

なんでこの人がここにいるの？

面識もないのに、思わず呼びすてにしてしまった。

その人は私の通う白塚高校では、王子と呼ばれ知らないものはいないというぐらいの有名人。

そのため、私も彼の事は一方的に知っている。

顔よし、頭よし、おまけに家が金持ちという、天は二物以上与えてしまったというなんとも羨ましい存在だ。

もちろんそんな好条件だから、女の子達が放っておくわけがない。

入学当初から騒がれた。でも、それは最初だけ。

携帯で撮られたり、おっかけの女の子達のせいで、部活が出来なかったりなんだかんだしてとうとう本人がキレたのだ。それ以来、みんな遠まきに眺めたりして大人しくしている。

もしかして家間違えた？否、さつき『逢月』^{あいつぎ}って書かれた表札みたもん。

それに、ここ私のうちの玄関だ。この特徴的な玄関はうちしかない。玄関わきに並べられているものに目を向ける。

あ、やっぱりうちだ。

こけしを確認すると納得した。

一、二体ならいいけど、こう十数個並んでいると不気味だよね。

うちのお母さんは民芸マニア。

旅行先などから大量に買ってくるため、置き場がなく仕方なしにここに飾っているのだ。

ここがうちって事は……ああ、夢か。

これが俗にいう白昼夢ってやつですか？

そうだよね。じゃなきゃ、王子がこんなところにいるわけないもんとりあえず、夢なら目覚めなければ！！

思いたったらいざ行動と、思いつ切り頬を引つ張ってみた。

ほら、よくテレビとかでやるじゃん。夢かと思ってほっぺたを掴むってやつ。

「痛いんですけど」

ってことは、現実？いやまて、幻覚という線も考えられる。

「お前、何やってんだ。早く上がれ」

「うわっ」

掴まれた腕を、思わず払ってしまう。

だって、幻覚だと思ったのに感覚があるんだもん。

拒絶が気に食わなかったのか眉間に皺をよせ、こつちを睨んでいる。体を縮め、思わず目をつぶった。怖い。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」
繰り返していた謝罪の言葉は、体を包んだ暖かいものせいで途切れた。

「そんなに怯えるな」

優しい声と共に、頭を撫でられる。

視界は彼の胸に遮られ、私の背中には手が当てられている。

この状況は、抱き締められているの……？

何が起こってるのか理解できない私を、リビングから現れた人が呼び戻した。

「あら。おじやまだつたかしら」

エプロンをつけた女の人が、口に手をあてて立っている。お母さんだ。

「ちがつ」

顔に血液が集中しているのか、火照っているのがわかる。

私、今絶対顔赤い。

「知らなかったわ。二人がそうゆう関係だったなんて」

「いえ。ただ桜音さんが、転びそうになったので抱きとめただけです」

「そつなの？でもお母さんは、海くんと桜音がそついう関係になつても構わないわよ？」

「はっ！？無理でしょ。隣に立つのも嫌」
うっ。

また、睨まれた。

「とりあえず、二人共リビングに入って。桜音、貴方にお父さんから大事な話があるそつよ」

この時の私はその大事な話が、私の平凡な生活に嵐を巻き起こすなんて思いもしなかった。

第一章 第一話 おはぎは甘い、現実には甘くない

あゝ。やっぱり落ち着く。

手から伝わる湯呑の温もりが、平穩をもたらししてくれる。

隣には在原、テーブルを挟んで目の前のソファには、両親が座っている。

あれから場所をリビングへと移し、私たちはみんなであったりとお茶を楽しんでいる。

両親と在原は何か会話をしているが、私にはそんな事よりもいま口に頬張っている物の方が大事だ。

これは在原が持ってきてくれた彩堂のおはぎだ。

予約しなきゃ買えないぐらいの人気で、私の大好物ランキング第一位に輝くぐらいの代物。

もっと食べたい……

自分の皿はすっかり空になっちゃったので、つついテーブルの上に乗っている他の人のおはぎに目が行ってしまった。

食い意地が張つていると言われるのは嫌だが、このおはぎに関しては別だ。

みんな半分以上残っている。隣の人にいたっては、まったく手をつけていない。

食べないなら、くれないかな？

視線が気になったのか、在原は笑いながら目の前におはぎを差し出してくれた。

「やる」

「いいの!？」

ありがとう。とそれを受取ると、一口に切って口に運ぶ。

この人、もしかして良いやつかも。

「うまつ」

もう、語尾にハートをつけたい。あゝ。幸せ。

「で、話をそろそろ始めたいんだが」

あ。すっかり、忘れてしまっていた。

そういえば玄関先で何か大事な話があるとか言われたっけ。

実はさつきお父さんが話を始めようとした時に、お母さんがおはぎを出してきてしまったのだ。

そして、それを見た私が狂喜乱舞。呆れて話が中断になってしまったのだった。

「桜音。やっぱり父さん達と一緒に行かないか」

またその話か。

今度お父さんは、仕事の都合でニューヨークに転勤になったそうだ。その為一人残すのも心配だから、私も連れて行きたいらしい。

「嫌。学校だつてあるし、友達と離れたくないもん」

せっかく高校で出来た新しい友達と離れるなんて嫌だし、それに何より英語の成績がギリギリの私が、海外でやっていけるはずがない。

「大丈夫。料理だつて洗濯だつて出来るし。何かあつたらお兄ちゃん達もいるから平気だよ」

うちは元々共働きだったから、家事は中学から少しずつやってきたから出来る。

なにか問題が起きたら、結婚して隣町にいるお兄ちゃんに頼れば安心だし。

そのため一人でも別に問題はないと思う。

私の返事にお父さんは目を閉じ何か考えこむと問題発言を口にした。

「わかった。それなら、海君と一緒に暮らさない」

は？

あいた口が塞がらない。なんでいきなりそうなるの？

お父さんは、そんな事は構わずに話を続け始めた。

「女の子の一人暮らしは防犯面等を考えるといろいろ心配だ。その事を考えると、海君がいればなにかと安心だろう」

さも当然のような顔をして、お茶をすすり始めた。

こんな突然の事に、納得が出来るはずがない。

「そもそも、根本的におかしいから。同じ屋根の下、男と女が住むなんてどうかしている。娘の身に何かあったらどうするの!？」

思わずテーブルに身を乗り出して、睨みつけた。

それでも冷静に、「母さん、お茶」などと言いながら、湯呑を差し出している。

「海君がうちの娘に何かするはずがないだろう。お前は父さんと母さんの遺伝子を継いでいるからな」

ああ。すみませんね。

どうせ、平凡ですよ。人並みですよ。

「そんなら、私がこの人に何かしたらどうするの？」

隣に座り自分も関係があるのに、全然会話に参加していない人物を指差した。

子供の頃に、「人様に指を指してはいけません」と言われたけどこの際しようがない。

「お前をそんな娘に育てた覚えはない!!」

さっきの私と同じように、ドンと音をたてテーブルに手をつけ身を乗り出している。

お父さんは怒りで顔が真っ赤だ。

「……ごめんなさい、ただ言ってもみただけです」

「お前が日本に残る条件を覚えているか？」

「うん。啓吾さんの娘さんと一緒に暮らす事ですよ。私は大丈夫で

も、啓吾さんの娘さんなら相当美人だし危ないんじゃないの？」

在原啓吾。お父さんの会社の取引先の社長さん。

だいぶ前に奥さんに先立たれてから、お子さんを一人で育てている
そうだ。

年もたいして変わらず出身も同じということ二人は馬が合い、た
まに家に啓吾さんが遊びに来てくれる。

この間も家政婦のみちるさんと一緒に家に来てくれた。

みちるさんは家政婦さんであると共に、啓吾さんの彼女さんでもあ
る。

二十八歳で、私にとってはお姉ちゃん的存在の人。

そんな二人が、反対していた周りを説得してこのたび結婚する事に
なつたそう。

なんともおめでたい話である。

その為啓吾さんの娘さんが、二人を氣遣つて家を出るのが心配だと
いう話になつた。

一人暮らしを反対されていた私は、その子との同居を申し出たので
ある。

一人はダメだけど、二人暮らしなら日本に残れるんじゃないかとい
う算段もあつたし、やっぱりどこかで一人暮らしが不安な所もあつ
たから。

この提案には両親も賛成し、私は無事日本に残る事になつたのであ
る。

「そうだ。在原さんのご子息との同居だ」

ご子息？まさか

たしか、この人も苗字は在原だよね。そういえば、よくみると顔の
パーツとか似ているかも。

彼の顔を見やると、何事もないようにお煎餅を食べている。

なんでお煎餅食べていても、絵になるんだろう？

「在原啓吾は、俺の親父だ」

それは、この流れでわかったよ。それより、大事なことはそんな事じゃない。

「ちよつと、この人男だよ!!」

「お前は、海君が女の子に見えるか。それに在原さんは、一言も娘なんて言わなかったぞ」

たしかに圭吾さんは言っていないよ。いつも「うちの子」ってしか言っていないもん!!

「見えるわけないでしょ。それにこいつが男なんて事さつき味わー
ー」

さっきの玄関での抱擁の映像が頭の中に浮かんできて、思わず口ごもってしまった。

女の子と違い、硬い筋肉質の体に、低い声

思いだしたら、また顔に血液が。

「どうした、桜音。顔が赤いぞ？」

在原は、そう言ってくツクツと喉で笑った。

……うう、絶対私をからかって楽しんでる!!

「とにかく。一緒に付いてくるか、海君と一緒に住むか、どちらかしか選択はない」

そう言っつて、お父さんは英語で書かれた学校のパンフレットをテーブルの上に置いた。

二者択一。

私は、日本に残りたい。

ということは

……ああ、無常。

第二話 悩める少女

久し振りに見た校庭の桜は、もうすっかり見ごろだった。普段の私なら、花見だ〜と騒いでいる所だが今はそれどころではない。

この頭の中に棲みついている問題をなんとかしなければ。

「はあ………」

新学期初日だというのに、本日何度目か分からない溜息を吐きだす。別に在原海個人が嫌いってわけじゃないよ。

それに好き嫌い言う前に、よく知らない人だし。

てつきり女の子との同居だと思っていたのに、あてが外れてしまったのが嫌なのだ。

女の子同士ならある程度生活パターンが似ているはずなのに、それが男の人との生活となるといろいろ面倒になる。

だってジャージ姿でゴロゴロしてるのとか、髪ボサボサの寝起きとが見られるんだよ？

キチンとした生活送れって事なのかな。

「……音」

でも家でぐらいダラダラしたい。

とりあえず一緒に住むのは一週間後だけ

「さ〜く〜ら〜ね〜!!」

急に呼ばれた自分の名前のせいで、思考が途絶えてしまった。

鼓膜が

キーンとする左耳を押さえ、叫んだ主を睨んでやった。

こんなことをするのは、一人しかいない。

「涼っ！！」

みずたにりょう
水谷涼。私とは中学からの男友達。

涼とは中学からずっと同じクラスで、今までいっぱい助けてもらっている。

お互い家族ぐるみの付き合いで、涼は半ば私の保護者代わりだ。いつも明るくて、太陽のような人。

そんな性格の為、人見知りをしないなんと羨ましい性格をしている。

「おはよう」

バスケ部なので背が高い。涼の身長は、180?。

私は155?だから結構差が大きい。

そのため涼の事を見上げる形になっちゃうので、たまに首が痛くなるんだよね。

涼はさわやかな朝に相応しい笑顔を撒き散らしていた。

「も〜、おはようじゃないよ。朝から、耳元で大声出さないで!!」

「悪い。悪い。何回呼んでも返事しないからさ」

「そう怒るなよ〜」と言いながら、頭を軽く撫でてきた。

あ〜、呼んでたんだ。全然気付かなかったや。

「…………ごめん。ちょっと考え事してたの」

「そんな考え込まなくても、大丈夫だって」

「そうかな」

「そうだよ」

涼にそう言われるとそんな気がしてくる。

なんか不思議。

ってどうか、涼ってこの事知ってたっけ？私、言ってないよね？

「そんな考え込まなくて、きつとまた同じクラスだぞ」
「は？同じクラス？在原海との同居の事じゃないの？」

「あつ、忘れてた」
うちの学校は二年になると、理系文系に分ける為にクラス替えがあるのだ。

もちろん私は数学苦手なので、文系。
やばい、急いで掲示板に行かなきゃ。

「早く見に行こう！！」
私は涼の腕をつかんで引つ張った。
考えるのは、後でいいや。

そんな事より今は、クラスのメンツの方が気になる。
みく達と同じクラスだといいな。

そんな時だった。

ざわめきと共に、私を悩ますあの人が現れたのは。

第三話 流れに身を任せるしかないのです

「おはよう。桜音、涼」

振り向くとそこには、これまた朝に相応しい笑顔を携えた在原の姿があった。

涼の無邪気な笑顔とは違い、こっちは洗練された大人って感じがする。

落ち着きがあるから、そう思うのかな。

もちろんそんな笑顔を見せられた周りの女の子達の様子が一変したのは言うまでもない。

「はよ」。海、それに片桐も」

片桐？

涼の視線を追う。

在原の隣には、モデル体型の女の子が寄り添うようにいた。

すごい美人。こういうのって、クールビューティっていうのかな？

切れ長の目に、手入れの行き届いたロングの黒髪。

背は高めで、細いのに出るところは出ている。

なんとも羨ましい体型だ。

あれ？この人、どっかで見たことある……

あんなに美人なのに、はつきり覚えていないのが悲しい。

どれだけ記憶力がないんだよ。私。

曖昧な記憶から名前をなんとか思いたそうとしたけどやっぱ無理。

仕方なく涼に視線を投げかけると、マネージャーだよ。と教えてくれた。

かたぎりれいか
片桐麗香男子バスケット部の美人マネージャー。

部活の時、在原の傍にいるのを何度か見かけた事がある。

「おはよう。水谷くん。それから……」

その美人さんは、涼から私に視線を変えた。

「たまに水谷くんの試合見に来てくれる子だよね」

何回かしか行っただことないのに、覚えててくれてるんだ。

「逢月桜音です」

私はあわてて、お時儀をする。

勢いが良すぎたのか、鞆につけていたキーホルダーがガチャガチャと音を立てた。

「かわいらしい彼女だね」

口元に手を当てて、クスクスと小さく笑う。

彼女じゃないんですけど……

よく一緒にいるせいか、たまに間違われてしまっただよね。

「ち」

「行くぞ」

違いますと口を開きかけた瞬間、体が勝手に校舎側に動いてしまっただ。

な、なんなの!?

在原に手を掴まれ、私は引きずられるように連れていかれていた。

掴んでいる本人は、何が気に食わないのか眉間に皺をよせしかめっ面をしている。

「ちよ、ちよっと」

呆然としている涼と片桐さんの二人を残し、私たちはその場を後にした。

「もう、いい加減離して」

無理やり手を振り解く。

私は結局あのまま引きずられ、中庭まで連れて来られた。いつもは賑わっているこの場所も、時間帯のためか誰もいない。なんなのよ、一体。

在原は、無言で腕を組んでこっちを見ている。

「彼氏のくせに彼女置いてきちゃ、マズイでしょ！？戻ろうよ」
何も言わないでこんなところ来て、絶対に彼女変に思う。

クラス替えの表も見なくてはならないし、とにかく学校の中に早く行きたい。

「チツ」

私の何が気に障ったのか舌打ちが聞こえたかと思うと、いきなり右ほっぺを掴まれた。

「いひゃい」

「この口か？片桐の事を彼女だと言った口は。あいつが勝手に俺に付きまどってきてるだけだ。付き合ってるなんていない」

えっ、違うの。だって、そういう風に見えたんだけど。

「それに俺は」

在原は何かを言いかけたかと思うと急に、

「そっぴゃ、おまえあの時、涼の彼女って言われて否定しなかったよな？」

と言いながら、空いた手でもう片方を掴まってきた。

あれは貴方が無理やり引つ張ってきたせいじゃん。

そう言いたいのにな、口が言うことを聞いてくれない。

「今度から、否定しろよ。わかったか？」

涙目で頷くと、やっとほっぺが解放された。

つだゝ痛い。

痛みを紛らわすため、さする。

気休めにもなりやしない。

なんで怒られなきゃならないのよ……
もしかして片桐さんの事苦手なのかな？

第四話 窮地に現れた女神

なんでこうなるかな……

私は只今後ろを壁に、周りを見ず知らずのお姉さま達に包囲されている。

今思えば、少し警戒心を持てばよかったのかもしれない。

中庭から教室まで移動中に呼び止められ、「少し手伝ってくれない？」との誘いに文句に自分からのこのこついで行ってしまったのだから、来てみればこれ。

「あんたが、逢月桜音？」

腕を組んだ中央の人物が私の名前を呼ぶ。

この人たしか……在原のファンクラブ会長。

まじまじと人の顔を除きこんだかと思うと、鼻で笑った。

「なんだ、大したことないじゃない」

「っていうか、普通じゃん」

「ねえ、会長本当にこいつで間違いないの？」

本当の事なんだけど、なんか癪に障るんですけど。

「で、在原君とはどういう関係なのよ？まさか、彼女とかじゃないでしょうね？」

「いや、どういふ関係も何ありませんけど」

「ならどうして、手を繋いでたのよ手？」

ああ、朝のアレか。

でもあれは繋いでたというより、引きずられていたという方が正しいんじゃない……

「本当に最近目障り奴が多いのよね。二年の片桐とか。一年も入っ

てきた事だし、和を乱さないでほしいわ」

「一々こんな事で呼び出されるなら、もし一緒に暮らした時バレたら私はどうなるんだろう。」

そんなことを考えただけで、憂鬱になる。

「とにかく、二度とあの人に近づかないでちょうだい」

「嫌です」

自分でも思いも寄らぬ言葉に驚き、慌てて口を塞ぐがもうすでに手遅れ。

なんでそんな事を言ってしまったのだろう。

わかりましたって言っておけば、この場は丸く収まるのに。

そのセリフを聞いた会長さんは、烈火のごとく怒り私を壁に押しした。

「……っ痛」

背中に鈍い痛みが走ると共に、体に力が入らずそのままずるずる床に座り込むんでしまう。

「もう一度言っわ。二度と近づかないで」

近づこうか、遠ざかろうか誰にも許可なんていらぬ筈だと思っんですけど。

なんか、だんだんバカバカしくなってきた。

ファンクラブだからって、交遊関係まで口挟む権利なんてないんじゃない。

「嫌です」

「言葉で言っても分からないのね」

そう言っって、右手を振り上げる。

「やばっ、叩かれる！！思わず目を瞑ったのと同時に扉が開け放たれた。」

「こんなところで何をしていますか。ここは授業以外の立ち入

りは禁止されています!!」

そこに視線を向けると、綺麗な美人が扉に手を掛けていた。白陶器のような肌に、耳が隠れるぐらいまで伸びた色素の薄い髪がよく合っている。

どうして、千里ちゃんがここに？

彼の名前は藤原千里。

その容姿から男なのに、学園三大美女の一人として数えられている。

千里ちゃんの大きめの瞳が私を捉えると、この状況を判断したのか綺麗な顔が歪んだ。

「千里ちゃん」

私が彼の名を呼ぶと、腰に手を回し立ちあがらせた。

「大丈夫ですか？桜音さん」

「うん。全然平気」

そうは言ったものの、千里ちゃんの制服を掴む手が震えていた。

「二度と桜音に近づくな」

千里ちゃんはそう言って、お姉さま方を睨むと私を教室から連れ出してくれた。

あんな千里ちゃん初めて見た。

いつもの千里ちゃんとは違い、敬語じゃなかったし、声色とかも全然違った。

第五話 それぞれの想い

「今、みくが来ますから」

千里ちゃんは携帯をブレザーにしまい込むと、私の隣の腰を落とす。

私はまた朝居た中庭に戻ってきていた。

少し落ち着くまで、休もうという千里ちゃんの言葉に甘えたのだ。ベンチに座り空を見上げと、雲がゆっくり流れている。

なんだか、朝からいろいろあり過ぎ。

「当分一人では行動しないで下さいね」

「ごめんね。迷惑かけて」

「そんな事ありませんよ」

どうやら教室に来なかった私を心配して、涼とみくと一緒に探してくれていたらしい。

「今年は、千里ちゃんと同じクラスなんだね」

「そうです。涼もみくも一緒ですよ」

「やった〜」

良かった。知らない人ばかりだったらどうしようって思ってたんだ。千里ちゃんとは、みくを通じての友達だ。

みくの幼馴染が千里ちゃんだったのだ。

最初見たときは、綺麗な女の子だと思ったんだよね。

「僕も一緒に嬉しいですか……?」

「うん。嬉しいよ」

そう言ったら千里ちゃんは、はにかんだ笑顔を見せてくれた。

千里ちゃん去年は違うクラスだったから、同じクラスになったのは嬉しい。

「桜音さん。在原海の事をどう思いますか？」
急に真顔になった千里ちゃんに、私は戸惑った。
どうしてその質問が出てきたのかその意図がわからない。
どうって、どういう意味だろう……？
大変そうとか？

「桜音！！」

何と答えたらよいか分からずにいると、大声で名前を呼ばれた。
声の方向を見ると、そこには息を切らせた女の子が立っている。
綺麗に巻かれた肩まである髪に、ばっちりのアイメイク、短いスカー
トからは小麦色の細い足が見える。
彼女は、佐々木みく（ささきみく）。
去年同じクラスになり、部活も一緒だったため仲良くなったのだ。
脇腹に手を当てて、苦しそうに肩を上下に動かしている。

「みく」

「よかった……無事で」

みくは私に近づいてくると、私をぎゅっと抱きしめた。

「変な連中が桜音のことを呼びに教室まで来たんだよ。桜音、なか
なか来ねえし。もしかしたら、何かあったんじゃないかと思ったら
案の定この騒ぎ」

「大丈夫。千里ちゃんが来てくれて助けてくれたの」
そう言ったら、みくの顔が一瞬泣きそうになった。
みく……？

「さっ、早く教室に戻ろう。千里も早く」
手を引引つ張られ、連れて行かれる。
なんだか今日は、引つ張られてばかりだ。

番外編 バレンタイン企画 欲しいものは一つだけ（前書き）

海視点の過去編です。

番外編 バレンタイン企画 欲しいものは一つだけ

桜音を最初に見たときは、拍子抜けした。
まったく想像と違っていたから。

親父が可愛い可愛いを連呼していたものだから、勝手に想像してしまっていたのだ。

涼の隣で笑うあいつは、あまりにも普通そのもの。

身長も高くも低くもなく、顔もスタイルも飛びぬけて良いってわけではない。

でもいつからか俺は、そいつから目が離せなくなってしまったんだ。

今日は2月14日。甘いものが嫌いな俺は、この日は好きでは無い。でも、今年は違う。

初めてチョコが欲しいと思ったし、初めて人がチョコを貰うのを羨ましいと思った。

あいつは誰にあげたのだろうか

「おかえり」

玄関先での思わぬ俺の出迎えに、靴を脱ぎかけていた親父の動きが止まる。

そりゃ、驚くだろう。

俺が親父を出迎えるなんて、ガキの頃以来だからな。

「何かあったのかい？」

滅多に見れない光景に親父が顔を顰めて尋ねてきた。

「ちよつと、欲しいものがあるんだ」

「なんだ。驚かさないでくれよ」

苦笑いで答えながら、二人リビングへと向かう。

「それで、一体何が欲しいんだい？」

ネクタイを緩めながら、親父が尋ねてきた。

俺は親父が鞆と一緒に置いた大きめの紙袋を持った。

「コレ」

「それ、君の嫌いなチョコだよ？それに、君の方が貰っているだろう」

「貰ってない」

直接渡されたのは断ったし、机の中やロッカーに入っていたやつは人にあげた。

俺が欲しいのはただ一つだけ

紙袋を漁ると、そこには綺麗にラッピングされた箱が数十個入っていた。

そこから水色の包装に青いリボンのラッピングが施された物を抜き取り、残りを親父に返す。

その光景を不思議そうに見ていたが、納得したらしく一人頷いている。

「よくわかったね」

涼も同じラッピングで貰っていたからな。

中身も同じなら、桜音手作りの生チョコ。

「欲しいなら、欲しいって桜音ちゃんに言えばいいじゃないか」

「言えるかよ」

話したこともない人間から行き成り「チョコが欲しいです。」なんて言ったら、あいつがどんな反応するか分かり切っている。

「以外とヘタレなんだな」

「うるさい」

これ以上とやかく言われるのが嫌だから、部屋へと移動する事にしよう。

「ホワイトデーのお返しは、こっちで用意するから。親父からとして渡してくれ」

「僕の方もチョコ少し残しておいてくれよ」

こんな回りくどい事をして、どうしても食べたかった。

来年こそは、桜音に直で貰いたい。

その為にはどうやって近づくか……

キツカケが欲しい俺に、チャンスが訪れるのは少しだけ先の話。

第二章 第一話 俺がいる

「不束な娘ですが、どうぞよろしくお願いします」

「いえいえ。桜音ちゃんは、うちの息子には勿体無いぐらい出来た子です」

「そんなことないですよ」

啓吾さんとうちのお父さんが、謙遜しあいお互い頭を下げあっている。

啓吾さんは在原のお父さんで、情報系のサービスなどを展開している会社の社長さん。

モデルさんのようにカッコよく、啓吾さんの載っている経済誌は部数があがるらしい。

不束な娘って、なんか嫁入りっぽいんですけど。

そう思ったのは私だけじゃなかったらしく、

「なんか桜音が俺のところに嫁に来るみたいだな」

と迎えに座る在原が口を開いた。

只今逢月家と在原家の両家が、うちのリビングで対面している。

本日両親が日本を立ち、変わりに在原がここに住むようになるため、挨拶も兼ね在原家がうちに来ていた。

「そついえばみちるさん達、この後新婚旅行に行くんですよね」

「そつなの。一か月なんて私には贅沢すぎるのだけれども……」

そつ言つてカップに口をつけると、今時珍しい染めてない髪が肩から落ちる。

みちるさんはブラウスにカーディガン、膝が隠れるまでの長さのスカートという

落ち着いた格好をしている。

「普段家事に追われているのだから、ゆっくりしてきたらいいわよ。お父さん私もあつちに着いたら、どこか行きたいわ〜」
啓吾さん達はこれから、一か月海外を転々と旅行するらしい。
一か月なんて私には長いように感じるが、世界は広いし、いろいろ見るところがあるから
あつと言つ間に過ぎてしまつのかもしれない。

「桜音ちゃんに、たくさんお土産買ってこるから」

「俺には？」

「もちろん買ってこるよ」

啓吾さんは、苦笑いで在原に言葉を返した。

三十分ぐらいしたところで、時計の鐘が別れの刻を告げた。

「そろそろじゃない？」

「そうだな」

もうそんな時間なんだ。

みんなで荷物と一緒に外に止めてある啓吾さんの車に移動した。
このまま四人で空港まで行くそうだ。

「そんな顔しないで桜音。私達行けなくなっちゃうでしょ？」

お母さんは、そつと私の頬に手をかける。

そんな顔……？

どんな顔してるんだろ。わからない。

ただ、もうお別れかと思うと心が少し苦しい。

「火の元と、戸締りに気をつけなさい。あと何かあったら、必ず電話するよ」

「あら。お父さんったら、何もなくても電話しなさいでしょ？」

お母さんが笑って言ったけど、私はうまく笑えない。
やばい。視界が滲んできちゃった。
大丈夫だって思ったんだけどな……
自分で選んだんだけど、いざその時を迎えるとやっぱり一人取り残される感覚に陥る。

「俺がいる」

その声と一緒に、右手にぬくもりを感じた。
顔をあげ隣を見ると、在原がいた。

「だから、ちゃんと見送ろう。な？」

私は首を縦に振ると、「……いつてらっしやい」と震える声で両親を見送った。

第二話 いざ尋常に勝負！！

「なんで急にスピード速くなってんの!?!」

「さっきアイテム取ったから」

「ずるい!?!」

「そういうゲームだから」

「なら、私も」

あ、クラッシュ。やっぱり話しながらするとダメだ。

私と在原はコントローラーを手に、只今テレビ画面と睨めっこ中。

二人残され気まずさに耐えきれなくなった私は、何を思ったかゲームをしようと在原に声をかけてしまったのだ。

しかもゲームはありがちな、カーレースのやつ。

あれなら、難しい操作とかしなくても大丈夫だしね。

「忘れてないだろうな? 桜音」

「うん。でも勝負はまだついてないよ」

思わず、コントローラーを握る手に力が入る。

絶対負けないんだから。

だって、負けたら

「俺の勝ち」

画面を半分に分け両手をあげバンザイをしているキャラクターと、膝をついている対照的なキャラクターが映し出されている。

あのクラッシュが痛かったのか、それとも私の腕が悪かったのか大差で負けてしまった。

「桜音、覚えているよな？」

何が？とはまさか言えないよね。

うん、覚えてるよ。だから、負けたくなかったんだもん。

「……負けた人は、買った人の言う事をなんでも聞く事」

「はい、良くてきました」

そう言つて、頭の上に手を乗せられグシャグシャにされる。

私と在原はただゲームをするのはつまらないから、賭けをする事にしたのだった。

それは敗者が勝者の言うことを無条件で呑むというもの。

「言つておくけど、高いのとか駄目だからね」

何奢らされるのだろう。

今バイトしてないから、お小遣いあんまないから高いのだと無理……

「物じゃないから」

物じゃないつて事は、何？

想像が出来ないので思わず首を傾げたと、在原はふつと笑った。

「今度から俺の事、名前で呼んで」

「無理」

これにはさすがに即答で答えた。いきなり慣れてもない人を名前前で呼ぶなんて出来ない。

「負けた人に拒否権ないし」

「無理だつてば……！」

「涼やあの女男の事は名前で呼んでるのに、なんで俺は呼べないわけ？」

在原はしかめっ面でこつちを見てる。

「ちよつと、女男つて千里ちゃんのことじゃないでしょうね……？」

「今は女男の事なんてどうでもいいんだよ」

「よくないつてば……！」

「なんでそんなにムキになんの？」
千里ちゃんは女顔の事を酷く気にしている。
羨む美貌で学園三大美女に入った事も本気で嫌がっていた。
男が女みたいって言われても嬉しくも何ともないって……
「とにかく、そういう事言わないで」

ゲームでなんとか沈黙から逃れたはずなのに、さっきとは一遍重苦しい空気に包まれる。

う、どうしよう。重すぎる。

沈黙とかそういうの苦手な私には、この場所は居にくい。

逃げたい。今すぐこの部屋から脱出したい。

逃げたとしても、この不安定な状況が変わる事はないけれども。そんなときだった。機械的な音楽が二人の間を流れ始めたのは。

「誰か来た」

来客を告げるメロディに促されるように、不機嫌気わまりない奴を置いて玄関へと足を向けた。

「はい」

ガチャッとドアを開け放つと、朗らかな光が出迎えてくれた。

そこに立って居たのは、もう見慣れて人物だった。

外の天気と同じぐらいあったかい空気を纏った人。

「よつ桜音。一人で寂しがっていると思ってさ。あとこれお袋から煮物だつてさ」

「涼」

安堵感から思わず涼に泣きついてしまった。

昨日学校で会ったばかりなのに妙に懐かしい。

やっぱ気心しれた人は落ち着く。

「なんだ、やっぱり寂しかったのか？」

「ううん、違う。もう空気が重くて仕方なかったの」

「換気でもしたらいいんじゃないか？」

いや、そういう意味じゃないんだけど。まあ、いいや。

知っている人が来てくれたからか、私の心はすっかり落ち着いて平静を取り戻していた。

「ありがとう、おばさんにもお礼言っておいて。あつ、上がってつてお茶でも入れるから」

涼に入るように促して、玄関で靴を脱ぎかけていた時に気づいた。

忘れてた。この現状を。

これってまずくない？

たしかリビングには

「桜音？」

一人思案に暮れドアに手を掛けたまま動かない私を、怪訝そうに涼が様子をつかがっている。

「ごめん、今散らかっててさ。ちょっと待ってて」

玄関で涼に待ってもらって、リビングへと急いだ。

いくら涼でも、この事がバレるわけにはいかない！！

第三話 今日からよろしくな

「大変、涼が来ちゃったの!!」

リビングに戻ると在原は、長い足を組みソファにもたれながらテレビを見ていた。

「良かったじゃん。お前の大好きな涼が来て」

すっかりリラックスモードの彼は焦ることなく、なんなりと会話を終了させた。

なぜそんな落ち着いちゃってるのよ。しかもなぜか大好きなの所だけ協調されたような……

「だから少しの間だけ隠れて」

「別にいいじゃん」

いやダメでしょ。バレるって。

まだ機嫌が悪いのか視線はずっと画面を見て、一向にこっちを見てくれない。

「お願いだから」

座っている在原の腕をとり、引っ張ってみるがやつぱり動かない。

あまり接点がない在原が居たら、絶対涼だって不審に思う。

「桜音?」

やばい。早くなんとかしなくちゃ。

「呼んでるぞ」

いちいち言われなくてもわかってるよ。

はつきりと玄関から涼の声が聞こえたんだから。

なんとか機嫌を戻してもらって、さっさと隠れて貰わなければ。

……というか、そもそもどうして機嫌悪くなったんだっけ?

千里ちゃんを庇ったから? ううん、違う。たしか名前で呼ぶのを拒

否したから。

そんなに名前で呼ぶって重要なのかな。

「海、お願い」

試しに呼んでみると効果があったようで、肩をピクツと動かしてこっちを見てきた。

さっきまでテレビ画面しか映し出されていなかったダークブラウンの瞳に私が映し出される。

えっ、こんな簡単でいいの!?

「早めに追い寄せよ」

在原はソファからゆっくりと腰を上げた。

「俺言つたよな。早めに帰せつて」

「ごめんなさい」

すっかり忘れてしまっていた。彼の存在を。

あれから数時間涼と長話を続けてしまった。

だって話たい事がいっぱいあるんだもん。まだ話足りないぐらいだけど。

少し落ち着いてから思ったんだけど、別にリビングじゃなくて私の部屋でも良かったんだよね。

そしたら、海も隠れなくてすんだし。

「あと誰か確認しないですぐ開けるな」

「はい」

「危ないだろ」

「はい」

「ちゃんとドアホンで誰か確かめる事。わかったか？」

「はい」

なんとか涼を帰しリビングへ戻ると、有無を言わずソファに座らせられ眉間に皺を寄せた海に注意をくらっている。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

両手を顔の前で合わせ頼んだ。

システムキッチンのところに隠れるのはキツかったよね。床冷たいし。

「今度から気をつけるよ」

「はい」

一緒に暮らすからには、それなりに気をつけなきゃどこでボロが出るかわからない。

海のいう通り今度から、気を付かなければ。

「さて、そろそろ夕飯作ろうって」

やっと解放された私は、両手を天上まで高く上げ背を伸ばした。

「買い物はしなくていいのか？」

「うん。おばさんに煮物貰ったし。冷蔵庫にまだ材料あるし」

夕飯作るのと一緒にお弁当の下ごしらえもおこらうって。

「海ってお弁当派？学食派？」

「作ってくれるのか」

「うん。一人作るのも、二人作るのも一緒だし」

予備のお弁当箱ってお母さん何処においたんだろう。

「桜音」

「ん？」

呼ばれた方向を振り向くと、はにかんだ海がいた。

あどけない笑顔。こんな顔するんだ。

窓からオレンジ色の光が差し込んできて眩しい。

「今日からよろしくな」

「こつちこそよろしくね」

こうして私と海の間居は始った

第四話 見知らぬ人

「どう？一人暮らしは」

「え……」

思わぬ質問のせいで指先に力が入り、シャーペン芯が折れてしまった。

みくはそんな私のささいな動揺に気付かず、机の上に置いてあったポーチから鏡を取り出すと髪を直し始める。

「昨日からでしょ？おじさん達海外行つたのつて。いいよね、一人暮らし。アタシなんて、もう高二なのにまだ姉ちゃんと同じ部屋だよ」

正確には一人じゃなく、二人なんです。

しかも、同居人があの在原海なんて言えない。

「今度桜音の家に押し掛けようかな」

「それはダメ！」

突然の大声にクラスメイトの視線が一気に私に集中した。

目の前のみくに関しては、目を大きく見開いて驚いている。

だつて急に来られたら、いろいろまずいんだつてば。

「珍しい。あんたが大声出すなんて」

「ごめん。だつて急に来たらお茶菓子とか出せないし、部屋も散らかつてたりするし……」

しどろもどろな返事しかできない。

「別に気使わなくてもいいのに」

「でもほら、私出掛けていないかもしれないじゃない？そしたら、みくに悪いじゃん」

「あゝ、そっか。すれ違つたら嫌だもんな」

「それじゃ、職員室行ってくるね」

書き上げたプリントをひらひらと揺らし、ボロが出る前にその場を後にした。

はあ、アドリブ上手になりたい。

ここの展示物変わったんだ。

壁に飾られている見たことのない展示物に思わず興味がわく。

これ見るの密かに楽しみなんだよね。

昇降口から二階にある職員室に繋がる廊下には絵や写真、書道が飾られている。

それらは各部の生徒の作品で、中には賞を貰っている作品もあるそうだ。

『太陽』

それを一目見て、思わず目を奪われてしまった。

青空の下三・四歳ぐらいの女の子が、顔より大きいひまわりを持って嬉しそうに笑っている写真。

タイトルの通り、こっちまで暖かくなつてつい笑みが浮かぶ。

くさかべかおりって読むのかな？

写真の下には、太陽というタイトルと日下部香織という名前が書かれている。

「おい」

え？

ふとその声の主を見て、思わず固まってしまふ。

坊主頭の短い髪の毛を金色に染めあげた男が立っていたのだ。

制服は着崩され、耳にはピアスがいっぱいについている。

その上涼達ほどではないが、高い身長と低い声もあって余計威圧感

を感じてしまう。

この人絶対、生徒指導室常習犯だ。

「お前」

その男が一步踏み出さずか踏み出さないかのうちに、私はダッシュで逃げたそうとしたが失敗してしまった。

人は見かけじゃないっていうけど、怖いもんは怖いもん。

「待てよ」

腕を捕まえられてしまい、逃げるに逃げられなくなってしまった。

何なの！？知り合いじゃないよね！？

「驚かせたなら悪い、あやまる。ちょっと聞きたい事があったんだ」
その人は私の腕を離すと、頭に手をやってガシガシと短い髪をかき始めた。

「な、なんですか？」

思わず身構える。一体、私に何を聞きたいんだろう。

「なんであの写真見て動かなかったんだ？」

「ただあの写真が気に入ったからですけど」

そんな事を聞くためにわざわざ声をかけたなんて、余程気になったのだろう。

「へへ、アレをね。お前、名前は？」

「逢月桜音です」

「逢月 ああ、お前が」

数秒顎に手を当て動かなくなったと思うと、ニヤリと笑いポケットから何かを取り差し出してきた。

「やる」

その貰い物の意図が分からず、思わず首をかしげてしまう。

だってそれは、各校の写真部が集まってやる展示会のチケットだから。

「今日の四時に会場前に来い」

第五話 展示会

「そんな身構えるなつて。別に取って食ったりしねえから」
私の一步前に行くその人は時間通りに現れ、一緒に展示品を見ている。

名前も知らない今朝会ったばかりの人間に、警戒心を抱くなつて言う方が無理だと思うんですが……

写真を見たりするのは、好き。

行ったことや、見たことのないものを間接的だけで見れるから。

うちにも海外の写真集とか数冊あって、たまに見ちゃうんだよね。

……なのに、楽しみたいのに楽しめない。

涼に話して、着いてきて貰えば良かったのかも知れない。

そしたら心強いのに。

「どうしてチケットくれたんですか？」

展示物もちょうど中盤にさしかかった頃、意を決して聞いてみた。
無意識に鞆を握る手に力が入る。

「あゝ、それはもうチヨイ待て」

こつちを見ず、けだるそうに答えられてしまった。

はつきりとした解答を聞けず、うやむやな気持ちが残ったままで気持ち悪い。

沈んでいく気持ちに耐えられなくなつてしまった私は、途中から鑑賞するのを止めてしまった。

ひたすら足元だけを見ていく。

そのため前を歩く人が立ち止まったのにも気づかず、ぶつかつてし

まった。

「　っ。ごめんなさい」
鼻ぶつけた。

擦りながら顔を上げると、ある一枚の写真の前で止まっていた。

「この写真」
これって、私が学校で見ていたやつ。あの女の子が笑っている写真だ。

「これ、俺が初めて撮った写真なんだ」

え？

ちよつと待って、これ日下部香織さんのじゃ……
明らかに、隣にいる人物は男。
というか、写真部！？どう見ても帰宅部じゃん！！

「やっぱ、女だと思ってたか？」
首を縦に何回も振る。だって香織って……

「まあ、よく間違われるからな。親が男でも女でも通じるような名前で、香織ってつけたらしい」

「そうなんですか」
というコメントしか出てこないよ。

「俺お前と同じタメだから、敬語とかウザいからいらねえ。それとさっきの答えだけど、撮った写真を気にいって貰ったみたいだったから、その礼代わりに呼んだわけ」

「なら、早くそう言って……」
こっちは頭の中混乱してたのに。

「半分はな」

ん？『半分』って言った？

体のこわばりが少し抜けたと思ったのに！！

「ちよっと待って、半分ってな」

「おや、うちの学校の子だね？」

覆いかぶさるように声がして、私の話は途中で遮られてしまった。

誰……？

日下部君の少し後ろの方に、うちの制服を着た人が立っているのが見える。

髪は耳が出るまで短く、背は高めで細み、腕に写真部と書かれた腕章をつけていた。

一瞬男の人って思ったけど、どうやら違うみたい。
スカート履いてる。

「部長」

日下部君は目を輝かせ、その人の所にいくと犬みたいにその人の周りを纏わりつき始めた。

「言っておきますけど、この女とは何の関係もないんで。俺は部長一筋ですから」

「そんな事、どうでもいい。邪魔だ」

その人は日下部君に臆することなく冷たく吐き捨てる、私の前に立った。

日下部君のさつきまでのイメージが消えた……

だって、全然キャラが違うんだもん。

「初めまして。部長の宮代明良みやしろあきらです」

「あきらさんですか……？」

「男みたいだろ？部長と俺、名前交換したらちよつどいいのにな」

「私が香織って感じがするか。それで、君は？」

部長は冷めた視線で日下部君を一瞥すると、私へ柔らかな笑みを見

せた。

あ、名乗ってなかった!!

「二年の逢月桜音です」

部長さんに言われ、急いで名前を告げる。

「部長相変わらず女には優しいんですね」

「何か勘違いをしていないか？お前以外には優しいの間違いだろう」
なに、この二人の温度差……

とりあえず、何か話題を

微妙な空気の差から逃れるために口を開く。

「あの、宮代先輩の写真もあるんですよね？」

「ああ、こつちだ」

先輩の写真はほとんどが水中で撮った写真だった。

「綺麗」

色鮮やかな魚とサンゴ。

水族館の水槽を眺めているみたい。

「気にいってくれたかい？」

「はい、とっても。海の生き物が好きで、よく子供の頃お兄ちゃんに水族館に連れて行って貰ったんです」

「ダイビングが趣味だな。他にもいろいろあるぞ。良かったら今度部室に見にこないか？」

「行きます!!」

私はその後、宮代先輩の案内でいろいろ見て回った。

先輩に放置され、後ろをトボトボついてくる日下部君が気になったけど……

「楽しかった。今日はありがとう」

「そりゃ、何よりで」

ずっと中にいたから、やたら外の空気がおいしく感じる。

先輩と途中で別れてから、日下部君はどうやら復活したらしく元に戻っていた。

「それじゃ、バイバイ」

手を振って帰ろうとしたのに、腕を掴まれて動けなくなってしまった。

え？何？

「おい！！お前、まさか帰らんじゃないだろうな？」

だって、そろそろ帰らないと夕飯の支度が。

市民ホール前の大時計を見ると、五時を少し過ぎた所だった。

「俺の言ったこと忘れたのか？あとの半分が残ってるだろう？」

あ。そういえば、そんなことを言っていたような……

「何？私そんなに時間ないよ」

日下部君と向き合うように体を向けると、手を放してくれた。

「すぐ済む。今から俺の彼女のフリをしろ」

はあ！？

第六話 彼女のフリって!?

「何で……?」

「ちよつと確かめたい事あってさ。俺のダチに逢ってくれ」
突然告げられた言葉に、頭が上手く回らない。

彼女ってどういうこと!? 友達って誰!?

「他の人にあたつてよ」

「お前じゃなきゃ無理」

「どうして?」

「とにかくすぐ済むから頼む。五分もかからない」

そう言つて日下部君は、目の前で手を合わせる格好をしてきた。
そこまでして確かめたい事って何だろう?

「な? 頼む」

とは言われても、嫌なものは嫌。ここは、逃げるべきか……
なんて事を考えてると、目の前にピンクの物体が現れた。

「逢月これ何だ?」

「携帯」

目の前の物体の名称を簡潔に告げる。

それは最新式のピンク色の携帯だった。

ストラップにはスワロフスキーで彩られたクマがついている。
へへ、私の携帯と同じ ってそれ私のじゃん!!

「それ私の!!」

いつの間に……

帰してよと携帯に手を伸ばすと、手を空高く上げられてしまった。
身長差的に届くわけない。

「返して欲しかったら、わかるよな？」
それ脅迫っていうんだよ……

「なんでそんな機嫌悪いんだ？海」

隣に座り私の肩に手を回している男は、ニヤニヤしながら真向かいに座る人物に言葉を投げかける。

「どういうことだ、これは？」

眉をピクつかせ、海は目を細め日下部君を睨みつける。

その様子の何がおかしいのか、日下部君は笑いだすと海の空気がますます重く突き刺さる。

帰りたい。

目に見えないブリザードが吹きすさぶ中、私はただ切実に思った。

私が連れてこられたのは、駅近くにあるファミレス。

時間と立地条件のため、店の中は学生で賑わっている。

窓際の一番奥の席に日下部君の言っていた友達がいた。

まさか、それが海だなんて

「別に？友達に彼女を紹介しているだけだけど？」

「ふざけるな。桜音がお前なんかと付き合っわけないだろ」

「お前なんかって酷くね？悪いけど、俺達さっきまでデート中だっ

「だから。な？」

デートじゃないと思うけど、テーブルの下でチラつかせられている携帯を見ると否定出来ない。

とつと彼女のフリでも何でもして帰りたい。

「うん。写真綺麗だったね」

引きつる顔に無理やり笑みを浮かべ答えると、海の瞳が揺れた。

「何時からだ？」

いつから付き合っている事にした方がいいんだろう？さすがに今日からじゃあね。

とりあえず答えに困ったので日下部君に視線を移す。

日下部君は相変わらずニヤついている。

「何？？気になんの？」

「女とつかえひつかえしてるやつが、桜音と付き合うのが嫌なんだよ」

女とつかえひつかえ

「……ってちよつと日下部くん！！まさか宮代先輩の事も！？」

「アホか、お前は！！先輩の事はマジだつもの！！じゃなきゃ馬鹿見てえに学校なんか来て、部活なんてダルい事するわけねえだろ。

大体遊びならわざわざあんな難攻不落のところにいかない。カメラが恋人って……もう人じゃねえし……」

そう言つて、頭を抱え込んでテーブルにふせってしまった。

「桜音を使つて俺をからかおうとしたらしいが残念だったな。日下部」

私と日下部君は、海の方をみると口元を上げ笑っている。

「別にからかおうなんて四割しか思つてねえよ。ただ確かめたかっただけだ」

「ねえ日下部君が確かめたかった事って何だったの？」

「お前この流れでまだわかんねえの？」
あきれ顔で溜息を吐くと、私の頭を軽く叩く。

「海。お前もやっかいなところあったな」

「まあな」

海は苦笑いでそれに答えていた。

今日は本当にいろいろあったな……

夕飯作ったら、ゆっくり休もうつと

「あ、でもな。こいつとデートしたのは本当だぞ」

この日下部君の一言のせいで、私は家に帰ってもゆっくり休む事は出来なかった。

間章 鬼ごっこ(前書き)

(海視点)

番外編みたいな感じで。

間章 鬼ごっこ

「あいつ何してんだ」

コール音がただ続く携帯に耳を当てながら、誰もいない廊下を歩く。放課後ともあって人がいない。

これが毎日ならどれだけ楽だろう。

勝手に写メる奴もいないし、うるさい声も聞こえない。

この間、日下部に桜音の存在がバレた。

思った通りうつとおしいぐらい人の恋愛に口を挟んでくる。

何処が好きだとか、どうやって知り合っただとか……

これが嫌だから隠してたというのに。

その上俺も協力するから、日下部と先輩の中をとりもてとまで言い始める始末。

今日第一回目の作戦会議を開く！！なんて言っただけで意気込まれた揚句これかよ。

「帰るか」

簡単なメールで先に帰る事を伝える。

これ以上一秒たりともあいつの為に無駄な時間を過ごしたくない。

家に帰って桜音と話がしたい。顔が見たい。

会話って言ってもまだ沈黙になる時があるし、当たり前障りのない話だけど前よりは進歩したと思う。

そう言えば、最近写真部の話を聞くな……

一応日下部に釘刺して置いたが。まあ、入らぬ心配だろう。

あいつは、先輩命みたいところがあるし。

「海……」

後ろから桜音に呼び止められた。

校内で目立つのが嫌らしく、普段はあまり学校で話さない。桜音に話しかけられるのが嬉しく、自然と笑みがこぼれる。走ってきたのか顔が薄らと赤く、肩で息をしていた。

「日下部君こつち来てないよね？」

「来てない」

「良かった」

ほっと胸をなでおろし、安堵の表情を見せる。

せっかく話しかけてくれたのに、日下部の事なんて俺としてはあまりおもしろくない。

「よしっ！あとはこのまま昇降口に行けば大丈夫」

「どうしたんだ？一体」

「日下部君に追われているの。これのせいで」

そう言つて右手に握る携帯に視線を移す。

それには俺が親父名義でやったホワイトデーのお返しのクマのストラップがついていた。

気に入ってくれているらしく、とても大事にしてくれている。

「日下部君が私の携帯にある宮代先輩の番号とアドレス教えろつて。私先輩に口止めされてて……なんか教えたら毎日でも掛けられそうだから嫌なんだって。」

それで無理つて言つたら、実力行使だ！！つて携帯とられそうになつたから走つて逃げまわつたの」

あゝ、なるほど。それは喉から手が出るほど欲しいはずだ。

しかしあいつは無理やり聞き出し事を知られて、株が下がるとか考えないのか。

でも真つ直ぐな所は羨ましいと思う。

あいつは伝えたい事を素直に言える。

それに引き換え俺は

「桜音……一緒帰ろうか？」

「ええっ!？」

顔を真っ赤にして、パニックを起こしている。

きつと普段の自分なら言わないだろう。

少し日下部に感化されたのかもな……

一緒に帰ろうって言っただけでこれなら、告白したらどうなるんだろっ

苦笑いをせざるを得ない。

「気をつけて帰れよ」

無理だと判断するまでもなく、俺はそのまま昇降口へと向かったーはずだった。

それはブレザーを引っ張る手によって遮られた。

「……途中からでいい？」

一緒に帰ってくれるって事なのか？

顔色を伺おうにも、俯いて見えない。

どうしてだ？

好かれているとは思っていない。その逆はあっても。

涙目で顔を赤くして抗議する桜音の反応が楽しくてからかっていると、私の事嫌いなんでしょ!？と言われたくらいだ。

「途中からでもいい。一緒帰ろうな」

誰かに見られるのを怖がっているんだろう。

勝手気ままに噂を流したり、俺に近づいてくる奴をけん制しているやつらがいるから。

「スーパー寄っていい？」

「ああ。今日の夕飯は何だ？」

「えっとね」

「逢月何処だ〜!!」

野太い声によつて、俺と桜音の会話は遮断された。

……これは近いな。

日下部の声が二階から聞こえる。

しかし厄介だ。

ここは階段下だから、降りてくるのも時間の問題。

「ちよつ。まだ追いかけてたの!?!ごめん、やっぱり先帰るね!?!」

「おい、桜音!?!」

そう言つて、桜音は走つて昇降口へと向かつていった。

「逢月頼む〜携帯〜」

叫び続けながら、階段をドタドタと降りてくる音が聞こえる。

おい、この声の主。俺の邪魔して覚悟は出来てんだろつな?

第三章 第一話 二人一緒

目の前に広がるのは、大きささまざまな大きさの箱と、それを包んでいた色とりどりの紙。

海がその光景を腕を組んであきれ顔で見ている。

その一方私はというと、まだ未開封の箱を開けていた。

あっ、これ紅茶のセットだ。

あとで焼き菓子と一緒に飲もうっと。

「お土産本当にいっぱい持ってきてくれたね」

「買ってき過ぎだろ。これは」

これらは全部ハネムーンから戻ってきた啓吾さん達が買ってきてくれた物。

海と一緒に暮らしてなんだかんだで、一か月以上経とうとしている。思ったよりも海との生活は大丈夫だった。

だって家事も手伝ってくれるし。

どうやら私に負担がかからないように気を使ってくれているらしい。以外と優しいのかも。

「海は何貰ったの？」

「パジャマとか、本とか実用性のある物ばっかだな」

箱と包装用紙を片付けながら、海は言った。

本ってやっぱ、日本語じゃないやつだよな？読めるの？

「海って英語話せるの？」

「日常会話程度しか話せない」

それ、十分だと思いますけど。羨ましすぎる。

「英語だけ？」

「フランス語とイタリア語なら少し」

「……海って何者？」
容姿端麗、運動神経抜群、頭脳明晰、その上金持ちとくれば向かうところ敵なしって感じがする。
弱点とか無さそう……

「桜音？」

海が怪訝そうに名前を呼ぶ。

弱点を探そうと、ぼーっとしてしまっていたようだ。

「あつ、パジャマなら私も貰ったよ。黒いやつなんてあるんだね」

「黒？」

「うん。ほら」

たしかこの箱だったよね。

数個積まれた箱の中から、中ぐらいの箱を取り出す。

それを開け、中からパジャマを広げて海に見せた。

「ねっ？」

それを見ると海は無言で携帯から誰かに電話をかけ始めた。

まもなくその人物が出たのか、大声で

「一体何を考えているんだ!？」

と怒鳴り出しはじめた。

「笑うな。は？他意はない？んなわけあるか。明らかに遊んでいるだろ!？」

しばらく何か話したあと、海は舌打ちをして電話を切るとソファに携帯を放り投げた。

眉をしかめ頭を抱えている。

「あの親父……」

一体どうなってるんだろう。

「海？」

そっと海の腕に触れ、話しかけた。

「桜音と俺のパジャマが一緒なんだよ……」
「は？」

ほらと言いながら海は箱を差し出してきた。

その中身は 同じだ。

襟元の白ラインも、胸元にあるこの服のブランドロゴも何もかも。

…… って事はお揃い！？

私が自分の親に貰ったものなら怒れるけど、啓吾さんじゃ話が違う。

「桜音、どうする？」

「せっかく頂いた物だし、黒いパジャマ持ってなかったから着たい
わざわざ選んでくれたんだし、一回は袖を通さなきゃいけないよう
な気がする。」

「わかった」

「海が着るなら、着ないから安心して」

「なんでだ？」

「だって私とお揃いになるんだよ。それじゃ嫌でしょ？」

「誰が言ったそんな事」

電話口で怒ってたじゃんか。

「いいの？一緒でも」

「桜音はいいのか？俺と同じでも」

私が聞いたのになぜか質問で返されてしまった。

返事の代わりに首をコクンと縦に動かす。

良いも悪いも今回はしょうがないもん。

「桜音がいいなら、俺もいい」

という理由で今夜から海とお揃いのパジャマを着る事になった。

この時の私はまだ実感していなかったんだ。

自分と同じ服を着た海を見た時の、あの気恥ずかしさを

第二話 理由なきムカツキ

ことわざとかって習っても結局日常生活ではあまり使わない。けど今なら使えるやつが一つある。

今の私の状況は背水の陣ってやつだと思う……

後ろを壁に正面を海に挟まれ身動きが取れない。

おまけに左右は海の腕があり逃れる事は不可能。

なんでこんな状況になっているのか、当の本人の私にもわかんない。

「どいてっば」

両手で海の体を押しつけようとしてみるけど、びくともしない。

「なんで！？またからかってるの！？」

海はすぐ赤くなる私をからかって遊ぶ時がある。

耳まで真っ赤とかいいながら。

今も顔が火照ってる。

「今回は違うよ」

「……じゃ何？」

「桜音が俺見て逃げたから」

あゝ、逃げたと思われぬように自然にやったのにな。だってコレじゃしょうがないじゃん。

今の私たちの格好は、お揃いのパジャマ。

こんなのって、ほらあれじゃない？まるで

「新婚さんみたいだから恥ずかしかったのー！」

海は溜息を吐き、こっちを見ている。

「自分が着るって言ったのに今さら？」

「うう……」

「ならお望み通り、新婚さんごっこでもするか？」

……ん？

誰がいつそんな事をしたって言った！？
したくない。はっきり言ってしたくない。
首を横に思いつきり降った。
それなのに海は私をだき抱えソファに座る。

「しないってばー!!」

海の膝の上に横向きに座らされ、逃げられないように腰に腕を回して引き寄せられる。

近い、近い。もう少して海の広い胸にあたる。

「こんなの新婚さんじゃない!!」

「ならどんな事するんだ？」

だってこんなの嫌がらせじゃん。

「えっ……イチャイチャ……？」

この語学力のなさど頭の回転の悪さをこの後ものすごく恨む事になる。

「わかった。これじゃ足りなかったんだな」

赤から青へ信号のように顔色が変わっていったと思う。

ち、違う。絶対何か変な誤解を

訂正する前に、頬に自分じゃない人の温もりを感じた。

それを感じるとともに、血の気が引いた顔に血液がまた集中する。

「俺に触られるの嫌か？」

「……嫌じゃないけど……」

今なんて言った！？嫌じゃないって言ったの!？

口が勝手に動いたんだけど!!

なんでそんな事を言ったのか驚きを隠せない私よりも、海の方が驚いていた。

目を丸くさせ、固まってしまっている。

もしかして今なら逃げれる……？
回されている手を解こうと、手をかけていると名前を呼ばれた。

「桜音」

思わず肩が大きく揺れる。逃げようとしたのバレた？

海の口は、私の予想外の事を告げた。

「キスしたことあるか？」

「微妙」

とりあえず聞かれたのでとっさに答えてしまったがその後後悔した。

何で私はそんな事を答えたの！？

そして海はいきなり何でそんな事を言い出したの！？

「何、微妙って？」

海は怪訝そうに眉をよせる。

こればかりは、微妙としか言えないんだよ……
話せば長くなるし。

「えっと、したかしくないかと言えばしたんだけど。キスっていうより何というか……え〜っとその……」

視線を下に向け、クッションをギュッと抱える。

私の煮え切らない様子に、海はイライラを募らせ不機嫌オーラを漂わせ始めた。

なんでこんな事で機嫌悪くなるの！？

「とにかくしたけど、これには理由があって話せば長くなるの……」

「明日休みだから別にかまわないけど」

えっ、話せと？

なぜいきなりファーストキスについて夜通しで語らなきゃならないの？

「私より海はどんなの？キスしたことあるの？」

突然の私の問いかけに海は体をビクつかせると、視線を泳がせはじめた。

別に聞かなくてもわかるよ。海ぐらいならいっぱい彼女居ただろうね。

しかも、モデル並みの綺麗な人達でしょ。

海の過去なんてわかんないけどさ。

頭の中に海とモデル系の美女とのキスシーンの映像が浮かんでくる。どうせ私は童顔だし、自慢できるスタイルじゃないもん。

足の長さとか、典型的な日本人だし。

あ、なんか怒る理由がないのに胸がムカムカしてきた。

「どうせキスだけじゃない事もしたんでしょ？」

私みたいなお子様と違って。

「さ、桜音」

腕を組んで頬を膨らませる私と、それを見てどうしていいか分からずなんとかなだめようとする海。

さっきとは立場が形勢逆転。

何とか楽しいことを考えようとしたりして、このむかつきを抑えようとしたけどやっぱダメだ。

私は一体何にイラついているの？

第三話 変わっていく何か

窓を雫が伝う。

雨はもうすっかり止んだけれど、空模様は悪いまま。

湿っぽい体育館の中、体を動かしたので汗で余計湿度が高く感じる。この時期は雨でグラウンドが使えないから、男子と半分にして体育館を使っていた。

広いはずの体育館もD組と混合のうえ半分しか使えないからひどく狭い。

「しっかし、王子人気すごすぎ」

みくは半分にする為に引かれたネットを掴み、横で黄色い声をあげている女の子達を冷めた目で見た。

ネットの向こう側では、男子がバスケットをしている。

あの女の子達の目当ては、海とそれに負けず劣らずの人気の千里ちゃんだ。

「見て、藤原君の腕。白くて綺麗〜触ってみたい」

「チツ。見んなよ、触んなよ」

舌打ちですか、みくさん。

あと、ネットそんなに力入れると破けるってば。

ただでさえボロいのに。

今は海のチームと涼・千里ちゃんのチームが対戦中だ。

「海君〜」

「在原くん〜!!」

「あいつ顔だけじゃん。あの女達もどこがいいんだかね〜。千里の方がいい男じゃん」

そう言っつていざ千里ちゃんが騒がれると、ものすごい怒るくせに。

視線の先の海は、コート内をバランスのとれた体で走りまわってい

る。

「……顔だけじゃないよ」

「どうした？急に。王子庇うなんて初めてじゃんか」

「別に」

「いやいやおかしいって。今まで全然興味なかったじゃん！！」

最近あんたおかしいよ。ぼーっとしてる事多いし」

わかってる。それはきつと、海のせい。

最近家でも学校でも気がつくと彼の事を考えている。

一見細いようだけど、筋肉質で抱きしめられると硬い体。

優しく見つめてくるビー玉のような瞳。

大きくて暖かい手。

はにかむ笑顔。

焼きついて離れない。

ギュツとネットを掴む。

頭冷やさなきゃ。

「桜音！！すごかったね、今の涼のシユート！！」

肩を掴まれて揺らされているせいで視点が定まらない。

涼とうちのクラスの人がハイタッチをしていた。

「入れたの？」

「まさか見てなかったの！？珍しい。いつも涼しか見てないのに」

「それは涼以外興味ないから」

今までは。

何かが私の中で芽生え始めている

「だよな……それにはさすがに千里に同情するわ」

「千里ちゃん？」

「あ、桜音は気にしなくていい」

手をパタパタさせ、何かを追い払うような動作を見せる。

「何それ」

「涼と付き合わないの？」

「話反らした!!」

「付き合っちゃいなよ」

「だから何度も言うけど、そういう関係じゃないんだってば。涼に聞いてみれば？同じ事言うから」

好きとかの次元じゃない。

特別なんだもん。

一人だった私に手を差し伸べてくれた大切な人。

あの教室で私を見つけてくれた唯一の人。

「でもさ」

「しつこいよ。みく」

「……ごめん。ただ安心したかっただけなんだ」

「なんで私と涼が付き合おうと安心するの？」

「桜音の事好きだよ」

脈絡のない告白に、顔が赤くなる。

「急に何言ってるの!!?また話反らした!!」

「ずるいんだ、私」

そう言っつて視線をまた隣のコートに向けた。

みくの瞳にはうつすらと雫がたまっている。

「あ」

「今度は何？」

「いや、なんか王子こっちみてるんだけど」

いつもと違い心底嫌そうな声が聞こえ、視線をそちらに移す。本当に海の事が嫌いなんだね、みく。

たしかに海がタオルで汗を拭きながらこつちを見ている。
誰を見ているんだろう？

首を左右に振って探すとすぐに見つかった。
きつとこの人を見ていたんだ

「あゝ、あの女か」

みくも気づいたらしく、私の隣に少し離れて座っている人を見た。
バスケット部のマネージャーの片桐さん。

長い黒い髪が印象的な人。美人で男子バスケット部内でも人気があるみたい。

微笑みながら、手を振る彼女を見て胸が軋んだ。
なんか苦しいよ……

「へへ。あの女と王子そういう関係？やたらベタベタしてると思っ
たら。」

「って桜音！！顔色悪いよ。保健室行こう！！」

胸を押さえたまま俯く私に、みくが背中をさすってくれた。

「一人で行けるから大丈夫。ごめん、先生に断っておいて
そう言い残して、足早に体育館を出た。」

一秒でも早くあの二人のいる場所から離れたかったから。

第四話 桜とヒナタ

『桜音が桜なら、涼君は日向だわ』

菜月おばさんにそう言われた時、妙に納得してしまった。

植物は光合成しないと生きていけない。

それと同じように中学の頃、涼がないと生きていけないと思っていた。

それぐらい依存していたんだ。

「桜咲いてないね」

「さすがに六月に桜が咲いてたら異常だよ」

Tシャツにデニム姿の涼は、窓際に居た私の所に歩み寄った。

二人して眺めている木々達は、春になると満開の桜を咲かせてくれる。

「どうして急にここに来ようって思ったの？」

「卒業してから一回も来てなかっただろ」

私達は中学校に来ていた。

急に涼から電話あって、行きたい場所があるって呼び出されたのだ。

「先生元気そうだったね」

「相変わらず俺、桜音の保護者扱いだったけどな……」

「私の方が少しだけお姉さんなのにな」

「姉って言うよりは、世話の焼ける妹って感じだろ」

頬っぺたを膨らまし、そっぽを向く。

四月生まれだから、数か月だけ年上だもん。

「ごめん、ごめん」

そうやって優しく頭を撫でてくれた。こうされると落ち着く。頭を撫でられるのは、昔から好き。よくお兄ちゃんがしてくれたからかな。

あゝ、私ブラコンだったんだよね。昔。途中から涼っ子になったけど。

「ねえ、ここの部屋覚えてる？初めて喋った場所」

五階の一番端、普段は誰も使わない空き教室。

この階は理科室や家庭科室しかなく滅多に人が来ない。

なのに桜の咲き誇るあの季節、涼が私を見つけてくれた。

「覚えてるよ」

うちの中学は私立でもないのに、幼稚園・小学校・中学校が併設されている。

だから入学式なのに、転校初日のような感じがした。

みんな幼馴染のように仲がよく、私はよそ者。

そんな空気が嫌で、休み時間に逃げ込んだのが誰もこないこの教室だった。

「あの時一人になりたくてさ。ブラブラしてたら泣き声が聞こえて入ってみるとうちのクラスのやつだった」

「泣いてる私に、涼は頭撫でてくれたよね。その後聞いてもいないのに一人でベラベラ喋ってさ」

「うるさかった？」

「ううん。嬉しかった。ここで涼と逢わなかったら、私ずっと一人だったから……」

休み時間事に涼はここに来てくれて、話相手になってくれたんだ。

あの時からすでにクラスのマードメーカーだったから、話す人なんていっぱい居たはずなのに。

涼は私にいっぱいくれた。

友達も出来たし、笑うこともできるようになった。
全部涼のおかげ。
まだ貰ってばかりいて何一つ返してあげられてないけど。

「だから涼が一番だった。私の世界を創ってくれた特別な人だから」

一人ぼっちだった私に、手を差し伸べてくれた優しい人。

「でもね、最近おかしいんだ。涼しかいらなないと思ってたのに、他の人が入り込もうとしているの……」

チユニツクの裾を握りしめ、大きく息を吐いた。

「……気づいたら視線で追ってて、その人の事を考えてる」
触れるたびに高まる鼓動。
名前を呼ばれるたびに切なくなる。

「知ってるよ。俺はずっと桜音の傍にいたから」

涼は泣きたいんだか笑いたいんだかよくわからない表情をした。

あまりそんな顔をしないから、急に不安になって涼の頬に手を添える。

その手に涼の手が重なった。

「大丈夫……？」

「平気だ。ただ、那智さんもこんな感じだったのかなって思ったんだ」

「お兄ちゃん？」

あしひきのなち
逢月那智。私のお兄ちゃん。

年が結構離れてて、今は結婚して家を出ている。

兄の座を取られたとかなんとか何癖をつけて、涼に無駄に対抗意識をもやしているんだよね。

この間は負けるとわかっているバスケット試合を涼に申し込んで敗北していた。

バスケット員とサラリーマンじゃ勝ち目がないのに。

「そういう気持ちかなんなのかわかる？」

首を横に振る。涼なら知ってる？

「そのうちわかるよ」

窓際から離れると、携帯を取り出して液晶画面を見始めた。

「もうこんな時間か」

「あーっ、はぐらかした！！人が真剣に考えてんのに！！」

「腹減ったな。昼何食う？」

「話変わってる！！」

「腹減んないの？」

「うっ、減った」

「この間新しい店が出来たんだけど、そこにしようか？桜音の大好きなデザート系もいっぱいあるらしいぞ？」

「そこに行く！！」

涼の腕をとり、せかすように教室を出た。

きつと言う通りそのうちわかるかもしれない。

『その子と付き合っの？……そしたら涼、私から離れちゃう。そんなの寂しすぎるよ』

『俺達の間係は何があっても変わらない。絶対一人にさせない。』

それに桜音にもきつと好きな人が現れるよ。そしたら寂しいのはきつと俺の方だ』

第五話 突然のお誘い時々奇妙な笑い声

「えっ……本当ですか！？ぜひ行きたいです！！」

あまりに勢い良く返事をしたせか、電話の相手は笑いを堪えているらしく声が漏れてくる。

だってこんな誘い滅多にないんだもん。

「はい。海と一緒にいきます。では、明日取りに行きますね。

はい、失礼します」

携帯をたたみポケットに入れると、一刻も早くこの事を話す為に急いで体育館の方向へと急いだ。

早く土曜になんないかな」

体育館ではバスケットとバレエ部がコートを半々にして練習していた。えっと、海は何処？

目立つからすぐにわかるのに、今日はなぜか見つからない。まさか居ないの！？早く言いたいのに！！

「あれ？逢月さん」

声をかけられたので、後ろを振り向く。

「木下君」

そこには木下君がドリンクを持って立っていた。

木下君とは中学が一緒の上、部活も一緒だった。

私が男子バスケット部のマネージャーで、木下くんは部員。

そのため、お互い顔見知りだ。

「涼だね。呼んでくるよ」

「うっん、違うの。海どこにいるか知ってる？居ないみたいなんだ

けど……」

「在原？涼じゃなくて？」

不思議そうな顔をしながら、確認を取った。

たぶん私がここに来る時は、涼ばかりだったから驚いているんだと思う。

それに、よりもよって呼んだのが海だったし。

どうやら木下君の話だと、外の水道に顔を洗いに行ったらしい。

さっそく行ってみるとＴシャツに部活用の黒いジャージ姿の海が、

タオルを持って体育館に戻ろうとしている所だった。

居た。

「海っ！！」

視界に入ると飛びつくようにして抱きつき、そのままギュッと抱きしめた。

海は固まったまま動かず、私のされるがままになっている。

「さ、さく……ら……ね？」

かろうじて吐き出された言葉は、とても小さくかき消えそうだった。抱き止める為にまわされた片手には力が入ってなく、ほとんど地面に踏ん張るようにして受け止めたんだろう。

正常な私なら、こんな事しない。絶対に。

この時はただ、水族館に行ける事が嬉しかったんだ。

「聞いて聞いて！！あのね、さっき啓吾さんから電話があったの。

隣町に新しい水族館が出来るの知ってる？そこでね関係者だけオープン前日に入れるらしいの！！それで招待状貰ったから土曜に海と行って来たらって！！」

電話の内容はオープン前日の土曜に関係者だけに中を解放するので、私と海に行って来たらどうだ？というのだった。

関係者といつても堅苦しいものじゃなく、職員の家族とかもくるから私でも大丈夫だから安心して楽しめるらしい。

人目を気にせずゆっくりと見てまわれるなんて嬉しすぎる。

水族館大好き。あの水面のキラキラ感、色鮮やかな魚、それにイルカショー……楽しみ〜。

馳せる思いに、思わず隠しきない笑みがこぼれおちる。

「ねっ、すごいでしょ！？人も少ないしゆっくり出来るんだよ」
さつきから全然反応が無いんだけど。

私ばかりしゃべってるじゃん。

「ねえ、海？聞いてる？」

うれしくないの？嫌いなのかな？水族館。

一人興奮気味にしゃべってたから、海の様子がおかしい事にまったく気付かなかった。

「ちょっと、顔赤いよ！？もしかして具合悪いの？風邪？」

海の顔は、私がかからかわれて赤くなるのと変わらないぐらい赤くなっている。

私と違って顔色なんてあまり変わらないはずのに。

「……え、あ」

そういえば、さつきからまともに会話が成り立ってない。

熱でもあるのかな？

背延びをしておでこに手を当ててみると、少し熱いような気がする。でもこのくらいなら大丈夫だと思うんだけど……

念のため保健室で測った方がいいかも。

保健室に連れて行こうとしたら、変な笑い声のせいでそれが出来なかった。

「あひゃひゃひゃ。あゝ腹痛えゝ。逢月、お前最高！！」

この声、絶対あの人だ

第六話 敵意

「日下部君、変な笑い方しないでよ……」

茂みから出てきた日下部君に、脱力しながら言った。

「でかした、逢月。ほら、よく撮れてるだろ」

「あ」

差し出された携帯の画面には、抱きあっている海と私が映し出されている。

何してんの、私！？抱きついちゃってるじゃん！！

それを見せられ意識してしまったのか、急速に顔に血液が集中してしまった。

「おっ、赤くなった」

「これでならないわけないでしょ！！」

「自分から抱きついていったくせに？」

「そうだけど、違うの！！」

「同じだろ」

こんなの理由を知らない人がみたら、誤解しちゃうじゃん！！

「消して！！」

急いでそれを取ろうとしたけど、届かないように腕を空高く上げられてしまった。

身長差的に、ジャンプしても届かない。

「無理〜。これではらくあいつで遊ぶから」

今だ固まっている海を見ながらニヤニヤしている。

それでどうやって遊ぶのかまったく検討はつかない。

「も〜、それよりどうしてここに居るの！？」

「おまえがシカトしたから、ブチ切れて追いかけてきた。おかげでおもしろいもんが見れたけどな」

「無視してないよ。第一、逢ってないもん」

「廊下ですれ違ったっつもの」
だめだ、覚えてない。なんとか思いだそうとしたけど、無理だった。
あの状態じゃ周りが見えていなかったもん。

「それよりお前どうすんだよ。映画。時間ねえぞ」

映画？

あつ……浮かれてて忘れてた。

たまたま見たい映画が一緒だったから、日下部君と行く事になったんだっけ。

携帯を取り出して時間を確認すると、今から行けばギリギリ間に合うくらいだった。

「行く!!」

「駄目だ」

声と共に後ろから腰に巻きつくように手が回されて抱き締められていた。

なんでダメなのよ!?というか、この状況は何!?

外そうと何度も身をよじらせるが、なかなかうまくいかない。

「ちよっ……海、離して!!」

「さつきはあんなに積極的だったのに？」

「あれは違うってば!!」

うっ、言わないでよ……

「起きたのか、海」

「誰も寝ていない」

「抱きつかれたぐらいで動けなくなるなんて、意外と純情なんだな。お前」

「それは桜音限定でだ」

海は私の肩に顎を乗せたまま、日下部君としゃべっている。
話すたびに耳元に吐息がかかってくすぐりたい。

「具合悪いんじゃないの!?さつきまで顔赤かったじゃん」

「ああ、あれはな〜医者でも治せ」

「何してるのよ!!!」

日下部君が口を開きかえると、ものすごい甲高い声がそれを遮った。三人してその方向に視線を向けると、片桐さんが息を切らせて立っている。

なんか物凄い目で睨まれているんですけど……

それを見ると海は顔をしかめ、日下部君は苦笑いをした。

ちよつと、いやかなり怖い。

たまらず腰にまわされている海の腕を手をギュッと掴んだ。

「悪いけど、今部活中なの。海を離してくれない？」

こっちは抱きつかれている側なのに、なぜか私に対して片桐さんは強く言った。

肌突き刺さるような視線に、歪んでいく顔。

いつかの体育の時に海に見せた表情とは対照的すぎる。

「ごめんなさい。海もごめんね」

「なんで桜音が謝るんだ。お前は悪くないだろ」

部活中に引きとめたのは私だもん。

「今回は仕方ないんじゃないかねえの？」

「わかつてる」

海は腕を離すと、

「水族館一緒に行くから。あとでいろいろ決めような」

と言って軽く私の頬を撫でると、片桐さんを置いて一人で体育館の方向へ向かって行ってしまった。

「待って!!!海」

すぐに追うようにして片桐さんもここを立ち去って行く。

「あのさ、片桐さんって海の事好きだよね？」
「おっ、さすがに鈍感なお前でも気づいたか」
「いくらなんでも、さすがにあんなに敵意むき出しなら気づくよ」
「涼を好きな子達からあれと似たようなのを昔感じた事がある。
あんなにあからさまなのは初めてだけ。」

「それよりお前気をつけるよ？女の嫉妬は怖いからな」
「大丈夫だよ。あんまり接点ないし。それに、私に嫉妬なんてする
わけないじゃん」

「お前な……」

腕を組んだまま日下部君はため息を吐いた。

「とにかく、気をつける」

「日下部君ってお母さんみたいだね」

クスクスと笑っていたら、頭を叩かれた。
痛いんですけど。

「だれがお母さんだ！！お前の保護者はもっているだろうが！！」

この時は危惧することなんて何もないと思っていたんだ。

第七話 ご機嫌な彼女

肩から提げた大きめの紙袋が歩きたびにガサガサと音を立てた。ううゝ邪魔だ。駅のロッカーにでも入れておけば良かったかも……

「土曜、それ着ていくのか？」

隣を歩いていたら日下部君が、紙袋に視線を向ける。

「うん」

この中身はさつき買ったばかりの新しい服。

一緒にみくと千里ちゃんも行ったんだけど、これを買うのすごく苦労したんだよね。

みくと日下部君が私の服選びを勝負事にしてしまったのだ。

おかげで服選びにもものすごく時間が掛っちゃった。

あれ千里ちゃんがみくを止めてくれなかったらまだ服選んでたよね

……

「それもいいかもしれねえけどよ、あっちの方が良かったんじゃないの？」

「あれは、短すぎるよ」

日下部君が選んだのは、ミニスカートや肩が大きく開いたサマーニットのような肌を見せる系の服ばかりだった。

ああいうのよくみく着ているんだよね。

一方みくが選んだのは、やたらフリルが付いた甘めの服。

結局二人の選んでくれたものじゃなくて、自分で選んでしまった。

「桜音さんが行く水族館って隣町に出来るやつですよ？あれって日曜オープンじゃないでした？たしか」

右隣に居る千里ちゃんが、首を傾げている。

みくはバイトがあつて帰ってしまったので、私と千里ちゃん日下部

君の三人という珍しい組み合わせなのだ。

「そうだよ。前日に入れる招待状貰ったの。だから人少ないからゆつくり見られるんだ」

「そうですか。それで桜音さん機嫌がいいんですね」

千里ちゃんが微笑んでいる。可愛い。

つられてこつちまで笑みが零れてしまったんだけど、この後の日下部君の一言で固まってしまった。

「それだけじゃねえだろ。なんせあいつとデートだもん」

……ん？

「デート!？」

思わぬ発言に声が裏返ってしまった。なんでそうなるの!？
なんで誤解をまねくような事を言うのかな。

「付き合っていないから、デートじゃないもん」

「でもあいつと二人つきりで出かけるの初めてだろう?あいつと一緒に出かけられて浮かれねえ女なんているかよ」

日下部君は初めてだって言うけど、海と二人で出掛けるのは初めてじゃない。

近くのスーパーになら何度か買い物に行った事はある。

でもそれとはちょっと違うような気がするんだよね。

そう言えば水族館とかそういう所は一緒に行った事がない。

そう考えると初めてになるのかな?

でも、デートじゃないよ。海と私は付き合っていないもん。

「おい、逢月」

「ん?」

日下部君が足を止めて後ろを見ている。

なんだろう……?私も振り返ってみると、千里ちゃんが顔を強張らせて固まっていた。

「あいつって誰ですか?」

声にはいつものように優しさが無く、どこか冷たい。

「……え？」

「涼じゃないですよ？涼とは何度も出かけてますから私、涼って一言も言っていないよ？なんで涼がでてるの？」

どうしたんだろう。今日の千里ちゃん様子が少し変だ。

たまらず日下部君を見ると、肩を竦められてしまった。

なんか空気に海の名前を出すと不味いような気がするのわかる。千里ちゃんとみくは私と海に接点は無いと思っっているし、なんせ相手は海だもん絶対驚く。

「誰です？そんな人がいるなんて聞いた事ないんですよ。ここところ機嫌がいいのは、その人とデートするからですか？」

普段の千里ちゃんからは考えられない強い口調。

「れ、蓮都……。蓮都だよ！！」

とっさに頭の中に浮かんだ甥っ子の名前を出してしまった。

あの目の中に入れても痛くない可愛い存在。

千里ちゃんは、私が甥っ子を可愛がっている事を知っている。

だから、何も不思議に思わない。……はず。

「蓮都って、桜音さんの甥っ子さんでしたっけ？たしか幼稚園の」

「うん。ほら、いつもお兄ちゃんか義理姉ちゃんもいるでしょ。今回は二人つきりなの。だから、つい服とか買って浮かれちゃったんだ」

「そうですか。驚いてしまいましたよ。日下部さんがデートなんて言うから」

千里ちゃんは良かったですと言いながらほっと息を吐くと、癒し系のオーラが徐々に戻り始めた。

良かったいつもの千里ちゃんだ。

けどなんで急に空気が変わったの？

「逢月。お前のとこ結構人間関係面倒なんだな」

「は？」

日下部君が耳元でぼそつと言った。

「お前は良いんだよ。どうせ鈍いから気付かないだろ」

そう言つて髪をグシャグシャにされてしまった。

鈍いつて何よ。

「それに気づくと厄介な事になるから、気づかない方がいいのかも
しれない」

第八話 嵐の前のいちやつき？（前書き）

今回少し長いような気が…

第八話 嵐の前のいちやつき？

「やつ！離して！！」

「桜音、そんなに暴れて暑くないのか？」

暑いよ。暑いに決まってるじゃん。

「だったらこの腰に回した手を離してよ！！」

「離したら逃げるだろ」

そりゃあ、逃げるに決まってるでしょ。

だってこんな状況が続いたら、心臓が持たないもん！！

外にいるからたまに風が吹いて涼しいけど、夏だしそれにこの状況がより暑くさせていた。

海は体育座りをしているような格好で、足と足の間に私を挟んで抱きしめている。

なぜかメールで呼び出されたのは屋上。

壁にもたれて寝ているのかな？と思って近寄ってみれば、こうなっていました。

何度もがいてもそこから脱出する事は出来ない。

「今、授業中なんだけど！！」

「どうせ自習だろ？」

「海だつてあるでしょ！？」

「俺らも自習。そんな事より昨日買ってきた服って、俺とのデート用って本当？すごい時間かけて選んでくれたんだって？」

デート……？土曜に出かける事を言ってるの？

付き合っていないからデートって言わないんじゃない……

「っていつか、なんで知ってるの！？」

海が迎えに来てくれた時言っただけ？

昨日、日下部君と千里ちゃんとの後、ご飯食べたりなんだかんだ

して少し遅くなってしまうた。

そしたら海が駅まで迎えに来てくれた。

駅から家まで徒歩五分だから近いんだけど、夜道の女の子一人歩きは危ないからって。

そしてなぜか暗いからっていう理由で手まで繋いで帰った。
街頭あるから転ばないのに。

「悪い。言ったの俺。昨日お前と遊び行っただって口滑らせたらいつ機嫌悪くなってるさ」

そう話したのは、うちわで仰ぎながら上半身をあられもない姿でいる日下部君だった。

「服着てよ!!」

慌てて日下部君から視線を外す。

「暑いんだよ。だだでさえ気温が高いのにお前らがいちゃついでるから、ますます暑い」

「いちゃついてなんかないってば!!」

日下部君のその台詞に早く海から離れようともがきまくった。

すると逃げられないように片手を私の腰に回し、空いたもう片方の手で髪を梳くように頭を撫でてくる。

うっ。私頭撫でられるのに弱んだよね……

あんなに暴れてたのに、すぐに大人しくなってしまうた。

「桜音はこっさされるのが好きか？」

だって頭撫でられるの気持ちいいもん。

「……すき」

体の力を抜き海にもたれるように身を預ける。

海が一瞬体を固くしたかと思うと、ふいに手の感触が消えてしまった。

「海、もっとう」

「っ」

もつと撫でて欲しくて、海におねだりした。
だってもつと撫でて欲しいんだもん。
すると頭を撫でてくれるどころか、なぜか強く抱きしめられ海の胸
に埋まってしまった。
ワイシャツのゴワゴワした感触を感じる。

「何！？何も見えないんだけど!？」

視界は白一色。

「わいすぎる」

は？海が何か言ったらしいが良く聞こえない。

なんとか頑張つて顔を見ようとしたら、

「桜音、今こつち見ないでくれ」

と言われて頭を手で固定されてしまった。

なんなの一体。

あれ……？

「海」

「何？」

「大丈夫？」

「何が」

「心臓の音すごいけど？」

「っ」

海の返事の代わりに、日下部君の笑い声が聞こえてきた。

「残念だな、お前。今、海すげえおもしろい事になってっぞ？」

しかし、これを全校生徒に見せてえ。クールな王子の意外な一面っ

て学校新聞の一面飾れるぞ」

「えっ、見たい」

見たいけど視界は相変わらずのまま。

「ちよつと待て、今写メを……」

「撮るな」

ボタン

海の低い冷たい声と共に聞こえたのは、ドアの閉まる音だった。
ばたん？

「……………って！！今誰か居たの！？」

この状況を見られたのなら、早く口止めを　　！！誰だかわかんないけど誤解なんです！！

ようやく緩められた腕から抜けだし、海達を見るが一向に焦る様子がない。

「居たつていうより、覗いてたが正解だな」

「あれは覗いてたつうより、ただ入れなかつただけだろ」

「何でそんなに二人共冷静なの！？」

「あゝ心配しなくていい。あいつは誰かに言うとかはしねえよ。っ
うか出来ねえ」

「日下部君知ってる人なの？」

「あれはお前も知ってる奴だ」

……………知ってる人？

「今頃見たこと後悔してるはずだ。これでやっと俺と状況が対等だ
という事がわかるだろ」

海はあざ笑うように言葉を吐き捨てた。

海も知つてて日下部君も知ってる人つて事は

「涼？」

「なんで涼なんだ」

「水谷なら遠慮せず入ってくるだろ」

「言っておくが俺はあいつと直接面識はない。ただ通りすがりざま
に睨まれたり、優越感に浸ったような目で見られるだけだ」

えっ、それって嫌われてるんじゃないの？

「嫌いだろうな」

心が読めるのか？今私が思ったことを海が口にした。

「嫌うつつか、ライバル視だろ」

「どうでもいい。とにかく渡すつもりはない」

そう言っただけでまだ離していなかった腕に力を込められ、また海の方に体を寄せられてしまった。

何を渡すつもりはないんだらう？

第九話 バッドタイミング

ロッカーを開け、教科書を取り出す。

良かった、早く気づいて。

みくと帰るために一緒に昇降口まで来た時に、ふと忘れた事を思い出したのだ。

宿題出たのすっかり忘れてちゃってたんだよね。

「忘れ物ですか？」

「千里ちゃん」

花を抱えドアの所から教室を覗いていた。

千里ちゃんは華道部だから、たぶんあの花は部活で使うんだろう。

視線が合うと、優しく微笑まれる。

花が似合いすぎるよ。

「うん。数学の教科書」

「ああ、たしか課題が出されてましたよね」

「千里ちゃんは部活？」

「ええ」

「そっか。もう少し話してたいけど、みく昇降口に待たせてるから行くね？」

「ああ、そう言えば中庭であの人みましたよ」

話もそこそこ切り上げて昇降口に行こうとしたら、千里ちゃんの言葉で止められてしまった。

あの人……？

誰だか分からず首を傾げる。

「在原海です」

海の名前が出て思わずビクつく。

なんで私にその事を言うの？勘ぐりすぎだよな？ただの世間話みた

いな物のはず。よし、ここは軽く流そう。

「へー、そうなんだ」

「バスケット部のマネージャーと二人でいましたよ。知ってました？あの二人毎回部活一緒に行ってるみたいですよ。仲が良いですよね」
そう言っつてニッコリ笑った千里ちゃんはどこか意地悪。

「そうなんだ……」

そんな事知らなかった。知りたくもない。
なぜかその話を聞いて急に気分が重くなってきてしまった。
頭に浮かんできたのは、片桐さんの隣で笑っている海。

「付き合ってるって噂もありますよね。美男美女同士お似合いだと思いますか？」

「そう……だね」

痛む胸を押さえ、どうにか言葉を返す。

「どうしたんだろう、苦しいよ。」

「たしか他にも」

「ごめん、千里ちゃん。私、みく待たせてるからそろそろ行くね……」

「お引き留めしてしまっただようですね。それじゃあ、気をつけて桜音さん」

これ以上ここに居て二人の噂を聞かされるのが嫌だから、みくを理由に教室を出た。

なんで今日に限って千里ちゃんこんな事言っつもの？

噂話なんて今まで一回もしたことなんてないのに

「私、何しに来たんだろう……」

気づいてたら昇降口ではなく中庭に居た。

覗き見なんて良くないし、もう居ないかもしれないじゃん。
みくも待たせているし帰ろう。

公舎に戻ろうとしたら、僅かだが声が聞こえた為その方向に足を進める。

居た。

でも遠いせいか、何を言っているかまでは聞こえない。

一応見つからないように物影に隠れてみる。

片桐さんが海の腕にすがって何か捲し立てるように言ってるように見える。

海の様子は後ろ姿だけなので分からない。

何か揉めてるのかな……？

聞こえてくるのが所どころの声なので、よくわからない。

見過ぎてしまったのか視線に気づいた片桐さんと目があってしまった。

やばっ、気づかれた!!

片桐さんは一瞬目を大きく見開いたかと思うと、口角をあげた。

えっ、何？

嫌な予感する

「桜音さん、何してるんです？」

えっ!?

突然声を掛けられて思わず大声を上げそうになり、手で口を押さえる。

いつの間にか背後には、千里ちゃんが立っていた。
なぜこのタイミングで!?

「千里ちゃん……どうしてここに……？」

「あっ」

「えっ？」

なっ

千里ちゃんの声に急いで視線を戻すと、海と片桐さんがキスしていた。

足に力が入らず、思わず地面に崩れてしまう。

手が震え、唇がやたら渴いてくる。

どうしてこんなに動揺してるの？キスシーン初めて見たから？

「なんで……？」

呼吸が上手く出来ない。

嫌だ。

第十話 涙

「大丈夫ですか？」

気づいたら、もう二人はいなくなっていた。

力が抜けて動けないよ……

私は崩れ落ちたままの体勢でいる。

千里ちゃんがかけてくれる気遣いに何の反応も出来ない。

たださつき見てしまった事に思考が支配されてしまっていた。

それを振り払うように頭を左右に振る。

もしかしたら、見間違えかもしれない……

そういう風に見えただけかだよね、きっと。

「キスしてましたね」

「っ」

そんなわずかな思いも、千里ちゃんの言葉で打ち消されてしまう。

自分でなんとか誤魔化そうとしても、他の人に言われてしまったら意味がない。

目から落ちる雫がスカートにシミをつくっていく。

「どうやら噂も本当のようですね」

「やめて……」

そんな事今言わないで。

止めたいのに、涙が止まらない。

なんでこんなに嫌で仕方がないんだろう。

「桜音さんは泣いても可愛いんですね」

そう言っただけ千里ちゃんは私の顔を輪郭に沿うようになぞると、顎に手をかけ顔を上げさせる。

千……里ちゃん……？

「んっ」

突然眼尻に這った感触に体がビクとなった。

千里ちゃんの唇。

それが涙をすくっていく。

「やっ」

感触はだんだん眼尻から頬へと移っていつている。

このままじゃ唇にあたっちゃう！！

思わず目をぎゅっと瞑ったけど、唇にその感触が落とされる事はなかった。

「それ以上やったら、お前確実にこいつに嫌われるぞ」

この声

千里ちゃんの視線はすでにその声の人の向いている。

日下部君どうしてここに……？

「気持ちもわからないでもねえけどよ」

「……余裕ゼロなんですよ」

「だからこんならしくねえ事してんのか？こいつ泣いてるじゃねえか」

「これは僕だけのせいじゃありません」

涙と腫れぼったい瞼のせいで視界が悪い。

ぼーっとしか二人が見れず表情までは見えない。

「お前もいつまで泣いてんだ」

日下部君が溜息を吐き、しゃがんで視線を合わせる。

「……っく。泣いてないもん」

泣き顔見られたくないから、涼以外の前でなんてめったに泣かないのに、

今日に限って千里ちゃんや日下部君に見られるなんて。
手でゴシゴシと涙を拭いたせいもあってか、痛い。

「だあ〜っ、こするな！！赤くなるだろうが！！濡れたタオルとかで拭け」

似たような事昔誰かに言われたような……

『だあ〜っ！！こすんじゃねえよ。赤くなるだろうが！！ハンカチでも濡らして拭け』

あれ？一瞬学ランを着たピアスの男の子の姿が頭をよぎったような

……

顔は靄がかかったように見えなかったけど。

「お前、何キスされそうになってんだよ」

「なつてないよ！！そういうのって普通好きな人としかししないでしょ！？」

好きじゃなくてもする人もいるけど、千里ちゃんはそういうタイプじゃないし。

「僕は好きな人としかしたくないですよ」

「ほらっ。千里ちゃんもそう言ってるじゃん。だから、私にキスしようとしたなんて言いがかりをつけないで」

「お前な、あの状況でそれか」

そりゃあ、私だってキスされるかと思っただけど私にそんな事しても何の得もしないから違うもん。

「日下部君は大きなため息を吐くと、いきなり私を米俵のように担いだ。」

「うわっ」

「行くぞ」

「何処に！？」

日下部君の肩に体重を預けるように担がれている。

揺れる！！揺れる！！

「掴まっていけないと落ちるからな」

落ちるといふ言葉にビビり、とりあえず日下部君の首に腕を回す。必要以上の力を加えてしまったのか、ぐうえという声が聞こえた。

「馬鹿かお前は！！そんなに締め付けると死ぬだろうが！！」

「ごめん」

「藤原は少し頭を冷やせ」

千里ちゃんを残し、私達は中庭を後にした。

「隙だらけなんだよ。お前は」

それ涼とか海にも言われた事あるけど、隙って何なの？

白い机に薬品が綺麗に並べられている棚、カーテンのある数個のベツト。

日下部君に連れてこられたのは、保健室だった。

ちよつど先生が居なく、部屋には二人だけ。

ここっていつ来ても、消毒液の匂いするんだよね。

「ほら、これで目冷やせ」

「ありがとう」

差しだされたのは濡れタオル。日下部君がさっき自分の部屋のようにその辺をあさって探し出してくれた。

「横になりたいきや、そこにあるベツトで寝てろ」

「どっか行くの？」

「ああ。お前の鞆、中庭に置きっ放しだったろ？あれとってくる」

「いろいろごめん」

迷惑掛けっ放しだ。

「気にすんな」

扉の開く音と一緒に、人の気配が消え一人だけ残されてしまった。ほんの一時間ぐらいの間にいるいろいろすぎる。

「はあ……」

扉の開けられる音と一緒に人が入ってくる気配がした。

あれ？もう戻って来たの？

「日下部君、早いね」

返事がないって事は、もしかして違う人？あつ、みくが探しに来たのかな？

タオルを目にあているから、何も見えない。

「悪いけど、私は日下部君じゃないわ」

返ってきた返事は、今私が一番聞きたくない人の声だった。

第十一話 崩れる景色

ゆっくりと目を覆っていたタオルを取ると、そこに居たのはやっぱり予想通りその人だった。

こんな時ぐらいいは外れてくれればいいのに。

「部活で使っている湿布がなくなったから貰いに来たの」

黒い長い髪はしっかりと結えられ、Ｔシャツにハーフパンツのジャージを着た片桐さんが立っていた。

私を見るなり不敵な笑みをこぼす。

「目どうかしたの？」

「……別になんでもありません」

「そう？赤くなって腫れてるみたいだけど。ちゃんと冷やさないと駄目よ」

返事は返さずただ手を握りしめる。

日下部君早く戻ってきてよ。

二人っきりの空間がやけに重い。

この人と一緒に居たくない

変だ、私。片桐さんに何かされたわけでもないのに。

耐えきれなくなり保健室から脱出しようとして、片桐さんの横を通り過ぎようとしたんだけど出来なかった。

片桐さんが私の腕を掴んだからだ。

なんで……

「私湿布のある場所分らないの。探すの手伝ってくれない？」

「ごめんなさい。時間ないんで」

「いいじゃない。それとも私と居たくない理由でもあるのかしら」
「別に」

「そうなの？てっきり私と海がキスしてるのを見てしまったからだ
と思ったんだけど」

「っ」

思わず顔をあげると勝ち誇ったような笑顔を見せられ、理由のわからない苛立ちを覚えた。

「凶星？」

鉄の味が口の中に広がって気持ち悪い。

どうやら無意識に噛みしめていたようだ。

「悪いけど、海に近づかないでくれる？」

「……そんなの片桐さんと関係ないはずですよ」
痛っ。

掴まれている腕がさらに圧迫される。

「でしゃばらないで。あれを見てまだわかんないの？海は私の彼氏
なのよ」

「彼氏……」

「そうよ。私の彼氏に纏わりつかれると迷惑なの。海は優しいから
貴方を邪険に出来ないのよ」

たしかに、自分の彼氏と仲良くする女の子はうっとおしいだろう。
前に涼に彼女が居た時も似たような事を言われた。

「あつ、これ秘密ね。彼の恋人となるといろいろ大変でしょ？周りが
煩くなるし、嫌がらせとかにもあっちゃうもの。もしばれても、
きつと海が守ってくれるから安心なだけだね」
止まったはずの涙がまた溢れ出す。

掴まれてた腕が自由になり、鈍い痛みだけが残る。

痛いのは腕だけじゃない。

「あら、どうして泣いてるのかしら？どこか痛むの？
クスクス笑いながら片桐さんは顔を覗き込んできた。

コイビト……カレシ……

頭の中はもうすでに真白。

揺らぐ足元で、ただ立っているのが精いっぱいだった。

第十二話 秘密の場所

「……………」

唇を結んで鳴き声を漏らさないようにしているけど、それは無意味な事だった。

誰も居ないから思いつ切り泣けるけど、そうはしたくない。そうしてしまえば、きつと止まらなくなってしまふ。

「やだよ……………海……………」

海と片桐さんが付き合っている私には関係ないはずなのに。変な敗北感と共に、何かモヤモヤしたものが私に纏わりついている。なんで？自分の事なのにわかんないよ……………

保健室で片桐さんと逢った後、気がついたらここに来ていた。

ここは小高い丘にある小さな教会。

さすがに鍵がかかっているから、中には入れないので階段に座っている。

ここに来たのは中学以来。

ある人が教えてくれた秘密の場所。

空には星が輝き、辺りは静寂で包まれている。

あれからどれくらい時間が経ったんだろう？

すっかり暗くなっているから、時間は結構経過しているはず。

……………今何時なのかな？

携帯で確認しようと、ポケットを漁ってみたけど探しているものは見つからなかった。

あ、鞆の中にしまったままだったんだっけ……………

どうしよう、そろそろ家に帰らないきゃ。明日も学校あるし……でも帰りたくない。

帰ったら、海が居るもん。そしたら絶対また思い出しちゃう。そうでなくても、しつこいぐらい頭に焼きついてるのに

自由に眠る事が出来ればいいのになあ。そしたらその間は考えなくて済むもん。

痛みだした胸を押さえ、壁にもたれ掛かり目を閉じかけるがすぐにまた開いた。

誰かに名前を呼ばれたような気がしたのだ。

気のせいじゃないよね……？

「音！！桜音！！」

やっぱ聞こえる。

誰かが私を呼んでいるらしく、その声がこの教会に近づいて来ている。

海……？　　じゃないよね。

ここを知っているのは、一人しか居ない。

ここを私に教えてくれたあの人

立ち上がり、声のする方向へと向かった。

「あゝ、涼？」

私を探していたのはやっぱり涼だった。

どうしたの？と聞くまもなく無言で抱き寄せられてしまい、今現在にいる。

何度となく感じたことのある体温は少し高く、走ってきたのか耳に掛かる吐息も熱い。

もう二度と離さないともいうぐらいに腰に回された腕は、私を強く固定している。

「……良かった。やっぱりここにいたんだな」

やっと発せられた言葉は弱々しいものだった。

もしかして私の事探してくれてたの？

「ごめんね、涼。もしかして迷惑かけちゃった？」

「桜音の事で迷惑なんてないよ。それより、あいつも心配して探してるから電話しないと」

左手で私を抱きしめたまま、右手で制服のズボンから携帯を取り出すと誰かに電話をかけた。

「桜音いたよ。ああ、大丈夫。は？来る？ここに？駄目、教えない。ここは俺と桜音の秘密の場所だから」

誰としゃべってるんだろう？

口パクでダレ？と聞くと、海だよという答えが返ってきた。

えっ！？海！？

「今から桜音を家に送るからそのまま」

「嫌っ！！家には帰りたくない！！」

涼の言葉を遮り、大声でそれを拒絶すると涼は目を大きく開いた。

「どうした？家に帰りたくないのは、海のせいなのか？」

首を縦にコクンと動かし、涼の制服にしがみついた。

やだ。会いたくない。

「わかった。それじゃあ、家においで。うちは桜音の事いつでも歓迎しているから」

「だめだよ。迷惑かけちゃうもん!!」

「さっきも言っただろ？桜音の事で迷惑な事なんてないって。それに、お袋達も桜音に会いたがってる」

でも……

「というわけで海、桜音は今日俺の家に泊まるから。じゃあな」
そう言っつて涼は携帯の電源を落とすし、ポケットにしまい込んだ。
なんで電源ごと切ったんだろう？

第十二話 秘密の場所（後書き）

そのうち桜音と涼の過去編とかもかけたらな〜と思ってるんですけど、なかなかタイミングと文章力が……（――；）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！！

第十三話 涼の家

「悪かったな、騒がしかっただろ」

「ううん。おばさん達と会ったの久しぶりだったし」

涼の言った通り、水谷家の人々は私を歓迎してくれた。

本当は目が腫れてたから心配されると悪いので、涼の部屋に直に行きたかったんだけど。

でもそれも私の危惧に終わってしまった。

どうやら私が一人暮らしをして寂しくなって泣いてしまい、涼を呼んだと思っただけらしい。

「涼の部屋久し振りだね」

「そういえば、最近来てなかったもんな」

ベットに背を預けながら、辺りを見回す。

壁には有名バスケット選手のポスターが貼られ、雑誌や漫画が床に置かれていたりしている。

海とは正反対に生活感がある部屋だ。

中学の時は毎日のように入り浸っていたな。

「桜音、海が原因ってどういう事？」

「それがよくわかんないの。海に付き合ってる人がいるって聞いて

「

「ちょっと待て。誰に恋人がいるって？」

麦茶を口元まで持ってきてきていた涼の動きが止まる。

「やっぱ涼も知らなかったんだ。」

「だから、海だってば」

「桜音、それ何かの間違いじゃないのか？」

「間違えじゃないもん！！だってキスしてたんだよ！？それに片桐

さんも付き合ってるって言ってたもん!!」
うう……言葉にしたらまた涙出そう。
それに気づいた涼が、指で雫を払ってくれた。

「それで靴学校に置いていなくなったのか？」
首を縦に動かす。

「だから海と顔合わせづらいから、家に帰りたくなかったのか？」
その質問にも首を縦に動かした。

「涼、わかんないの……なんでこんなに気になるの？だって海が誰と付き合っても自由でしょ？なのにキスとかもして欲しくないの」
涼はクスクス笑っている。

人がわかんなくて頭の中混乱しているっていうのに、なんで笑ってるの!？」

不機嫌になったのに気づいたのか、涼は私の頭を撫でた。
うっ……さすが私の弱点を知り尽くしている。これじゃ、機嫌戻っちゃうよ。

「別に桜音を笑ったわけじゃないんだよ。ただ、あいつがそれを聞いたらどうなるか想像しただけなんだ」

あいつ？

涼は視線を窓辺に移すと、闇夜を照らしている月を見つめる。

その瞳は揺れてどこか不安定だ。

「……もう少しなんだな。まさかこんなに早く来るなんて思ってもいなかった」

「何がもう少しなの？」

一度目を閉じゆっくりと開くと、意地悪な笑みを私に向けてきた。

「教えない」

「何で!？」

「俺はもう少しこのまま桜音とこうしていたいから」

「は？」

「まあ、気にするな。それよりあいつ大丈夫かな」

涼は切っていた携帯の電源を入れると、何かボタンをいじり始める。そして画面を見ると、溜息を吐きだした。

「すつげー、メールの数」

涼は携帯のボタンを数回いじると、それを耳にあてた。
誰にかけてるんだろう？

「よお、大丈夫か？」

『！！！！』

電話の相手が大声を出したのか、涼は携帯を耳から遠ざける。
その時、とぎれとぎれだが声が聞こえてきた。

日下部君？

「やっぱり機嫌悪かったか、海は。……ああ、やっぱりそうだったか。は？なんで電源切ったかって？携帯の電源入れると、理由聞くまでかけてきそっだったからさ。……そんな怒鳴るなってわかってるから。ああ、悪かったって。……泣くなよ。今、桜音に変わるから」
そう言っつて携帯を渡される。

「もしもし？」

『もしもしじゃねえよ！！』

「あつ、やっぱり日下部君だ」

『お前な、海がいるから帰りたくねえとか電話口で言うな！！本人に丸聞こえだろうが！！』

あ、やっぱり。だってあの時はそれどころじゃなかったんだもん。
海、気にしてるよね……

『いいか、よく聞け。海はとりあえず俺が学校に連れ出すから、一

日家に帰るならその後にしる。鞆はお前の部屋に置いておいたから
「あつ、鞆届けてくれたんだ。ありがとう」

「ああ、今すっげー後悔してる。こんな事になるなら届けんじゃな
かったっつうの。」

本当はお前らの同棲生活についても追及したいが、今はそれどころ
じゃない。いいか、海に会うのは学校が終わってからにしる」

やっぱ会わなきゃだめだよ。このままっていうわけにもいかない
し。

それに心配して探してくれたみたいだから、謝らなきゃいけないも
んね。

「とりあえず放課後までに俺がなんとか宥めておく。そのまま会っ
と、たぶん危ねえ」

「なんで危ないの？」

「海がキレてるからに決まってるだろうが!! あいつマジ怖かった
んだぞ!!……逢月、マジで頼むからいろいろ察せ。あいつが不憫
でしょうがない」

大きく溜息を吐きだすと、水谷に代わってくれと弱々しく言われた。
日下部君が溜息吐くの初めて聞いたかも。

海がキレてんのって絶対怖い。考えただけで寒気が。

でも日下部君が宥めてくれるって言うってたし、大丈夫だよな？

日下部君と海は小学校からの付き合いらしいし。

そんな考えが甘いという事を次の日身をもって思い知るなんて、こ
の時の私は知る由もなかった。

第十四話 捕らえられたお姫様

少し前を歩く人物は後ろを振り返ると、私が付いてきているかどうかを確認した。

まったく、これで何回目だろう……

前を歩く人 岸君に少しうんざりしながらそれでも足を進め着いて行く。

「岸君、ちゃんと着いて行くから大丈夫だよ。そんなに心配なら、やっぱりいつもの通り隣歩くよ？」

そっちの方が自然だし。

「だ、ダメだよ！絶対一メートル以上距離置いて。これは絶対守って！いい？わかった？」

手で壁を押さえるようなしぐさをしながら、こっちに来るなど言わんばかりに強制的に距離を取らされる。

それなら何度も確かめないで欲しい。

朝、教室に行くとD組の岸君が待っていた。

思えばその時から様子がおかしかったんだよね。

だって両手で握り拳を作って教室の前で棒立ちしてたんだよ？

それ見たみくなんかは、「ちよつと！こんな所で告白！？」なんて騒ぎ始める始末。

話を聞くと委員会が緊急に決まったらしく、わざわざ呼びに来てくれたそうだ。

「一昨日保健委員会あったばかりなのに、一体なんの用なんだろうね」

「……………」

岸君は何の反応も示さずにそのまま歩き続けている。

声の大きさに聞こえたよね。

もしかして無視？

気まずい雰囲気には耐えきれず、いつものように何気ない会話をしようとしたのに。

委員会仲間として結構仲良くしてもらっているはずなのに、今日の岸君は私とやたら距離を置こうとしているように見える。

まるで私と関わりたくないように。

もしかして嫌われちゃったのかな……？

足を進めるにつれて、人の気配が遠ざかって行く。

本館と西校舎を繋ぐ廊下ぐらいからすれ違う人が居なくなってきた。西校舎は視聴覚室などの特別教室や空き教室ばかりだからあまり人が来ない。

その為ものすごく静かで二人の足音だけが響く。

「岸君ここなの？」

足はしし教室の前で止まった。

あれ？なんか変。

ドアの前に立つとおかしい事に気づいた。

ドア越しに人の気配がまったくしないんだけど。

二・三人なら気付かなくても済むけど、委員会だから大人数のはずだ。

それならすぐにわかる。

「逢月さん、先入って」

入りたくない。ううん、入れない。体が拒絶して動こうとしないよ。誰だって危険だと思った所にわざわざ自らのり込んだりしない。

「早く」

初めて本能というものを認識したのか、先を促す岸君に首を横に振り拒否した。

「ごめん逢月さん!!」

「は？」

じれったくなつたのか岸君がドアを開け、入りたくない領域に私を放り込んでしまった。

手と足に絨毯の感触と少しの痛みを感じる。

「痛い……」

なかなか中に入ろうとしない私に業を煮やしたのか、あろう事か岸君は突き飛ばしたのだ。

その上廊下を走る音が聞こえたから、たぶん逃げたんだと思う。

突き飛ばした上に逃走って酷いよ、岸君。

一体何がしたかったの？

そんな私の疑問は、すぐに消える事となる。

ドアの閉まる音に鍵の掛けられる音

そしてドアの前で私を見下ろしている人を見た瞬間に。

第十五話 亀裂

空気が重く息苦しい。

だんだんと指の先端から体が冷たくなっていくのを感じる。

海は突き飛ばされて崩れたままの体勢の私をただ見下ろしていた。その表情には感情というものを感じない。

日下部君が昨日、たしか機嫌が悪いつていつてたはず。

でもこれは機嫌が悪いという部類ではない。

海の顔の精巧な仮面をかぶった他人ではないのか。肌突き刺さるような視線に、威圧的な空気。

こんな海知らない。

昨日の事あやまらなきやと思っても、風邪をひいて喉を傷めた時のようになかなか言葉を発する事が出来ない。たった一言のごめんなさいを言いたいの。伝えたい事を伝えられない事が酷くもどかしい。それなのに、心とは反して体が強張って仕方がなかった。

「……海」

やっと蚊の鳴くような声で出たのは、名前だった。

すると今まで微動だにしなかった海が、崩れたままの私を抱きかかえると、近くのイスに座らせてくれた。

「怪我は？」

首を横に大きく振る。

それを信じてなかったのか海は跪くと、怖くて握りしめていた掌をゆっくりと解き怪我をしていないか見た。

掌を見終わると今度は膝を見ようとしたから、そつと海の肩にふれてそれを制止さる。

妙に心配症なところはいつもと同じみたいだ。

この間も包丁でほんの少し指を切っただけなのに、傷口からばい菌が入るかもしれないからと消毒をされた上に絆創膏を貼られたしまった。

その後、紙で手を切ったぐらいの深さだから放置しておいても平気なのについて言ったらものすごく怒られたっけ。

そんな事を思い出してたら、こわばりが少しずつ取れてきた。

「ありがとう。大丈夫だから」

良かった……。ちゃんとしゃべれる。

海は肩を掴んでいた手を外すと、両手で優しく包んだ。

「俺が居るから帰りたくないって電話口で言ってたよな？」

うっ。やっぱり聞こえてたんだよね。

「あれはどういう事だ？」

それを言ったら海と片桐さんのキスシーンを見ちゃった事を言わなきゃいけないっちゃうじゃん。

嫌だよ。海の口から片桐さんと付き合ってるなんて言葉聞くの。

「今日はちゃんと家に帰るから」

「答えになってない」

じゃあ、言えばいいの？

気になるから、片桐さんと付き合わないでって。

……そんなエゴ的な事言えないよ。

「ねえ、海。なんで私と住んでるの？」

一瞬包んでいた手がピクリと動いた。

「お父さんに頼まれたから一緒に住んでいるの？」

「 そうだ」

そう答えたのを聞いた瞬間、何もかももうどうでもよくなった。もういいや。

答えはこれで正解なはずなのに、それが酷く悲しい。

私はそれ以外の理由が聞きたかった。

だってまるで義務みたいじゃん。

「……わかった」

だから、私に優しくかったんだね。同居人だから。

私と住んでるのも、頼まれたから仕方無くなんだ。

思考はマイナスのほうばかりに傾いていく。

「もういいよ。私一人で大丈夫だから」

「桜音それは、一体どういう意味だ？」

「わかんない？」

「とにかく、こっち向け」

俯いてた顔を無理やりあげられそうになって、思わず伸びてきた手を弾いた。

「触らないで」

止めてよ。瞳に溜まった涙を流さないようにしているんだから。顔をあげてしまったら、バレちゃうじゃんか。

「もう、海とは一緒に暮らせない」

第十六話 さよならを告げるとき

最初はこんな人と一緒に暮らせないって思った。

学校でも見かけるだけで一回も話したことがない相手だったし、冷めてる顔しか見たことなく人間味を感じなくて少し苦手だった。それに男の人だし、なにより私とは違いすぎる人だったから。

私は人ごみに溶け込めるぐらいの平凡な人間なのに、海は違う。

学校でもファンクラブがあるし、家はお金持ち。

この同居は、庶民と王子様が民家で共同生活するようなもの。

そう思ってた。

けど実際暮らしてみると、違った。

肉じゃがが好きだし、思わず見惚れてしまう笑顔を見せてくれたりする。

学校では知られていない海の顔を知っていく。

それが私には嬉しかったんだ。

だってそれを知っているのが、私だけなのかなって思ったから。だから海との同居は後悔してない。

ただ我儘を言えば、もう少し傍にいてもっといろんな表情を見たかった。

S H Rの終わりを告げる鐘が、教室内に響く。

あと数分もすれば一時間目の授業が始まるだろう。

早く出ていかなきゃ。

じゃないと、もしこの教室使うクラス来たら見つかったっちゃう。でも、離れたくないよ。

心がそう思っているせいか、体がなかなか動こうとしてくれない。

それでも時間は刻一刻と進む。

秒針の音にせかされてしまい、私は仕方なくゆっくり立ち上がると海の横をすり抜けドアの前まで歩いた。

歩いているうちに振動でだんだんと溜まった涙が頬を伝って、床へと落ちていく。

まだ泣くな。あと少し、この教室を出て海から見えなくなるまで。見られるわけにはいかない。こんなぐじゃぐちゃの顔。

ガチャンと鍵をはずした音だけがやけに耳に残る。

指に残る冷たい鉄の温度がこれが現実なんだと告げた。

バイバイ、海。

ドアを開けると生暖かい風が、頬を撫でつけた。

「そんなにあいつの傍がいいのか」

足を一步廊下に踏み出すと、海の抑制のない声が降ってきた。

突然飛んできた怒りを含んだ声音に、体が竦む。

「あいつって誰……？」

咄嗟に海の方角を見てしまい、慌てて視線を廊下に戻す。

青い空を白い雲が悠々と泳いでいる。

顔見られてないよね。

振り返ったほんの一瞬だけ見えたのは、立ったまま俯いていた海の姿。

「どうやったら、お前とあいつの絆を断ち切る事が出来るんだ？」
海の言っているあいつの存在がわからない。
それに絆って……

「それって、たぶん俺の事を言ってるんだと思うよ」

なんでここに？

さっきまで見えていた青空が、薄い水色のニットに変わった。
人の気配を感じると共に、目の前にその声の主が姿が現れる。
走ってきたのか顔には少し汗をかき、第二ボタンまで開けられたシ
ヤツを掴みパタパタと仰いでいた。

涼

その人物が涼だと認識すると、不思議と安堵感に包まれた。
よかったこれで大丈夫。
そう思ったなら、強張った体の力が抜けてきた。

第十六話 さよならを告げるとき（後書き）

ブログ始めました。

何の変哲もない更新履歴とつぶやきが書かれています。

お暇な時にでもどうぞ。

http://tripxcandy.blogspot.com/

第十七話 向けられた嫉妬心

「熱いな」。桜音、中入って。少しクーラーで涼みたい」
そう言っ出て出ようとしていた私を教室の中に押し込めると、自分も入った。

涼はこの緊迫した状況なのに、相変わらず自分のペースを崩してない。

「なんでここがわかったんだよ」

「岸が桜音がやばい事になってるから、助けてくれって。それで、どうして桜音は泣いてるんだ？」

そう言っ涼は、頬を流れる涙を指ではじくように拭いた。
岸君、逃げたんじゃなくて涼を呼びに行ってくれたんだ。

「桜音に触るな」

涼の醸し出す日向のような空気とは反対に、海の空気は指一本動か
せないぐらい張り詰めている。

その声に体がまた硬直した。

せっかく大丈夫と思ったのに。

「海、あんま桜音を恐がらせるな」

「なら、触るな」

怒鳴る海の声を無視して涼は、大丈夫か？と言いながら私を抱きしめると、泣いてる子供にするみたいに背中をとんとんと軽く叩き宥めてくれた。

私、もう高校生なんだけど……

でも、これ不思議と落ち着くんだよな。

「桜音、そいつから離れる」

声に反抗するように、私は涼の背中に手を回し水色のベストに顔を

埋める。

暖かい。

クーラーのききすぎた室内のせいで、少し冷えていた体にはちょうどいい体温だ。

すると海は舌打ちをすると、無理やり私を引き剥がすと涼から少し離れ、距離を置いた。

掴まれている二の腕が痛みで痺れる。

「やだやだ。涼、涼っ！！」

「他の奴の名前なんか呼ぶな！！」

それでも涼に助けを求めながら、掴まれた腕を外そうと何度も振ってみるがなんともならない。

なんで機嫌悪いの！？ううん、機嫌が悪いつてもんじゃない。これは怒ってる。私が、何かしたの？

「俺、前に言ったよな。そういう感情、俺に向けてもきりないから辞めろって」

睨む海をしり目に、涼は淡々と話しながら一歩ずつ足を踏み出し距離を縮める。

そして私たちの前まで来ると、大きな溜息を一つ吐きだした。

「あんな、俺は桜音の面倒見るので精一杯なの。だから、お前の事まで面倒みる気がないんだけど」

「誰もそんな事頼んでない」

「なら少し大人になってくれ。他の事だと冷静に対処出来るのに、桜音の事になるとこれだ。じゃないと、桜音を任せる事はできない」

「無理に決まってるだろ。お前と違って俺には、ちっぽけな鍵に鍵りつく事しか出来ないんだからな。それすら奪われようとしてんの、」

どうやって冷静になれっていうんだよ！！」

海は掌が痛いんじゃないかってぐらい机を叩くと、さっきより声を荒げて叫んだ。

うっ、痛そう。絶対赤くなってるよ。

涼はそれ見て顎に手をかけ、首を傾げ何かを思案したかと思うと、

「お前、もしかして、桜音と一緒に暮らせないとか言われたわけ？」
と言った。海の肩がビクンとわずかに動く。

それを涼が見逃さなかった。

「ああ、なるほど。それでこの状況か。もしかして桜音が泣いてるのもそれが原因なのか？」

私は首を縦に動かす。

うん。だって、さよならしなきゃいけないから。

「そうか。なら、泣かなくていいぞ」

「……ほんと？」

「ああ。だって桜音のただの勘違いだから」

そう言うてにこやかに笑うと、海の手から私の二の腕を解放してくれた。

まだ掴まれてる感覚がするその腕をさする。

そっか、ただの勘違いか。良かった。これで問題解決。

って何それ!?

「付き合っていないって事!？」

「ああ」

「じゃあ、キスしてたのは!？」

「それは海に聞いたらしい」

あんなに止まらなかつた涙は、いつの間にか止まっていた。
もっと早く教えてよ、涼。

「これは二人の問題だから、首挟まないようにしようと思ったんだけどさ。桜音泣いてたから、今回だけ特別」

「おい、ちよつと待て。全く話についていけないんだが、一体どういうことなんだ？」

「くわしくは桜音に聞け。おまえさ、こんな事ぐらいでこれじゃあ、これからどうするんだよ。頼むからちゃんとしてくんない？」

たとえ勘違いであろうと、桜音を泣かせないぐらいになって「涼はそう言っつて、射抜くように海を睨む。

それを海はそらす事なく受け止めた。

「……悪かった」

海は、ばつの悪そうな顔をした。

海もそんな顔するんだ。

なんて事を考えているぐらい少し余裕が出てきた私を、涼の一言でそのわずかな余裕を打ち消してしまった。

「とにかく、二人で話あつて」

ちよつと待つて。まさか……

「桜音も勝手に結論づけしないで今度からちゃんと見えよ。な？」

ぽんぽんと私の頭を軽く叩くと、涼は片手を振って教室から出て行ってしまった。

ちよつと待つてよ。置いて行かないでっ！！二人つきりは嫌！！

もしほんとに私の勘違いなら、状況的に不味くなる可能性があるんですけど。

だってここまで振り回しておいて、「ごめんなさい勘違いでした」だけで済ませてくれる相手じゃない。

絶対いじめられる。

涼を追いかけようとしたけど、また腕を掴まれてそれを阻止された。

「どついう事だか説明してくれるよね？桜音」

壊れかけのゼンマイ仕掛けのブリキ人形のように、ぎこちなく海の方角を見る。

その瞬間ものすごく後悔した。

だって、今まで見たことのないような笑顔をこっちに向けていたから。

あの、目が笑ってないですけど。

うう………すごく嫌な予感がする………

第十八話 海的罰の執行

「 という理由なの」

私は中庭で見たことや保健室での片桐さんとの話、そして家に帰らなかった理由を話した。

さすがに二人の仲が気になって仕方がなかった事には触れていない。

「なんでそんな事信じたんだよ」

海はあきれ顔で溜息を吐いた。

「だって……片桐さんも言ってたし、キスしてたように見えたし」

「あれはただ引っ張られて触れただけで、キスでもなんでもないだろ」

よく考えればそうなのかもしれないんだけど、あの時はショックのあまり頭が回らなかった。

「……本当にごめんなさい」

謝罪の言葉を述べ頭を下げた。

肩下まである少しくせのある髪がぱらぱらと落ち左右の視界を遮る。

許してくれるかな……

おそろおそろ顔をあげ向かえに座る海の様子を窺いたいが、怖くてそれが出来ず目を瞑ったまま。

ほんの二・三秒しかたつてないはずなのにすごく長く感じ、自分の鼓動の存在だけがやたら大きく感じる。

「とにかく今回は涼が間に入ってくれてなんとかあったけど、次はどうなるか分からない。だから、今度からちゃんと俺に言うんだ。

ほんの些細な事でもいいから。それから、すぐに人の話を鵜呑みにするな。本来なら良いことだと思うけど、桜音はそれが極端すぎる」

「はい。本当にごめんなさい……」

「わかったなら、顔あげて」
声のトーンは普段と変わらないように思える。
視線を海の足から顔にかけて少しずつ上げていくと、海は机に頬杖をついてただこっちを見ていた。
その表情はいつも学校で見せてるように冷めていて、表情が読めない。

「……許してくれるの？」

「ああ」

「また一緒に住んでくれる？」

「そうしてくれなきゃ俺が困る」

海が苦笑いで応えた。

それを聞いて安心して、少しだけ体の力が緩やかになり握りしめていたスカートを放す。

強く握りしめたためか、紺色のプリーツスカートは皺になっていた。
良かった。

「安心するのはまだ早いんじゃないか？桜音」
えっ……

その言葉に顔の筋肉が強張った。

「まだ話は全部終わってない。藤原千里の事が残っているだろ」
えっと、千里ちゃんの事？

なんでいきなりそんな話になったか分からず、首を傾げると海の手が頬に添えられた。

「警戒心の無さすぎた桜音に、罰を受けて貰わなければならないと思わないか？」

自分でも早かったと思う。

その言葉を聞いて、脱兎の如く教室を逃げ出した。

「桜音、俺を撒けると思ってたの？」

最初は思ったよ……だって、追いつかれる！！って思ったら逃げ切れたんだもん。

さすがにそんなのが何回か続くと、おかしくない？ってなったけど。たぶんきつと海は遊んでたんだと思う。

「諦めれば？」

近づいてくる海から少しでも遠ざかるために足を一歩ずつ後ろに下げながら、すぐに硬い物体にぶつかりこれ以上さがれなくなってしまう。

やばい、もう壁。

「海、絶対こうなる事わかってたでしょ」

海は返事の代わりに口角をあげた。

ずるい。ずるすぎる。だからやすやすと教室から逃げれたんだ！！よく考えてみれば、いつも海は逃げ出す前に私を捕まえるもん。

結局運動部に勝てるわけもなく、上手く誘導されるように追いかけて回され、結局行き止まりに追い込まれてこうなってしまった。

廊下の一番奥に私と海は二人向かい合うように対峙している。

もう逃げ道ないじゃん。

どうしようかとあれこれ考えるが、最良な考えが浮かんでこない。

「本当に無防備すぎるし、無警戒すぎるよな」

「気をつけるから！！今度から気をつけるから！！」

「駄目。桜音って口で言ってもわからなそうだし。だから消毒も兼ねて教えてあげなきゃならないだろ？」
「しょ、消毒って……まさか!？」

海の端麗な顔が近づいてきたかと思うと、頬に何か柔らかいものが当てられたのだ。

それが唇だとわかると、全身の血液が沸騰するような感覚に襲われた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ!!ちゃんとするから!!」

状況が余りのみこめてなくせに、その場から解放されるためにひたすら謝り続けた。

「桜音、わかってないだろ」

「わかってるよ。わかってるから!!」

一回頬にされただけで心臓は早鐘だし、体は逆上せたみたいになる。

あと数回されてしまったら、絶対身が持たないよ。

そうなってしまう時の事なんて想像出来ない。

「もうこれで消毒終わり。一回しかされてないもん」

たぶん日下部君に「あいつキスされてたぞ」みたいな感じで聞いたと思うから、誤魔化せるかもしれない。

「そうか」

「そうだよ」

もう乾いた笑いしか出ない。

「おかしいな。『桜音さんの泣き顔は可愛らしいですね。肌も柔らかいですし。何度唇を合わせても足りませんでした』って聞いたんだが？」

海の眼が細められ、鋭い視線とかちあった。

えっ、聞いたのって千里ちゃんに！？千里ちゃんがそんな事言ったの！？

「日下部君に聞いたんじゃないの？」

「日下部には、藤原と桜音がちょっとあったってしか聞いてない」

「そうなの？」

「今朝わざわざ藤原千里自ら、うちのクラスに報告しに来たんだよ。海は顔を歪め忌々しそうに言った。」

なんでそんな事を。しかもよりによって、海に言うなんて。

「ああ、そうだ。された場所言つて。じゃないと消毒出来ないだろう？もしまだ誤魔化そうとしたら、いっばいするから」

「いっ……ば……い……」

あっ、血の気が引いてくらっときた。

私の逃げるすべは、もう見回りの先生に見つかるしかないのかもしれない

第十九話 出された条件

「な、消毒どうだった？」

「ゴホッ」

やばい。

隣に座る日下部君の問いかけに、飲んでいた紅茶が気管に詰まった。私と日下部君は、中庭のベンチに座っている。

良かった、放課後で。昼休みとかなら、人も多いから絶対視線が集中してたよ。

咳きこみながら、なんとか落ち着こうと鎖骨の下辺りを叩く。

それを見た日下部君は、「やっぱな」と言いながらニヤツと笑った。

あの朝の消毒から数時間後になってやっと平常心を取り戻す事が出来た。

それなのに

なおも笑っている日下部君を睨む。

やっと気持ちが落ち着いたんだから、その話には触れないでよ。

ほんと顔は赤いし挙動不審だしで大変だった。

みくには何かと勘ぐられたし……

「っっていうか、なんで知ってたの!？」

「あ、それ適当に言った。海の奴ああいう性格じゃねえか、だからまさかと思ったんだが本当にされてたんだな」

日下部君は、ソーダー味のアイスに齧りつく。

さっきすぐそこにあるコンビニに買いに行ってきたものだ。

あ、冷たくておいしそう。やっぱ私も買ってきて貰えば良かった。

「お前もよ、流されてばっかじゃなくてたまにはちゃんと拒否れ。」

嫌なら、殴ってでも海を止める。海だけじゃねえ、藤原の時だって
そうだ」

「……うん。でもね、いい訳するわけじゃないけど海のは嫌じゃな
かったんだ」

千里ちゃんの場合は、海の事で頭回んなかったからよく覚えてないけ
ど。

「は？」

「あつ！！アイスやばそうだよ」

水色のアイスはやけに片方にだけ重心が片寄っていて、溶けた液体
が棒を伝って日下部君の指に流れている。
落ちちゃうよ。

「それどころじゃねえよ！！」

いや、でもアイスが……

「お前それどういう意味かわかってんのか？」

「何が？」

「そうくると思った。お前だもんな。んじゃあ聞くが、もし俺にキ
スされたらどうする？」

「宮代先輩に言いつける」

即答で答え、膝の上に置いてある雑誌をめくった。

「怖え……一瞬想像しちまったじゃねえか……。そういう事じゃな
くてよ」

日下部君は、「あ」とか言いながら地団駄を踏み始めた。

「まったく雑誌なんて読んでんじゃねえよ！！お前の事だろうが！！」
「あつ」

立ち上がった日下部君に雑誌を取り上げられてしまった。

ジャンプして取り上げようとしても、届かない。

これ今日中に読んで、みくに返さないといけないのに。

「つまり俺じゃ嫌だつて事だろ？んじゃあ、他の奴はどうだ？水谷は？」

「なんで涼が出てくるの？涼でもキスは無理だよ。言っておくけど他の人も無理」

「それつて、海だからいいんだろ？」

「なんか海だからつて限定しちゃったらまるで私が海の事『好き』みたいじゃん。

「好き……？」

日下部君があきれ顔でこつちを見ている。

「私、海の事好きなの！？」

そつえば今考えるとそれっぽい事は多々あつたよつな気がする。

片桐さんとの関係がやたら気になつて仕方無かつた事とか。

「俺に聞くな！！」

うそでしょ！？普通感覚でわかるのに、こんな風にしてやつと気づくなんて……

あゝ、頭が混乱してきた。

「……私つて鈍くない？」

「まあ、それは結果オーライつう事で。それと言っておくが、まだ気づいてねえ事あるからな」

「これの他に！？」

「ああ。けど、それももうすぐ解決するからいい。行くぞ」

日下部君は、私の腕を掴むと立たせ校舎の中に連れて行くつうとする。

「もしかして、体育館に行くとかじゃないよね？」

「よくわかつたな」

やつぱり、そんな事だと思つた。

告白なんてしたら、一緒に暮せなくなつちゃう。

「言わないからね」

「なんでだよ」

「振られて気まずくなったらどうすんの！？私、唯一の接点なくすんだよ？」

「んな、振られるとはかぎんねえだろ」

「かぎるよ！！」

掴まれていた腕を振りほどく。

だって高嶺の花すぎるじゃん。私なんかじゃ無理だよ。

「海には言わないで。絶対に」

「さく、わかんねえな」

絶対言う。この口調だと。

口止めしなくちゃ。日下部君の弱点は……

あっ、あった。けどこれはさすがに可哀想。でも背に腹はかえられない。

ごめんね、日下部君。

「もし言ったら、二度と宮代先輩と遊び行く時誘わないからいつもよりはつきりとした口調で告げた。」

「はあ！？お前、それ俺にとって一番の脅迫じゃねえか！！」

そうなのだ。日下部君は宮代先輩と遊びに行くには私がいらないと行けない。

なぜなら、二人で遊びに行こうと誘っても断られるから。

「お前そういう奴だったのかよ。……わかったよ。そのかわり、今すぐじゃなくてもいいから絶対自分の気持ちは伝える。」

あと、少し自分に自信を持って。お前はなさすぎる「それって告白しろって事！？」

「悪いがこれを約束しなきゃ言う。部長の事は自分でなんとかするからいい」

それじゃあ、うんっていうしかないじゃない。でも

「答えは？」

「うう………わかった。自身の方はなんとか頑張ってみる。でも、告白するのはすぐ先になるかもしれないよ？」

「あ、構わないだろ」

条件付きでなんとか口止めに成功したものの、難易度が高すぎる。

はあ………私、これから先どうなるんだろう。

ハロウィン企画 Trick or Treat? (前書き)

*このお話はもう二人が付き合っている設定になっています。

ハロウィン企画 Trick or Treat?

「イタズラしねえの?」

「……は?」

思わず歩いていた足を止め、隣を歩いていた人を見る。

日下部君はコウモリの描かれた袋からクッキーを取り出すと、それを口に運んだ。

日下部君が食べているのは、パンプキンクッキー。

さっきまで部活だったので、その時作ったものをあげたのだ。

同じようにその時作ったものをもう一つ持っている。

それは海にあげるものだ。

「だからよ、今日はハロウィンだろ。あいつに堂々とイタズラ出来るじゃねえか」

たしかに今日はハロウィンだからイタズラが出来る。

でもそれはお菓子をくれない時であって、貰えば意味がない。

「あいつ菓子とかたぶん持ってねえぞ」

「そうかもね。でも、海の事だから絶対倍になってかえってくるからしないよ」

「ああ。あいつなら絶対そうするな」

「でしょ。まあ、海が寝ている時とかなら話は別だけどね」

「寝ている時」

「うん」

だって寝ていれば気づかれないから、イタズラしたことがバレないもん。

それなら、やり返される事もないし。

「逢月」

「ん？」

「悪いけど、部室に忘れもんしたから先に海と帰ってくれ」

「えっ、うん。わかった。じゃあね、バイバイ」

「おう。またな」

そのまま日下部君と別れ、海の待つ教室へと向かった。

えっ、寝てる。

海は机に伏せて寝ていた。

珍しい。ここまで近づいても起きないなんて……
今、手を伸ばせば触れるぐらいの距離にいる。

『イタズラしねえの？』

「っ」

日下部君にさっき言われた言葉が頭によぎる。

今がチャンスじゃない？

もう一人の自分の囁きにあっさりと負けてしまった。

「Trick or Treat？」

起こさないように消えてしまおうぐらい小さい声でそつと呟く。

お菓子くれないからいいよね……？

というか寝ているから返事なんて出来るはずない。

机に隠れていない頬にそつと唇を落とす。

普段なら恥ずかしくて自分からは絶対にしない。

でも今は、海が寝ているから……

「唇じゃないのか？」

海は上半身を起こすと、こっち側に体ごと向けた。

「起きちゃったの!？」

「いや、寝てなかった」

「なんで寝たふりなんかしてんの!？」

「日下部からメール貰ったんだ。寝たふりすれば良い事あるかもしれないって」

よけいな事を!!

私もイタズラなんてよけいな事をしちゃったのよ……

「まさか桜音にこんな可愛いイタズラされるなんてな。ハロウィンも悪くない。俺も楽しもうかな？」

「いつ、言っておくけどお菓子持ってるからね!！」

お菓子があるから海は私にイタズラ出来ないはず。

良かった、今日部活あって……

「Trick or Treat？」

海は意味深な笑みを浮かべる。

えっ、何で？お菓子があることを知っているじゃん。

不思議に思ったけどお菓子を差し出す。

海はそれを受け取ると、机の上に置いた。

「これはいらない」

「な……んで……？」

いつも喜んで貰ってくれるのに。

「そんな悲しそうな顔するなよ。俺がこれを貰ったら、桜音にイタズラ出来なくなるだろ？だから、これはイタズラが終わってから貰う」

「……。」

それって

いそいで机の上に置かれた袋を取り、それを海に押し付けた。

「いい。ほんとイタズラとかいいから！！お菓子あげるから！！」

「だから、これは貰うけど終わってからって言ったる？」

その後攻防戦を繰り広げた結果

私が白旗を掲げ、甘いイタズラを受けてしまった。

ハロウィン企画 Trick or Treat? (後書き)

というわけで、ハロウィン企画でした。

ここまで読んで下さった方がとうございました。

第四章 第一話 準備完了

「うわ〜」

鏡に映しだされる自分に思わず感嘆の声をあげた。

毛先は緩やかに巻かれ、顔もメイクによって少し大人っぽくなっている。

やっぱりすごいや。自分じゃここまで出来ないもん。

いつもと違う自分の姿に思わず笑みが零れた。

「気にいって貰えた？」

「うん。ありがとう、香澄義理姉ちゃん」かすみおねえ

イスに座っていた体を捻り、後ろでチークブラシを持っているボブカットの女性にお礼を言った。

彼女は逢月香澄さんあいつきかすみと言って、私のお兄ちゃんのお嫁さん。

つまり義理のお姉ちゃんにあたる人。

美容師をしていて、ここは香澄義理姉ちゃんが働いているお店。

今日は海と水族館に行く日なので髪とメイクをやって貰いに来たのだ。

「気にいって貰って良かった〜。でも、桜音ちゃんがデートかあ。

那智君なちが知ったら卒倒ものね」

そんな卒倒って、一緒に出かけるぐらいでおおげさだよ。

って言えないのがお兄ちゃん。

お兄ちゃんと私は年が十五離れていることもあってよく可愛がってくれるんだけど、少し行き過ぎた所がある。

お母さん達からはシスコンって言われているんだよね。

「桜音ちゃん、絶対あの人に見つかっちゃ駄目よ。そんな事になったら、二人の中を絶対邪魔しちゃうから。」

それに、芋づる式に同居の事がバレでもしたら大変な事になるわ」「うん。気をつけるね」

「今日は南町に行くって言ってたから大丈夫だと思うけど、一応用心するに越したことはないものね」

お父さん達に聞いて同居自体は知っているけど、男の人 海と同居している事は知らないのだ。

女の人だと思っっている為、お兄ちゃんも遠慮して頻繁に出入りしていた家には来ない。

その替わり私がお兄ちゃんの家にも二週間に一回のペースで顔見せに行っている。

香澄義理姉ちゃんの説得がなければ週一だったんだよね……

「たしかこの後、お友達が迎えに来てくれるんだったわよね？」

「うん。バイクで乗せて行ってくれるって」

携帯を取り出し、時刻を確認すると九時半になるうとしていた。

ここから待ち合わせ場所の臨海公園までは車で十五分だから間に合う。

「来たら姉さんが知らせに来てくれるから、お茶でも って来た
ようね」

ノックの音が聞こえた後、ドアが開けられ董すみれさんと日下部君が入って来た。

「あら、可愛い〜」

そう言ったベリーショートの女性は董さん。

香澄義理姉ちゃんのお姉さんでこの店長さんだ。

「ずいぶんめかしこんだな」

「気合い入り過ぎに見えるかな……？」

「いや。いいんじゃないか。しかし、女は化粧すると印象変わるな」
たぶんそれは、義理姉ちゃんにしてもらったからだと思う。

私がすると化粧しているのかわかんなくなるもん。

「じゃあ、そろそろ行くか　……と言いたいところだが、あの俺になんかついてます?」

日下部君が怪訝そうな顔で見つめた先を見ると、義理姉ちゃんが顎に手をあててじーっと日下部君の顔を見ている。

一体どうしたんだろう?

「あ、ごめんね。ちょっと気になった事があって。ねえ、どっかで会ったことない?」

「ないと思いますけど」

「いや、あると思うんだけど……」

そう言っつて義理姉ちゃんはまだ考えこんでしまった。

前にお客さんとして来たとかかな?。

そんな事をぼんやり思っていたけど、まさかその事に私が関係していたなんてこの時は微塵も思わなかった。

第二話　なんでここ？

臨海公園は土曜ともあって家族連れやカップルで賑わっていた。

私と海が待ち合わせたのは、公園内の大時計広場前。

ここなら目立つし、水族館まで徒歩五分圏内だから場所的にもちよ
うどいい。

こういつ時つて、あの人達が居なくなるまで待った方がいいの？それとも待たせてるから行った方がいいの？

私は頭を抱え、刻一刻と近づいている約束の時間に追われていた。

さっき時計みたら十分前だったよね。もう海来ているし……

日下部君が見たら、きっと早く行けって怒鳴るよね。

溜息を吐きだすと、時計台の下にいる男の人とその前に立つ二人の女の人に目を向けた。

それは海と、海に声をかけていると思われるお姉さん二人組。

二人とも雑誌から抜け出た人のように綺麗でおしゃれだ。

私は今あのお姉さん達が居なくなってから行くか、それとも今行くかで迷っていたのだ。

……やっぱ行こう。それに待たせるのは悪いもん！！

ざっと見れる範囲で自分の格好を見て確認する。

よし、ゴミとかもついてないし汚れもないし大丈夫。

やっと決心して足を踏み出したんだけど、肩を叩かれ止められてしまった。

誰？

中途半端に踏み出した足を止め振り返ると、見知った男の人が立っていた。

上は英字がプリントされたTシャツに水色のストライプの半袖シャツを羽織っていて、下は薄い茶色のパンツを履いている。

「千里ちゃん!？」

私の驚きを余所に千里ちゃんは穏やかな笑みを浮かべている。

えっ、なんでここにいるの？

「おはようございます。桜音さん」

「お、おはよう」

「今日、髪巻いてるんですね。メイクもされてなんだかいつもと雰囲気違いますね」

千里ちゃんはそう言って、ゆるやかに巻かれた髪を指に絡ませる。

「……うん。ちょっとやってみらったの」

「その服も桜音さんに似合ってたて、可愛らしいですよ」

「ほんと？良かった」

私の今日の格好は、白の胸下切り替えのキャミワンピに肩からカゴバックを下げている。

そして足元はリボンモチーフのメタリックゴールドのウェッジソールミュールといった感じた。

白い服って汚れが目立つからあんま着ないんだけど、これは裾の所がフリルになっているし、

左胸の所には花を模したコサージュが付いているのが気に入ったんだよね。

海も可愛いって思ってくるといいな……ってそんな場合じゃない!!!

千里ちゃんをなんとかしなきゃ。じゃないと海の所に行けない。

「千里ちゃんもこっちに用事があったの？」

「ええ」

「そっか」

どうしよう。海にメールして待ち合わせ場所変更してもらった方がいいのかな？

そんな事を考えていると、頬に自分じゃない人の体温を感じた。

は？

メールを打つ為に開いた携帯から目を離し、千里ちゃんの方を見ると、浮かべていた穏やかな微笑みが消え真面目な顔になった。

えっ、何？どうしたの？

「実は僕、告白しに来たんです」

「告白？」

「はい」

「千里ちゃん好きな人居たの？」

「居ますよ」

誰なんだろう。みく知ってんのかな……

考えても全然見当がつかないや。

うちのクラス？それとも他のクラス？

「桜音さんは相変わらず顔に出やすいですね」

思案してたのがバレたのか、千里ちゃんがクスクスと笑いだしている。

自分ではわかんないけど、よく言われるんだよね。

だからあんま嘘つけないからポーカーフェイスの人が羨ましい。

「その上、鈍い」

「あゝ、それも言われるんだよね」

「でしようね。でも正直、最初はそれで助かってました。気づかれなければ気まずくなりませんから。」

「けど、そう呑気にしてられなくなってしまったんです」

「なんかこの流れって……」

「いや待って。そう考えるのはただの自意識過剰なだけかもしれない。」

「だって、千里ちゃんは校内でも海と人気を二分するような人だよ？まさか、そんなわけではない。」

「本当に顔に出やすい人ですね。そのままですよ。僕の好きな人は桜音さんです」

第三話　もしかして押しに弱い？

「……わた……し……？」

頭と口が上手く働かない。

生まれて初めてされた告白はものすごく複雑なものだった。

だって相手は友達の　みくの好きな人。

「信じられませんか？」

信じるも何も状況にまったくついていけない。

だって千里ちゃんなら相手に困らないし、もっと可愛い子とかいるし……

「　なら信じてもらえるような事をしましょうか？」

「え？」

疑問に思っている間もなく、顎に手をかけられ視線が芝生から無理やり千里ちゃんに切り替えられる。

触れられている手が細く骨ばっていて、男の人なんだと改めて認識させられてしまった。

「僕は好きな人にしかキスしないって、この間言いましたよね？」

「あ……」

数日前の出来事が頭の中に浮かぶ。

「あの時、慰めて貰っているだけって言われてショックだったんですよ。」

あれならいくらなんでも気づいてもらえるって思ったんですけど……

…本当に鈍すぎますよね」

そうだよね……いくらなんでも慰めるのにああいう事しないよね。

でもだってさ、まさか千里ちゃんが私の事好きだなんて思いもした

いよ。

それにしても気づくの遅いっていつか、鈍すぎるにもほどがあるよ、私。

「……………ごめんなさい」

「いいですよ。気づかれるとやっつかいな事もあるので、やっつかいな事って何があるの？」

ああ、頭痛くなってきた。

たぶん他の人なら気づく事なのに、なんで私ってこうなんだろう……軽く自己嫌悪におちいつている間にも時は一刻と過ぎていく。

ってちよつと待つて!! このパターンって……

千里ちゃんの顔がだんだんアップになってきて、やっつと今自分が置かれていた状況がわかった。

今度は頬とかじゃなくて、まさか唇!?

『ファーストキスが事故チユー』で今度はこれ!?

そんなの嫌だ。今度はちゃんと好きな人と

「海っ!!」

無意識だった。

気がついたら心の中に浮かんでいた人の名前を叫んでしまっていた。それも自分でもよく出たなと思うぐらい大きい声で。

海がいるのは私達から少し離れた所だし、こっちは側は死角になっていて見えないので声が聞こえたとしても間に合わない。

「……………ん」

すぐ目の前にはアップの千里ちゃんがいるけど、まだ唇には触れていない。

でもたしかに唇は塞がれてしまっている。

でもそれは千里ちゃんの間によってじゃなく、もっと大きい何かによつて。

第四話 お姫様、間に挟まれ頭を悩ます

あれ？

唇を塞いでいるものをなぞるようにしてさわり、何か確かめてみた。もしかしてこれって掌……？
そんな事を考えてると触っていたものが外れ、唇が外気にさらされる。

「お前、桜音に何をしようとしてるんだ!!」

頭より高い位置で、荒い呼吸と低い怒気を含んだ声が聞こえた。

この声、海だ。

でもどうしてこっちに？

「ほんの冗談ですよ。こんなに人が多い場所でするわけないじゃないですか。

するなら人気のない場所……特に貴方の居ない場所です」

千里ちゃんは私の肩越しにいる人を見てそう告げた。

その表情は千里ちゃんにしては珍しく無表情。

「え、ちよっ、人が居なくてももしちゃダメだよ!!」

「ダメですか？」

「ダメ!!」

本当に駄目ですか？と言いながら首を傾げる千里ちゃんを思わず可愛いつて思ったけど、それとこれとは別で絶対にダメだもん。

「どうしてもですか？」

いや、あのその……何回言っても駄目なものは駄目だと思うんですけど……

「そんなふざけた真似許すはずないだろ」
どう言ったらわかってもらえるのかわからず口を噤んでいると、変わりに海がものすごく低い声で答えた。
その声に思わず私は震えたんだけど、千里ちゃんはなんともないようだ。

「桜音さんの許可でなく、貴方の許可を得なければならぬ理由が何処にありますか？」
な、なんなのこの空気。なんか一触即発の雰囲気のような……
私を挟んで二人の間にかもし出されている空気が明らかに悪い。
この状況をなんとか出来る人がいたら、今すぐ助けてほしい。
そう願っても運よくそんな人が通りかからないので、自分でなんとかするしかなかった。

「か、海。もう水族館行こうよ！！ほら、見る時間なくなっちゃうし。ねっ？」

とりあえず、これ以上悪化しないうちに二人を引き離すしかない！！
そう思つて後ろを振りかえり、海にそう言っただけですぐに後悔してしまつた。

うう……眉間に皺とかよせてるし！！

後ろに居た袖と襟に赤いラインが入っている黒のポロシャツに細めのネクタイ、ダメージ加工が施されているデニムを履いている男

海は不機嫌オーラ全開で千里ちゃんから視線を外さない。

「……………」

無言はやめて。

私の話には海は耳を傾けず、ひたすら千里ちゃんとにらみ合っている。
泣きたい気持ちを抑え、名前を呼びながら軽く揺らしてこっちに注意を向けさせようとしたけどそれも無意味だった。

「そもそもなんでお前はここにいるんだよ？」

「え？桜音さんに聞いたからですよ」

ちよっ、なんでそんなこと言うの！？私、言っていないよ！！

海の視線が突き刺さる中、首をぶんぶん横に振って否定した。

「嘘に決まってるじゃないですか。僕の桜音さんをそんなに怒らな
いでください」

「はっ？お前今、誰のって言った？」

にっこり笑う千里ちゃんとは反対に、海はキレかけているのかますます目が鋭くなっている。

もうやだ……今日の二人いつもと違いすぎる……

「そんな恐い顔しなくても、もう用事も済んだので帰りますよ」

「なら、もういいだろ。行くぞ、桜音」

おわっ。

手首を掴まれ引きずられたまま、手を振る千里ちゃんに見送られながら私と海は水族館へと向かった。

なんか今日一日長くなりそう……

Special Thanks小説 クリスマス 前編（海視点）（前書き）

前回言っていたお礼小説の前編です。

*二人はもうすでに付き合っている設定です。

*ネタばれになるかもしれませんが、この二人本編では今のところ、クリスマスと一緒に過ごさせない（予定）かもしれないのでパラレルと考えて下さい。

もう寝ているよな。

さつき部屋を出る時に時計を確認したときは、午前三時を少し過ぎていた。

この時間なら確実に寝ているだろう。

手に持つ紙袋を手に、隣の部屋のドアノブに手をかける。

付き合う前は言われる通りちゃんと鍵をかけたあつた部屋も、今ではすっかり無防備になっているのですんなり入る事が出来た。

物音をたてないように静かに壁際のベットまで進む。

幸いな事にカーテンからまれる月明かりによって、視界は悪くない。覗き込んで見ると、俺が部屋に侵入しているのにも気づかず桜音はすやすやと寝ていた。

それを確認すると、手にしていたものをそっと枕もとに置く。

「メリークリスマス、桜音」

起こしてしまわないように小さい声で呟くと、片手をベットにつき屈むような態勢をとった。

そして可愛い彼女の額にかかる柔らかい髪を手で優しく払うと、そこに唇をおす。

やっと念願叶い、カレカノとして桜音と初めて迎えるクリスマス。驚かせたくてこうして夜中に部屋に忍び込み、サンタのまねごとをしている。

桜音と出会う前の自分なら考えられない行動だ。

誰かの為に何かをするなんて。

きつと驚くだろうな、桜音。

朝起きた時の反応を想像してしまい、顔が綻ぶのが自分でもわかる。だがそれも、桜音の寝言で一気に崩れ落ちた。

「りよう……ちゅー……の」

俺の名前じゃなくて、他の男の名前　その上キスだと!?

一瞬で頭に血が昇る。

たとえ夢の中でも許せない。

「起きろ!!桜音!!」

急いで揺すって現実の世界へと呼び戻す。

「……ちゅー……だめ……い」

「桜音!!」

一刻も早く夢の中から起こすため、さっきより強く揺する。

そのかいあってか、桜音がゆっくりと目をあけ寝ぼけ眼でこっちを見た。

「……かい?」

桜音がおぼろげながら俺を認識したので、無理やり唇を塞ぐ。

夢の中だとしても、桜音が他の男とキスするなんて冗談じゃない。

Special Thanks 小説 後編 (前書き)

後編は少し長めです(-_-)

*ネタばれになるかもしれませんが、この二人本編では今のところ、クリスマスと一緒に過ごせない(予定)かもしれないのでパラレルと考えて下さい。

Special Thanks 小説 後編

さっきまで月明かりだけが頼りだったが、今は室内を人口の光りが包んでくれている。

俺と桜音は対面するようにして、ベッドの上に座っていた。

「海の馬鹿〜っ!! あ、あんなキスするなんて!!」

桜音は顔を真っ赤にしながら半泣きでこっちを睨んでいる。

正直怖くない。むしろ可愛いらしい。

「悪かった」

その可愛さに思わず抱きしめたい衝動をなんとか抑え、謝罪の言葉を述べた。

俺は夢の中で涼と桜音がキスしていたと思ったのだが、どうやらそれは違ったらしい。

あの後桜音を問いただして夢の内容を聞き出すと、俺の勘違いだった。

『涼がいるから、ちゅーはダメなの。だからダメだつてば、海』

これが正しい桜音の寝言。

どうやら桜音の夢の中の俺は、涼の前で桜音に迫っていたようだ。

「本当にごめん。寝言だから所々しか聞き取れなかったんだ」

「やきもちやき」

やきもちなら可愛いが、俺のは醜い嫉妬だ。

桜音の事になると冷静じゃいられなくなってしまう。

桜音が夢の内容を覚えてたから良かったものを、覚えてなかった何してたんだろ……

「でも、どうして私の部屋にいるの？」

「ああ、あれだ」

枕もとに置いてある紙袋に視線を向けると、桜音がそれを取った。

「もしかしてこれって」

「ああ。クリスマスプレゼント」

「開けていい？」

俺が頷いたのを確認すると、紙袋から箱を取り出しそれを開ける。すると、中からハート型のジュエリーボックスが出てきた。

ジュエリーボックスの中には、ハートモチーフのネックレスとブレスレットが入っている。

「どうしてわかったの!？」

クリスマス限定ジュエリーセット。

桜音の欲しいものなら、リサーチ済みだ。

「気に入ってくれたか？」

「うん!! ありがとう」

大事そうにボックスを眺める桜音を見て、ほつと胸をなでおろす。良かった……バイトしたかいがあった。

今回の情報源は佐々木でいろいろ面倒だったが、桜音の喜ぶ顔によって苦労が報われた。

「でもどうしよう……私、まだ心の準備が出来てない……」

桜音の顔が曇ってきた。一体心の準備って何を言ってるんだ？

「でも遅かれ早かれだし……」

桜音は何かブツブツ言っていると、クローゼットを開け何か取り出すとこつちに戻ってきた。

手にはツリーやトナカイが描かれているクリスマス仕様の紙袋をもっている。

「はい。メリークリスマス」

「ありがとう」

差し出されたものを受けとり、桜音を抱きしめ場所を変えながらキスをおとす。

「もうっ、海！！」

桜音に貰えるものはなんでも嬉しい。たとえ貰えなくても一緒にいてくれるだけでいい。

「あのね……プレゼントっていうか、もう一つあるの」

まだキスし足りないのに、桜音に唇を手で塞がれてしまった。

「少し目を瞑ってて。いいって言っただけで絶対開けちゃダメだからね！！」

「わかった」

だが俺は、この数秒後に起こる出来事によってこの約束を破ってしまう。

両頬に桜音の手の存在を感じると、唇になにか柔らかいものが触れた。

もしかして今のは

「……好き」

これはクリスマスの奇跡か？

桜音が好きって言うてくれたうえに、初めてキスしてくれたなんて！！

「桜音、こっち見て」

顔を見られたくないのか、桜音は俺の胸に顔をうずめるようにして隠している。

顔、この上なく赤いんだろうな。耳まで真っ赤だし。

抱きしめると、桜音も手をまわして抱きしめ返してくれた。相変わらず顔は見せてくれないが。

幸せすぎる　　一年前はこんな事考えられなかったのに。

「クリスマス、一緒に楽しもうな」

「……うん」

俺達の初めてのクリスマスは、始まったばかりだ。

第五話 ペンギンのおかげ

ここに来れば少しは機嫌良くなるんじゃないかって思ったのに……

透明なガラス越しにラッコが優雅にイカを食べながら泳いでいる。いつもなら可愛い〜！って言うって水槽に張り付くようにして見ているはずだけど、今日はさすがに出来ない。

だって海の機嫌が治らないんだもん。

ちらりと左隣にいる海を見ると、腕を組みながら難しい顔をしてそれを見ている。

臨海公園で千里ちゃんと別れてから、ずっと海の機嫌が悪いままなのだ。

お互い何にも言わないから会話ゼロだし。どうしよう……

この状態で今日一日は気まずいし絶対に嫌だ。

やっぱり何か話しかけた方がいいよね。でもなんてしゃべりかければいいんだろ……？

あれこれ策を考えながらラッコの水槽を離れた先に進んだ。

なんなのこの愛らしさ。

海との微妙な空気をなんとかする案を考えなきゃならなかったんだけど、今はそれどころじゃない。

だって、これやばすぎるよ……！

目の前にはプールがあつて、その奥には岩場がある。
私はひたすらそこにいる灰色と白の羽を纏っている小さい生き物を
見ていた。

これならたぶん一日見ても絶対飽きない自信がある。
そのくらい私はすっかり魅了されてしまっていた。
だらしなくぐらいに、もうすっかり骨抜き状態。

もう可愛いすぎる！！ペンギンの赤ちゃん。

親ペンギンの傍にぴったりくっついてペンギンの赤ちゃんがいる。
えっと……ジエンツーパーペンギンっていうんだ。
ヒナはこっちに興味がないのか、全然こっちを見てくれない。
うう……こっち見て欲しいのに。でもいいや、可愛いから。

あ。

それはほんの一瞬の出来事。

ヒナが口を開けて欠伸したのだ。

「ねえ海、見た？見た？可愛いすぎるの！！」

隣にいる海の腕にしがみつくと、それを興奮気味にしゃべる。
すると海は左手を口にあてて顔を赤くした。

「っ」

あつ、海もヒナの愛らしさにやられちゃったんだ。

なんか動物の赤ちゃんって保護欲かき立てられるもんね。

「……ああ。可愛いな。今すぐ抱きしめて俺以外見せたくない」
うんうんわかる。

だってふわふわの体抱きしめたいし、あのつぶらな瞳に映るの自分
だけにしたいもんね。

「ほんと些細な動作一つで心乱されちゃうよね」

「本当にな。本人はそんな事気づいていないだろうけど」

……ん？本人？

ペンギンって人じゃないと思うけど、まあいいか。

海は微笑みながら私の頬を撫でこっちを見ている。

ってあれ！？海の機嫌なおってる！！

よかった。もしかしてペンギンの赤ちゃんのおかげかな？

第五話 ペンギンのおかげ（後書き）

あけましておめでとつじぎないますゝ（――）ゝ
今年も合鍵をよろしくお願いします！！

間章 彼女の好きな人（上）

見ていた雑誌を芝生に置くと、寝転びながら携帯を取り出す。そしてそれを弄り、画面に映し出された画像を見て顔の筋肉を緩めた。

これはこの間水族館に行ったときに撮ったもので、俺と桜音そしてその間にペンギンのキグルミが映し出されている写メだ。

……やっぱ、桜音可愛な〜。

この時はいつもと違って髪を巻いてたし、メイクもしていて少し大人っぽく、いつもとは少し違っていて新鮮だったんだよな。

そのうえ大好きな水族館で興奮したのか、抱きついてきたりスキンシップが多くてやばかった。

まあ、それも桜音が我に返るまでの間だけだったが。

「もしかして、桜音さんの画像でも見ているんですか？」

この声は……

「あなたにそう言う顔させるのは、桜音さんしかいませんから」

さっきまで空と雲しか映し出されていなかった携帯のバックには、女 いや、中世的な顔立ちをした男がいた。

色素の薄い髪が僅かに吹く風で揺れている。

藤原千里。

こいつが俺の所に来るって事は、どうせろくな事ではないだろう。今回は桜音にちょっとかいをかけて、その事をわざわざ報告に来た。今度は一体なんだよ。

「そんな怖い顔しないでください。こう見えても傷心中の身なんですから」

「傷心中？」

まさか、こいつ

携帯をたたみ上半身を起こす。

「ええ。この前桜音さんに振られました」

「……そうか」

「つまらないですね。もう少し違う反応を期待したんですけど」
何も言えるはずがないだろ。

これが『告白成功しました』なら話は別だが。

「……それで本題はなんだ。まさか、慰めて欲しくて来たわけじゃないだろ？」

「気持ち悪い事を言わないでください。どうして僕があなたに慰められなければならいんですか」

「だったらなんだ。宣戦布告か？とにかく用があるなら早く話せ。

悪いが、これから部活なんだ」

こいつの事だ。きっと他に何かあるはずだろう。

俺の所に来た理由が

「宣戦布告なんて今さらじゃありませんか？」

「じゃあ、なんだよ」

藤原は、ほんの少し口角をあげると口を開いた。

「ほんの少しだけ意地悪をしに来たんです」

意地悪ってなんだよ。下らない。

てっきり、また桜音になにかしたんじゃないかと思っただじゃないか。俺は立ち上がると、あいつの横をすり抜けようとした。

その時だった。あいつが囁くように俺の時間と思考を止める宣告をしたのは

「あっ、そうそう。知ってます？」

桜音さん、好きな人がいるそ

間章 彼女の好きな人（上）（後書き）

かなり久々の合鍵です。

待っていて下さった方いましたら、すみませんでした。―――<
ブログの方にも書いてましたが、資格検定があったので、時間がな
かなかとれなかったんです…（―――）

でわ、ここまで読んで下さってありがとうございます。

彼女の好きな人(中)

桜音の好きな奴に一人だけ心当たりがある。

桜音を好きになってから、俺はそいつの事が羨ましくて妬ましくてしょうがなかった。

誰よりも桜音の近くにいるあいつの事が

ガラス越しに中庭を覗くと、数人の生徒が弁当を食べたり昼寝をしたりと、思い思いに昼休みを過ごしていた。

その風景の中で俺はただ一点だけを見ている。

「何見てんだ？」

「……別に」

日下部が紙パツクの飲み物を飲みながら、俺の隣に立ち中庭を覗きこむ。

「ああ、あれか」

すぐにわかつたらしく日下部の視線の先には、俺がさっきまで見ていたものが映し出されていた。

そこにいるのは、一組の男女。

女が男に膝枕をして貰いながら眠っていて、時折男が女の頭を撫でている。

「あゝっ！！逢月さん、水谷君に膝枕してもらってる！！」

「え？どこ？どこ？」

「ほら、あの一番大きい桜の木の下」

廊下を歩いていて二人の女子生徒達が足を止め、俺達と同じように窓際に近づくと中庭を眺めた。

「えっと……あ、いたいた。ほんとだ。いいよね、ああいう彼氏」

「うん。私もああいう彼氏が欲しい!!」

「……あんた彼氏いるでしょ」

「それがさ、聞いてよ。アイツさ」

桜音と涼はお互いを大事に思いあっていると思う。

そう感じるのは、俺だけじゃなく周りの奴らもそう思っているはずだ。

周りから二人は付き合っているとと思われるぐらいだから。

「もしかしてお前の様子が最近変なのはあいつらが原因か？」

「俺はいつもと変わらない」

「うそつけ。周りにバレてるぐらいおかしいぞ。だから、逢月も心配してああんってんじゃねえか」

「なんだよ、それ」

「お前の様子が心配であんま寝てねえんだと。だから、水谷が無理矢理でも眠らせようとしてああしてるわけ。」

あいつ目の下のクマ酷かったからよ」

桜音が俺の事を心配してくれているのはわかっていた。

時折何か言いたそうに見ていたし、大丈夫?などと気遣いの声をかけてくれていたから。

でもまさか、眠れなくなるまで心配してくれていたとは。不謹慎ながら、少し嬉しかった。

「んで、結局何だよ。お前が落ち込む原因って。まさか、今さらながらあいつらの仲の良さとかじゃねえだろうな」

「違う。どうやら、桜音には好きな奴がいるらしいんだ」

俺がそう切り出すと、日下部は大きく溜息を吐きだした。

「何、まさかそれが水谷だっていいたいわけ?あるわけねえじゃん」

「あるわけないって、なんでお前にそんな事がわかるんだよ!!」

日下部のくだらないとばかりの言い放った言葉が感に障り、自然と口調が荒くなる。

「知ってるからに決まってるだろ。言うなって言われてるから言わねえけど」

「はあ！？なんだよ、それ。言えよ！！」

「大丈夫だつて。おまえの悪いようにはなんねえから」
「なんでこいつが桜音の好きな奴を知っているんだ！？」
「いつの間にそんな間柄になってんだよ。」
「絶対何が何でもはかせてやる。」

結局あれから日下部は口を割らなかつた。

ただ、ヒントだけは教えてくれた。

『あいつの携帯の待ち受け。それみれば一発でわかるぜ』

どうやってみろっていうんだよ。

大体見せてくれて言うても、好きなやつが待ち受けなら桜音のとだから見せてくれるはずがないだろうが！！
もっとマシなヒントを教えてくれればいいものを。
もう、いっその事桜音に聞くか。

って、聞ければ俺はこんなに悩んでないよな……

「ただいま」

重い気持ちを引きずりながら玄関の扉をあけると、

「おかえりなさい」

という声と共に足に足に何かが抱きついてきた。

「なっ
」

咄嗟にそれを見ると、幼稚園生か小学校低学年ぐらいの小さい男の子だった。

誰だこの子……桜音の親戚だろうか。

その子は愛らしい笑顔をこちらに向けると俺の脚から手を放す。

そして、両手を広げると抱っこをせがんできたので抱き上げた。

しかしずいぶん人懐っこい子だな。

この時の俺は、まさかこの子が俺の悩みを解決してくれるなんて思いもしなかった。

彼女の好きな人(下)

「はい、あ〜ん」

桜音がカップからオレンジ色のアイスをすくうと、スプーンをこちらに差し向けてくる。

でもそれを頼張ったのは俺じゃなくて、俺の膝の上に座っている男の子だった。

「……………うまそうだな。蓮都」

「うん。うまいっ!!」

だろうな。桜音に食べさせて貰っているんだから。

ああ、俺も食べたい。

俺を玄関で出迎えてくれたこの子は、逢月蓮都。

桜音の兄さんの子供　つまり、桜音の甥っ子だそうだ。

来年から小学校にあがるって桜音が言っていたから、五・六才ぐらいだろう。

ご両親が結婚記念日らしく、今晚預かることになったそうだ。

「海にい、海にい」

蓮都の方を見ると俺の口元にアイスの乗ったスプーンを差し出してくれている。

それを口に入れると、冷たさと共にチョコレートの甘さが口の中に広がっていく。

「おいしい?」

「ああ。おいしいよ。ありがとう、蓮都」

頭を撫でてやると、蓮都は太陽みたいな笑顔を見せた。

可愛いな。

蓮都は元々人見知りしない性格らしく、初対面の俺にもすぐに懐い

てくれた。

もし仮に俺にも弟ができたなら、こんな感じになるんだろうか。
まあ、それはあの二人次第だな。

「ん？蓮都どうした？」

蓮都がテーブルに向かって手を伸ばして何かを取ろうとしている。

ああ、携帯か。

蓮都の手の先には、テーブルの上に乗った俺の黒い携帯が置いてあった。

「蓮都ダメ。それ、海のだから」

「写真撮りたい」

「それなら、私の貸すから。ね？」

「いいよ、俺の携帯使っても」

「でもほら、壊しちゃうとあれだし……」

桜音はそう言っつて、蓮都に携帯を渡した。

だが、蓮都は写メを撮ること無く画面を見たまま動かない。

「どうしたの？蓮都。もしかして使い方わかんない？」

あのね、カメラのイラストあるでしょ、それを押すだけ　　って聞
いてる？」

蓮都は変わらず画面を見たまま動かない。

さすがに変に思ったのか携帯の画面を桜音も覗くと、顔を赤くして
すぐさま携帯を蓮都から奪い取るようにして取り上げてしまった。
なんだ？

「忘れてた……」

桜音は半泣きになりながら、携帯を握りしめている。

「蓮都、明日恐竜展連れていってあげる……」

「ほんとか……？」

「うん。お菓子も買ってあげる。だから……」
桜音は小さい声で蓮都に何かを言つと、蓮都が笑顔で首を縦にふつている。

一体、なんだつたんだ？

「蓮都、約束出来る？」

「うん。俺、いわないよ。桜音の携帯が海にいだつて」

「蓮都!!」

桜音が蓮都の口を塞いだ時にはもう遅く、俺はそれを聞いてしまつていた。

桜音と目が合うと、蓮都の口を塞いでいた桜音の手が力無く下がつていく。

「携帯が俺つて蓮都。それどういうことだ？」

「あのね、桜音の携帯開いたら、海にいが眠つてたの」
それつて、待ち受けが俺の寝顔つていう事か？

『あいつの携帯の待ち受け。それみれば一発でわかるぜ』

桜音の好きな奴は俺？

最終章 第一話 莉緒

なんでこうなったの？

ついさつきまで四人で仲良くおしゃべりしてたじゃん。

リビングの中には外から聞こえるセミの鳴き声と、私と涼の二人分の溜息だけが聞こえた。

私の頭を悩ますその原因は、テーブルを挟んで向かえ側に座っている小学生ぐらいの女の子。

彼女はひたすら私の隣に座っている海を睨んでいる。

一方睨まれている海は、別にそんな事など気にする事なく珈琲を飲んでいた。

「莉緒、止めなさい」

涼に注意された莉緒と呼ばれた女の子は、海から視線を外すことなく無視という形でそれを拒絶する。

彼女は、涼の妹の『水谷莉緒』ちゃん。

莉緒ちゃんは、近くの小学校に通っている六年生。

私たちはこれから、莉緒ちゃんの大好きな『聖』に会いに行く事になっているのだ。

そのため、今日の莉緒ちゃんの格好は実に可愛いらしい。

肩につくかつかないかの長さの髪には極細のカチューシャ、服は水色のワンピースに白のボレロを羽織っている。

普段の莉緒ちゃんは動きやすい格好なんだけど、やっぱり好きな芸能人に会えるからか、かなり気合いが入っているみたい。

聖ってというのは、今女の子に大人気のモデルさん。

その活動の幅は広く、雑誌だけじゃなくドラマやCDなどいろいろだ。

莉緒ちゃんが聖のファンだという事と、莉緒ちゃんの誕生日が近い事を海に話したら、

なんと海が聖と知り合いらしく会わせてくれる事になったんだけど

……

四人で迎えの車が来てくれるのをお茶しながら待っていたんだけど、急に莉緒ちゃんが今みたいになってしまったのだ。

早く迎えの車が来て聖に会えば、莉緒ちゃんのこの状態も治るかな。でもどうして急に海の事睨みはじめちゃったんだろ？

「……桜お姉ちゃん」

「ん？」

「お兄ちゃんの事好き？」

「はあ？」

莉緒ちゃんはやっと海から視線を外すと、急にそんな質問をしてきた。

その突然の突拍子もない質問に間抜けな声が出てしまう。

この質問と海を睨んでいるの何か関係があるのかな？

よくわかんないけど、涼の事は好きだし『大好きだよ』って答えておこう。

「だ……」

『だ』までは出たけど、それからの台詞が出せない。

なぜなら大きな手が私の口を塞いでいたからだ。

「ん〜!」

「悪いが、俺以外に言うその言葉なんか聞きたくない」

海の手を引き剥がそうと、海の腕を両手で掴みながら海を見る。

すると眉間に皺をよせ、不機嫌オーラを纏った海が今度は涼を睨んでいた。

それを涼は苦笑いで受けている。

なんで!?

「やっぱり!! あんた桜お姉ちゃんの事。冗談じゃない。絶対に二人の邪魔なんかさせないんだから!!」

「莉緒、俺たちの事は放っておいてくれ」

「放っておけるわけじゃないでしょ!! だいたいなんでそんなに冷静なのよ。桜お姉ちゃんとられちゃうかもしれないんだよ!! いいの!」

莉緒ちゃんは涼の両腕を掴んで強く揺すっている。

涼はそれに何かを言おうとしたのか、唇をわずかに動かされたけど言葉を発する事はなかった。

第二話 秘恋（前書き）

今回長めです（+—+）

途中でわけようと思ったんですけど、どっからわけていいかわかん
なかったの…

第二話 秘恋

あの空気のまま聖の所に行くと思つてたんだけど、それは私の危惧に終わった。

それは、たぶん迎えに来てくれたこの車のおかげだと思つ。

私達が乗っているのは、なんとリムジン。

この車は海の家車で、運転しているのは在原家の専属の運転手さん。

やっぱり最初はそうなるよね……

涼の隣に座っている莉緒ちゃんを見ると、ただ茫然とどこかを見て座っている。

私も最初乗せて貰った時は、莉緒ちゃんと同じような反応だった。だってドラマとかでしか見れないし、普段乗らないもん。

「すごいな。俺初めて乗ったよ」

一方涼は、そう言いながら観察するように広い車内をゆっくり見回していた。

気になるものがあつたのか、涼は目を輝かせながら海を呼び、一点を指している。

あつ、もしかしてテレビ？

涼が見ていた所には、埋め込み式のテレビがあつた。

「なあ、これつけてもいいか？」

「ああ」

海の返事を聞くと涼は、スイッチに手を伸ばしそれを押す。

すると画面には、イスに座っている学ランを着た男の人とスーツ姿の女の人が映し出された。

男の人は全体的に髪の毛や瞳の色など色素が薄く、耳が隠れるくらいまで長い髪は所々無造作に外ハネにしている。

「あつ、莉緒ちゃん。ちょうど聖が出てるよ」

「えっ!？」

弾かれたように莉緒ちゃんは、画面に映る聖を見つめた。

聖ってぱつと見るとハーフ?って思っちゃうんだよね。

目鼻立ちがはつきりしているためか、よく勘違いされるってテレビで言っていたっけ。

「しかし、大人って感じがするよな。とても同じ年には思え」

「お兄ちゃん、ちょっと黙って。聖の声が聞こえないじゃん」

り、莉緒ちゃん……

莉緒ちゃんは涼の話を遮ると、テレビを食い入るように見つめながら、聖が話す言葉を聞き洩らさないように集中して聞いている。

『新曲一位おめでとうございます』

『ありがとうございます』

『今回発売された新曲のタイトル「秘恋」は、心に秘めた恋っていう意味だそうですね』

『はい。そのままです』

聖はスーツ姿の女性アナウンサーに対して、苦笑いで答えた。

『主人公の男の子の心に秘めている恋　つまり片思いの歌です。』

『プロモーションビデオもそれに合わせて学園ドラマっぽくしました』
あゝ、これってこの間発売した新曲のインタビューなんだ。』

だから学ランか。

聖はプロモで学ラン姿で歌っているのだ。

私もそのプロモ見たけど、主人公の男の子に感情移入しちゃった。

プロモは主人公の男の子の片思い目線で進んでいくんだけど、その

片思い中の出来事が共感できるし、聖の歌声が切なくて……

「プロモってどんな内容なんだ？」

「えっ？在原さん見たことないの！？」

「俺もない」

「信じられない。お兄ちゃんまで……」

莉緒ちゃんは仕方ないな〜と言いうと、口を開いた。

「内容的には少女漫画的かな。簡単に言うと学校の王子様の人がいて、その男の子には好きな女の子がいるんだけど、その女の子とはクラスが違うからなのか、口も聞いたことがないし、面識もないの。」

しかも女の子には周りに彼氏と思われるぐらい仲の良い男の友達がいる、主人公の男の子はいつもそれをただ羨ましく見てるしかできないって話」

主人公の男の子はなんとかその好きな女の子と共通点を持つとすると、ただ、なかなかそれが見つからないんだよね。

も〜、じれったいのなんのそのって！！思わずプロモ見ながら、気づいてあげて！！って叫んじゃった。

「しかもね、その彼氏と間違われる男友達が主人公の男の子の友達で部活も一緒なの。」

だから部活の差し入れとかもその子が貰ってるの見て凹んだり、雨が降った時に傘を

莉緒ちゃんの話はそれ以上は続く事はなかった。

それはたぶん、私の右隣にいる海のせいだと思う。

だって、隣だけ空気が氷点下……

「おい、海。もしかして」

涼は海の方を見ると、海は携帯を取り出し何処かへかけている所だ

った。

相手が話し中なのか、それとも出られないのか、なかなか海が口を開く事はない。

その間も海はテレビから目を離すことはしなかった。

というか、むしろ睨んでる。

ど、どうしたの！？なんか空気が不穏に……

『青春って感じがするプロモですよ。もしかして、聖くん自身の体験ですか？』

『いえ。実はこのプロモの主人公の男の子は、僕の友人がモデルなんです。傘のシーンなど所々実話なんですよ』

第三話 パフェと店員さんと

「あれは一体どういつもりなんだ!! ……何の事じゃないだろうが!! ……ああ、貰った。まだ見てなかったんだよ。はっ!? 薄情者だっけ?なんでそうなるんだ!!」

隣りから聞こえてきた怒鳴り声に、たまらず耳を塞ぐ。

海はやっと繋がった携帯で話をしているみたいだけど、かなり機嫌が悪い。

眉間に皺をよせながら、受話器越しに相手に文句を言っている。

絶対相手の人、携帯耳から離してると思う。

「……ああ、いる。そんなんで気づくなら、とつくに俺の気持ちの気づいてくれている。……いいんだ。それでも俺は。だから、もう余計なことするな。は?そんなことお前に言われなくてももちろんと考えている。……いつでもいいだろ。お前には関係ない」

海はさつきより少し落ち着いたのか、淡々とした口調になっている。誰と話してるの……?

そういえば、さつき聖の映像見て電話かけ始めたっけ。

という事は、聖かな?

あれ?そういえば聖と海ってどういう知り合いなんだろう……?

「だから、そういうのが余計なお世話だっけって言うてるだろ。とにかくもうすぐ着くから。……ああ、わかった。じゃあな」

海は通話を終えたらしく、携帯を畳むと空いている座席に放り投げた。

そして溜息を吐いて何か少し考えた後、備え付けられているインターフォンを押した。

「海のバカ……」

この眩きを聞く人は周りには誰もいない。

白をベースとした室内には、私だけが一人ぼつんと存在している。

ここはフランツっていつて、最近雑誌やテレビで紹介される人気スイーツショップだ。

どの部屋も完全個室でプライバシーは守られている。

もうっ。置いていくなら、最初から連れて行かないでよ。

別に聖のファンってわけじゃないけど、会うの楽しみにしていたのに。

私以外の他の人　海と涼と莉緒ちゃんは私を置いてここからモデル事務所に行っちゃってしまい、私だけこの店に取り残されてしまったのだ。

一時間ぐらいしたら戻ってくるから、好きなものなんでも頼んでて良いって言ってたけど。

でも一体なんだろう。急に私だけ置いていくなんて。

海に理由聞いたたら、「聖のせい」ってしか言わなくてちゃんとした理由教えてくれなかったし。

あれこれ理由を考えていると、ドアをノックする音と共に「失礼いたします」と白いシャツに黒っぽいエプロンとパンツスタイルの男の店員さんがドアを開けて入ってきた。

あれ？私、まだ何も頼んでいないのに。
しかもあれって

私の目は店員さんの持っている銀色のプレートの上のっている物
にくぎ付けだ。

「お待たせいたしました」

店員さんの手によって、ピンクゴールドのスプーンと共にそれがテ
ーブルの上に置かれた。

溢れんばかりにのった季節のフルーツに、バニラアイスとマンゴー
ゼリーの二重の層。

それらが細かい細工が施されてあるガラスの器に入っている。

フ란のパフェだっつー！！

これみくと、食べたいよねっつて言ってたんだ。でも値段が値段な
だけになかなか手が届かなくて……

だって、これ一つで3000円もするんだもん。

パフェにしては高すぎると思わない？

だって私がしているレジ打ちのバイトが時給650円だよ！？

あっ、でもこれ私頼んでない。

「あのっ、私まだ注文してないんですけど」

店員さんにこれが自分の注文品ではないことを告げると、返ってきた返事は想定外のものだった。

「言うことはそれだけなのかよ。どんくさいのか？それとも僕の事
知らないのか？」

「は？」

いきなりそんな事を言われて、すぐさまパフェから店員の顔に視線
を向けた。

あれ……？なんかこの顔どっかで……

ずっとパフェばかり見てたから、全然店員の顔まともに見てなかったよ……

「あ~~~~っ!~!~!」

私の叫び声を聞くと、その人は、「やっと気づいたか」と言つとテーブルをはさんで迎え側のイスに座った。

どうして!?!どうして聖がいるの!?!?

第三話 パフェと店員さんと（後書き）

久々の一か月ぶりの更新です。

もう検定試験も終わったので、更新普通に戻ります（＾|＾）

第四話 聖

おっ、おいしそう……

口元にあるスプーンの上には四角に切られたマンゴーとバナライ
スに乗っている。

今すぐにでもそれを食べたい！！

だって、あんなに食べたかったパフェだもん。
でもさすがにこれじゃあ

「ほら、あ〜ん」

聖は私の口元にスプーンを差し出しながらそう言った。

それをさすがに食べることは出来ずに首を横に振る。

出来るわけないよ〜っ！！聖に食べさせて貰うなんて！！

だって今日が初対面なんだよ！？それに、あの聖にだよ！？

涼とかにならなんの抵抗もなく食べさせてもらうけど、この状況は
無理〜〜っ。

「早く口あけなよ」

「自分で食べれるから大丈夫です」って言おうと思ったけど、

口あけた瞬間にスプーンを啜えさせられそうなので、ただひたすら
首を横に振る。

聖に食べさせて貰うなんて出来ないし、それにあれはどうみても

ちらつと聖の左手を見ると、携帯がこちらに向けられている。

明らかに写メる気だし！！

一体、聖はここに何しに来たの〜〜！？

「まさか、この僕に食べさせられるのが不服とでも？」

「!?!?」

なかなか食べない私に苛立ったのか聖の声は低くなり、視線は鋭くなり始めてきた。

うっ……海もだけど、整った顔立ちの人が怒るのって恐怖倍增……

その圧力に逃げられないと観念し、私はおとなしく白旗を上げた。

覚悟を決めて口を開け、スプーンを口の中に招き入れると程よい甘さが口の中に広がる。

あ、おいしい。

それと同時に、カシャっという機械的な音が耳に届いた。

やっば写メったし！！

「あ、あの……」

「ああ、大丈夫。心配しなくてもよく撮れているから」

「そういうことじゃなくて」

それどうするんですか？って聞きたいんです。

聖はこちらを見ることなく、何がおもしろいのかクスクス笑いながら携帯を操作している。

「あ、あとパフェは海が頼んでいったものだから、君の分。だからあとは自分で勝手に食べてね。

他にも食べたいものや飲みたいものがあつたら頼んだら？海のおこりなんだし」

聖はそう言うつとやっつと携帯から目を離し「溶ける前に早く食べなよ」と、私の方にパフェを移動させてくれた。

「聖は……聖さんはどうしてここに？」

「聖でいいよ。同じ年だし敬語もいらない。ここに来たのはただ、噂の桜の精を見に来ただけ」

私はそれを聞いて首を傾げた。

さくらのせいって何？もしかして、桜音と間違えたのかな？
聖はそんな私を見て、何かわかったのか「……ああ」と呟いた。

「別に名前間違えとかじゃないよ。桜の精っていうのは、桜の妖精の事で君の事。海の仲間内の間では、君はそう呼ばれている。まあ、他にも桜の姫君なんても呼んでいるやつもいるみたいだね」

「妖精！？姫！？私が！？」

「他に誰がいるっていうの？」

なっ、なんでそんな事になってるの〜っ！？

思わずテーブルに肘をついたまま頭を抱えてしまった。

「しょうがないよ。あの海の寵愛を受けてしまったんだから」

「……寵愛？」

海は優しいけど、寵愛受けているのかな？実感がないから、よくわからない。

「そう、寵愛。もしくは溺愛でも可だけど。さあ、どうするの？桜の精。逃げるなら今のうちだよ」

第五話 二人して

あ、もう着いちゃったんだ。

もうちよつと乗ってたかっただけだなあ……

今まで風と一緒に次々と移り変わっていく風景だったのに、今はそれがなくなり視線の先には見慣れた私の家になっている。

私はゆっくりと背中に回していた手を緩め、バイクを降りた。

「ありがとう。送ってくれて」

被っていたヘルメットを取り日下部君に渡すと、さっと手で髪をなおす。

バイクを運転してくれていたのは日下部君。

送ってくれるっていうので、お言葉に甘えて家まで送って貰ったのだ。

「いや。今日は悪かったな。付き合ってもらって」

「ううん。いいよ、夏休みだから時間あるし」

私達はただ今、夏休みまつただ中。なので、時間はたっぷりとある。私も時間を有意義に使おうとバイトを増やしたり、涼達と海に遊びに行ったりと楽しんでいた。

もちろん、来年受験生なので塾に行ったり学校の課題もしているけど。

「それに楽しかったもん。なんかモデルさんにもなった気分だったよ」

私はさつきまで日下部君のバイト先 スタジオに居た。

そこで私は日下部君の写真練習のためのモデル代わりをしていたのだ。

練習って言っても、本格的だったんだよね。

だってメイクもプロのメイクさんだったし、服や小物も人気のブランド物をスタイリストさんが選んでくれたんだもん。

ただちょっとポーズとるのがなかなか難しかったんだよね。

最初どうとっていいかわかんなかったんだけど、用意されてあった雑誌とか参考にしたり、日下部君の指示でなんとかなった。

「なんかシーンごとにセットも組まれたりして、まるで雑誌か写真集の撮影みたいって錯覚しちゃった」

「あゝ、逢月。実はそのことなんだが……」

日下部君は何か奥歯に物が挟まったような言い方をして、なかなか言葉を発しない。

んゝ、なんだろう？何か言いたいことあるのかな？

日下部君が言うの待ってたら、後ろから「桜音」って二つの声によって名前を呼ばれた。

それは涼と海の声。

あ、部活終わったんだゝ。

私は振り返ったんだけど、ジャージ姿の二人の姿を見て言葉が出なかった。

「何、お前ら喧嘩でもしてきたのかよ？」

日下部君が海と涼の顔を見ながら言った。

日下部君がそう聞きたくなるのもわかるぐらい、海と涼の顔には口や頬に殴られた後があったのだ。

「しよ、消毒……！」

そうだ、ぼうつと見ている場合じゃない……！！

急いで家の中で治療しようとして二人の腕を掴んだんだけど、それを涼に外されてしまう。

「大丈夫だよ、桜音。俺も海も保健室でして貰ったから」

「でっ、でも……」

「心配するな。そんな見た目ほど痛くないし」

海は少しでも私の事を安心させようとしたのか、そう言って私の頭を撫で始めた。

普段ならそれで落ち着いたり出来るかもしれないけど、今はそんな事できない。

一体誰と喧嘩したの……？

海は見た目ほど痛くないって言っているけど、唇の端が腫れたりして痛そうだ。

「えっ、マジで？俺、結構本気で殴ったのに」

「!?!」

さらりと言った涼の言葉に私と日下部君は絶句し、海はばつが悪そうに顔をそむけた。

一体、二人に何があったの!?!

第五話 二人して（後書き）

長らく放置しててすみません。

パソコン壊れて修理中でした（ー；ー；）

長かった……

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました>（ー；ー；）<

第六話 からかう理由

だめだ。やっぱり気になって頭から離れない。

私は見終わったテレビを消し、クッションを抱えこんでソファへと寝転がった。

理由はもちろん、今日の涼と海の喧嘩の理由についてだ。

おかげでさっきまで見ていたドラマの内容を全然覚えてない。

それにしてもあの二人、一体なんで殴り合いの喧嘩なんてしたんだろっ？

二人に聞いたんだけど、涼も海も教えてくれないし……

もしかして部活の事かもしれないとかいろいろ考えてみたけど、推測にしかすぎない上に理由として納得できるものが全然浮かんでこなかった。

どっちから先に手を出したかわかんないけど、あの二人の事だからそれなりの理由ってというのは確かなんだろうっけど。

「でも、もう大丈夫だよね」

だって涼も海もあの後、普通に何事もなく会話してたし、明日も一緒に部活行く話もしてたもん。

ここは、やっぱりしばらくそつと様子を見……

「!？」

なっ、何!？

突然右頬に感じた弾力のある柔らかい感触に思考を停止されてしま

った。

この感触たしか前にも感じた事がある。

あれはたしか……

頬を押さえてガバツと起き上がると、思い当たる原因を引き起こした人の名を叫んだ。

「海っ！！」

最初は虫か何かが当たったのかなあって思ったんだけど、触れたものが柔らかかったし、

気づいたら人の気配を感じてたので、まさかと思っただけじゃっぱり！！頬に柔らかい感触があったのは、海が私にキスしたせいだ。

「ん？どうしたんだ？」

わかっているくせに、クスクス笑うなっ！！

海はさっきまでお風呂に入っていたため、Ｔシャツにハーフパンツというラフな格好をしている。

あっ。

髪から雫が落ちてくるのが見えた。

海は最近、暑いからって理由でドライヤーをかけない。

そのため、水滴が落ちてきてもいいように肩からタオルをかけている。

もー、ちゃんと乾かしてって言ってるのに。

って、今はそれどころじゃないし！！

「私の事からかうの辞めてって、前にも言ったじゃん！！」

恥ずかしさのあまり半泣きになりながら、私は海に怒鳴った。

海は隙あらば私の事を膝の上に座らせられたり、抱きしめたりする時がある。

しかも「桜音、真っ赤」とか言いながら頬をつつきながら、からかってくるんだよ？

こっちはそういうの慣れてないからしかたないのに。

「ほんと恥ずかしいの。だから、絶対辞めて。わかった？」

そう言つて隣に座つた海の顔を見るけど、海は幸せそうに微笑んでいる。

え〜つと、私一応怒鳴つたんですけど？

「それはちよつと無理だな」

「なんで辞めてくれないの！？海の意地悪っ！！」

「意地悪かあ……桜音はほんと可愛すぎるよな」

はっ！？私が可愛い！？

もしかして、涼と喧嘩して頭打つたとか……？

病院連れて行つた方がいいのか考えてると、ぽんぽんと頭を撫でられてしまった。

つて、ちよつと待つて撫でないで。頭撫でられるの弱いんだから！！

海に頭を撫でられて私は、いつも通り力が抜けリラックスモード。

私はさっきの事をすっかり忘れ、海の肩にもたれるようにしている。

「……はあ。なんでこんなに無防備なんだよ」

海はため息まじりに呟いたけど、知らない。

だつて、弱いもんは弱いんだもん。

私は心地よさのあまり目を閉じながら、それを聞いていた。

「桜音」

「ん〜……」

あ、やばい。眠くなつてきちゃった。

寝るなら部屋に行かなきゃとは思つたけど、面倒だ。

少しだけここで寝ちゃおうかな……

「花火大会、一緒行く約束覚えてるか？」
眠さのあまり返事をするのも億劫だったので、私はただ首を縦に動かした。

来月花火大会があるんだけど、そこに行こうって海に誘われていたのだ。

その間に海の誕生日があったり、海の部活の合宿があったりというイベント事がある。

「……き……桜……伝え……事が……」

あゝ、もう駄目だ。

やばい。ちゃんと話を聞かなきゃいけないのに……

海が何か言ってる気がするけど、眠りの世界に引きづりこまれてしまった私にはわからなかった。

第七話 企み…？

わっつ、可愛い。

私の視線の先には白の生地に董の花、薄い青地に兔などの布が並んでいる。

どれも可愛いけど、反物なんだよね。これ。

畳みの上に並べられているのは、どれも浴衣の反物。

そのため花火大会までに浴衣として仕上がるかわからないし、それに何より 予算内に絶対に収まらないよー！！

私は夏祭りに着て行く浴衣を新調しようと、圭吾さん……海のお父さんお勧めのこのお店に連れてきてもらっただけど、ちょっと後悔している。

だって、連れてきてもらったのが『賽極』^{さいごく}だったんだもん。

賽極は、江戸時代からある老舗の呉服屋さん。

一見さんお断りのお店で、愛用者はもちろん由緒ある家柄の人や政治家や社長さん達ばかり。

最初に気づけば良かったんだけど、名前しか聞いた事なかったし、のれんに書かれていた賽極って文字が崩されすぎて読めなかったんだよね……

ん〜、圭吾さんにこのお店に既製品ないか聞いてみようかな。

そっちだと私が買えそうなものあるかもしれないし。

そう思って圭吾さんの方を見ると、圭吾さんは撫子や菊などが描かれている反物と、紫陽花の描かれている反物を見比べていた。

時折圭吾さんが、キクさんと呼んでいたお店のお婆さんと話をしてる。

あ〜、そういえば、みちるさんにサプライズで浴衣をプレゼントするんだって言うってたっけ。

どうしようかな……

邪魔するのも悪いし、他の店員さんに聞いた方がいいかな？
そんな事を考えてると、聞きなれた声が入ってきた。

「ほら、これ写真」

この声って

あ、やっぱり。日下部君だ。

声の方向に目を向けると、やっぱり思い当った人がいた。

でも日下部君は一人じゃないみたいだった。

日下部君の隣りには、鮮やかな着物に身を包んだ女の子が歩いている。

同じぐらいの年かな？

髪はおかつぱで目は一重、すつとした鼻立ちの和風美女だ。

二人は私に気づかずに通りすぎようとしている。

「本当なら写真ではなく、桜の姫を連れて来ていただいた方が良いのですけど。そうしたのなら、私もお会いする事が出来ますのに」

桜の姫　もしかしてそれって、私の事……？

聖と逢った時に海の友達が私の事を「桜の妖精」とか「桜の姫君」とか言っているって聞いた。

あの時一人一人にあって訂正入れたいって思ったんだけど、さすがに私の事を話してるのなら声をかけるにかけれない。

「しょうがねえだろ。あいつ連れてきたら、俺達が動いてるのが海にバレちまうかもしれないねえからな。それに逢いてえのなら、当日逢えるだろ」

「まあ、それはそうですけども。でも、海さんにバレてしまつなんでも少し考えすぎじゃありませんの？」

「あのな、お前はわかってねえって。アイツは逢月の事なら些細な

変化でも気づくっつの」

「海さんが姫の事を溺愛しているのは、わかっていますわ。現に浴衣の予約だって」

やばっ！！

あまり見過ぎてたのか、その女の子の視線が急にこっちに向けて目が合ってしまったのだ。

あ

さらにやばい事に日下部君と目が合ってしまう。
どうやらふいに話と足を止め、こっちを見た女の子を怪訝に思ったらしく視線を追ったみたいだ。

「逢月お前なんでここに！！」

「こ、こんにちは……日下部君……」

私はぎこちなく手を上げた。

第七話 企み…？（後書き）

読んでくれている方ほんとありがとうございます!!

更新遅いうえに、文章とか下手だし、ありがちな話なのに……

今回は早めに更新できました。

このペースをなんとか続けられれば^^;

第八話 パーティをしませんか

テーブルの上には、お花の和菓子が赤い漆皿の上のっている。
私はそれを竹の楊枝で切ると、口の中に入れた。

うん、おいしい!!

ここは賽極のお店と同敷地内にある、凧さんが住んでいるお屋敷。
話があるからと、浴衣を見ている圭吾さんを残して私は日下部君達
にここに連れてこられたのだ。

「お口に合いますか？」

「はい。とても」

「よかったですわ」

着物姿の美女・凧さんは私の返事を聞くとにっこりと微笑んだ。

彼女は、賽極凧さいごくりんさんと言って、ここ賽極のお嬢様。

年は私と一緒に、陸王学園高等部の二年生なんだって。

陸王って言ったなら、幼等部から大学まである社長子息・子女などが
通う名門校。

海も元々中等部まで陸王の生徒だったんだけど、推薦で高校からう
ちの学校に入学。

もちろん、この事はうちの学校の生徒達はみんな知ってる。

陸王はエスカレーター式なのに、どうして外部の高校に来たのかっ
て入学当初すごく噂になってたから。

結局理由としては、うちの学校がバスケが強かったって事だったん
だけ。

「あゝ。早速だが、逢月。話なんだけどよ」

日下部君が、みたらし団子を食べながら話を始めた。

あっ!!お団子私も食べたかったのに!!

皿の上ののっていたお団子は、日下部君によって串だけになっている。

「もうすぐ海の誕生日だろ？そんで俺と凧、それと他の奴らで海の誕生日パーティーを計画中なんだ」

「いつやるの？」

「23日です。金曜日で平日ですが、ちょうど夏休み中なのであ。それじゃあ、海の誕生日当日にパーティーなんだ。って事は、あと一週間と少しってところか。」

「もちろん参加するよな？」

「うん！！」

これはもう即答。だって、海の誕生日パーティーだもん。

私もちょうど、料理を考えたりして海の誕生日をお祝いしようって思ってたのだ。

だから、日下部君達も一緒って心強い。

だって海との付き合いが長いから、いろいろ知ってそうだもん。

あつ、そうだ。海の好きなものとか聞いておこつと〜。

私、プレゼントまだ買ってないんだよね。

「日下部君。海が欲しいものってわかる？」

ちよつと今日浴衣見た後に買いに行こうって思ってたんだ。

海に何か欲しいのある？って聞いたたら、何もいらないうって言われちゃったし。

「あゝ、それならお前にリポ」

パチンと日下部君が凧さんに扇子で頭を軽く叩かれた。

「まったく、貴方ときたら」

「なんだよ！！あいつ一番喜ぶじゃねえか！！だから、俺もこいつの写真し」

……私の写真が何？

日下部君はわざとらしくせき込むと、何事もなかったように緑茶を飲み始める。

なんか、気になる。

「もちろん、誕生日パーティーの事は海さんには秘密です。もしばれそうになったら、なんとか誤魔化して頂もらえませんか？」

「誤魔化す……」

ん、難しいかも。

でも、なんとか頑張る！！

「そんな考えねえでも、簡単だ。悩殺だ。悩殺」

「は？」

思わず凜さんと八モってしまった。

何言ってるの！？

「は？じゃねえよ。その事がぶっ飛ぶぐらい、悩殺してしまえばいいんだっつうの」

「ちなみに、どうやって……？」

そんなスキルが私にあるわけない。

というか、そもそもよくそんな発想が出て来たね。

「抱きついて、キスの一つや二つでもしてやれ」

「ちよっ……」

無理すぎるでしょうが！！

「相変わらず貴方は無責任すぎる発言ばかり」

凜さんは大きいため息をはくと、冷めた目で日下部君を見る。

「どこがだよ。海はこいつの事となると、抱きつかれたぐらいで顔赤くして固まる純情少年になるんだぜ？そう考えると、出来なくはないだろ」

「本当ですよ？あの海さんが……！？」
凜さんの目が大きく開かれた。

「信じらんねえだろ？この間のモデルが逢月ならどうなってたんだろうな」

「モデルって？」

「海のバイトに決まってるだろ。この間、モデルの女との絡みでキスシーンあってよ」

第九話 気づいちゃったかも

海の部屋って本当にシンプルだ。

鉄製のベットと、ブラックの木製の机、それから収納ケースや香水が保管されているスチールラックしかない。

雑誌やスウェットなどもフローリングに置かれてないし、どこもかしこも綺麗に整理整頓されている。

そんな室内には「あ、あの……その……」という、私のしどろもどろな台詞がBGMがわりに何度も繰り返されていた。

「……ごめんなさい」

「いいよ、桜音。ゆっくりでいいから」

きつと日下部君ならとつくに「さっさと要件を言え!!」ってキレてるはずだ。

それなのに海は私が言い出すのを待っていてくれる。

海って、ほんと優しい。

「うん。あのね……その……海って……」

私はまたそこから先がなかなか言えなかった。

一体いつになったら、このスパイラルから逃れられるの!?

それに海にもいろいろ予定あるし、早く言わなきゃ。

机の上にある、さっきまで海が使っていたノートパソコンに目を向けると、

画面はすっかり省エネモードになっていて、オレンジ色のランプだけが点灯していた。

その隣には書類の束が置かれている。

海は圭吾さんの所で、経営の勉強をしているみたいだからそれ関連の資料かもしれない。

これ以上いたら海の邪魔になっちゃうよ。
それに、そろそろ正座がキツイ。
足の感覚がなく、これは絶対もうそろそろ痺れてくるはずだ。
そうなたら部屋から出れなくなっちゃって、ますます海の邪魔になっちゃう。

よしと私は心の中で気合いを入れ、私は意を決して口を開いた。

「あのね、海って最近誰かとキスした事ある……?」
「は?」

海は目を大きく見開いて、こっちを見ている。

そりゃあ、そうだよな。

いきなりこんな事聞かれたら、誰だって驚くはず。

でもやっぱり、昨日、日下部君が言った事が気になってしょうがないんだもんっ!!

「あるよ」

えっ!?! 本当に撮影でモデルさんとキスしたの!?

海の言葉に思わず海の腕をつかむと、海が声を出さずにクックツと喉で笑った。

「桜音は、もう忘れちゃったのか? ついこの間の事だぞ」

そう言っつて伸ばされた海の手が私の頬に触れる。

もしかして……これは !!!

とっさに近づいてきた海の唇を手のひらで塞ぐ。

先手必勝。やっぱり思った通りだったし!!

海がなぜか不満そうな顔をしているけど、今はとりあえず気にしない事にする。

「違うの〜!! 私以外の人とっつて事!!」

私は手のひらをはずし、海の唇を外気に触れさせた。

「桜音以外と？」

「うん」

「あるわけないだろ」

海は私の目を見てきっぱりと断言した。

「本当!？」

「本当。なんで俺が桜音以外とキスしなきゃならないんだよ」

海はそう言って私の事を抱き寄せると、ギュツと抱きしめた。

「大体俺がキスしたり、こうして触れたいって思うのは桜音だけだ」

「私だけ……?」

「ああ。桜音だけだ」

心臓の音もやばいけど、それ以上に嬉しい。

海がこうしてくれるのが、私だけって事が。

「絶対?」

「ああ、絶対」

私はその言葉を聞くと海の背に手をまわし、ギュツと抱きしめ返す。少し伝わってくると良いな。私も海と同じ気持ちだよって。まだ言葉にして伝えられないから。

……あれ?

今、もしかしてって思ったことがある。

海って、私以外とキスとかしないんだよね?

それってもしかして

でも、海が私なんか……

私はこの時自分の事で精いっぱいだったため、海が時間が止まったかのように

動かなくなってしまったのに気付かなかった。

第十話 本人の知らぬ間に進行中。

やっぱこれってうぬぼれなのかな？

ここ最近考えている事がある。

もしかしたら、海が私の事を好きなんじゃないかって。

だって、普通好きな人とかキスしないよね？

海、私としかキスしないって言ってたし。

でも……

海は高嶺の花。

だって世が世なら王子様と平民娘だよ？

あきらかに不釣り合いだもん。

でも、海のあの発言

あゝっ。も〜、頭の中こんがらがる！！

…… やっぱみくに相談しよう。

きつと驚かれると思うけど。

私はみくに海の事が好きって言ってない。

だってみくって海の事嫌いなのか、すぐつかかってくるんだもん

……

「逢月桜音！！」

「うわっ」

突然耳元で怒鳴られ、思わず両手で耳を塞ぐ。

その声の主によって急速に私は現実世界へと戻されてしまった。

あ、やばっ。私、たしか今……！！

声の主が誰かわかった瞬間、サーっと血の気が引いていくのを感じ

だ。

恐る恐るその人の気配がする方向に目を向ける。

すると案の定、眉間に皺をよせこつちを睨んでいる日下部君と目があつた。

こつ、怖つ。

日下部君の後ろにはレフ板とライトが見え、その手にはカメラが握られている。

「お前、今何してるかわかつてるよな？」

「さ、撮影中です……」

私は日下部君に頼まれて、今日もまた練習台になっていたのだ。

今回はこの間と違い、背中に羽をつけられ天使の格好をさせられている。

もちろんメイクはプロの人にやって貰い、服もスタイリストさんが用意してくれていたもの。

「ねえ、どうでもいいけど早く撮りなよ」

そう言いながら、あきれ顔でこつちを見ているのは人気モデルの聖。今日の彼の格好は、上がキラキラ輝くドクロが大きく描かれている白Tシャツ、下は紫のカラーデニムにウォレットチェーン。

さっきまでこの隣りのAスタジオで撮影だったらしく、それが終わったのでこちらの様子を見に来たらしい。

思うんだけど、私じゃなく被写体を聖にすればいいと思う。だって、本物のモデルさんなんだし。

「んな事わかつてるって。けどよ、モデルのこいつがポケっとしてたらどうにもなんねえだろ」

「たしかにそうだけどき。でもこのスタジオ使えるの、後30分しかないんだよ。それに、今日中にデータ持ってかないと当日まで間

に合わなくなるじゃんか」

ん？当日まで間に合わない？

「ねえ、これって写真の撮影練習だよな？」

「あ？何だよ急に」

だって聖の話聞いてると疑問を抱かずにはいられなくて。

「とにかく、撮影続けるぞ。逢月、お前ポケっとすんなよ」

「え、ちよっ……」

誰か私の不安を拭って！！

そう思った時だった。

「逢月桜音ってどの女よ！！」

と甲高い声が聞こえたのは

第十一話 愛海

スタイリストの相川さんやメイクの笠井さんの制止を聞かず、カットとミュールの音を響かせながら、その女の人は私達の前へとやって来た。

白い半袖のパフスリーブのカットソーに、ドット柄のベアワンピースを重ね着していて、ワンピースには赤い太ベルトを巻いている。

「どうしてここに……?」

名前を聞かずとも、私はもうその人が誰なのかを知っている。

だってこの人は

スツと通った鼻に目力抜群のぱっちりな目、グロスによって薔薇のように色づけられた唇。

本来なら長い明るい茶色の髪は、編み込まれショートカット風にされている。

笑うとえくぼが出て可愛いんだけど、無表情なのでそれは見えない。

どうして愛海^{あこみ}がここに!?

整った顔に、スラリとした体に長い脚。

それはまるで雑誌から飛び出してきたモデルさんのよう……じ

やなく、この人は真正銘本物のモデルさん。

彼女が専属モデルをしているファッション雑誌は、私も愛読中。

本来ならそんな人が目の前にいるので、驚きのあまりテンションがあがるはずなんだけど、この状況じゃそうはいかない。

「まさか、あんたが逢月桜音?」

腕を組みながら愛海さんは、刺すような視線で私を見下ろしている。背高っ。

日下部君と視線一緒ぐらいだから170？は絶対に超えているはず。私の身長は155？なので愛海さんを見上げる形になる。

「そうですけど……」

おどおどしながら返事をする、鼻で笑われてしまった。

「こんな大掛かりなセットまで用意して、まさかモデル気どり？」

「あ、いえ。別にそんなつもりじゃないです」

たしかにセットが大掛かりって事は同意する。

まるで雑誌か何かの撮影してるみたいだもん。

だってシャンドリアとか、アンティーク風の赤いベルベットのソファとか、セットがちゃんと組まれてあるんだよ？

「だったら今すぐ辞めなさいよ。みつともない」

み、みつともない……

確かにこういう格好は、可愛い子がやればいいと思うけど。

でもさ、これそもそも写真撮影の練習だし……！

そう、これはあくまで練習。世に出るわけじゃない。

「まさか自分で似合ってると思ってるのか？」

「いえ……」

「でしょうね。だってそれ酷過ぎるもの」

愛海さんは吹き出して笑い始めた。

もう嫌だ。

笑われてまでやりたくないもん。

「もう無理」って断ろうと日下部君の方の様子を見ると、カメラをいじっていた。

ちよっ、まさかこの状態で撮影するの！？

「日下部く」

日下部君に声をかけようとしたんだけど、急に走った手首の痛みに言葉が止まってしまふ。

痛い……

痛みに顔を顰めながら手首を見ると、愛海さんが私の手首を掴んでいた。

「まさか、撮影続ける気じゃないでしょうね」

だからそれを今から聞こうと……

「さっさと着替えて帰ったら？ すっごい目ざわり」

ぐいっと引っ張られ、前に体重がかかってしまった。

やばっ。

大抵やばいって思ったら、もう遅い。

この時の私は衣装としてヒールが高めのブーツを着用していた。

しかも十五センチはあるんじゃないかってぐらいのもの。

そんなの履くの初めてだから、私はまだまともに歩く事が出来ない。

そんな状況でバランスを崩してしまっただらどうなるかなんて、もう

わかりきっている。

第十一話 愛海（後書き）

長いので区切ります。

第十二話 何気に酷くない？

急にひつぱられてしまい、私は案の定床に倒れこんでしまった。

愛海さんは私がバランスを崩したのがわかると、とっさに手を離れたため無事だ。

痛い……

頬を床にぶつけて痛いし、何より足首がじんじんとする。

あ……もしかして足捻っちゃったかも……

右足をさすりながら、起き上がろうとすると「大丈夫か？」と日下部君が手を差し伸べてくれた。

「ありがとう」

お礼を言って日下部君の手をとり、起き上がろうとする。

だが、普通に立とうとしてしまったため、右足に力が入ってしまった。

やばっ。

そのため右足に激痛が走り、ふら付いてしまう。

また床と衝突！？と思ったけど、咄嗟に聖が支えてくれたので倒れずにすんだ。

「まさか足捻ったとか言わないでよ？」

「えっと……その……」

聖に対して私は曖昧に笑う。その間も足の痛みは続いている。

どうしよう……もしかして捻挫かもしれない。

「ちよつと足見せてみる」

しゃがみ込んだ日下部君は右足を触っている。

もしかして、触診してるのかな？

「日下部君、捻挫とか詳しいの？」

「あゝ、ちよつとな」

へへ、何か運動とかしてたのかも。

この時の私はあまり触れなかった。

もう少し触れていれば、この時私のファーストキスの相手がわかったのに。

「骨は折れてないが、一応病院行った方がいいな」

日下部君は立ちあがるとそう私にそう告げる。

病院か。タクシー呼ばなきゃ。何番だっけ？

そんな事を考えていると聖が、

「なら、次僕移動だから乗せて行くよ。鈴木さん喫煙室いるから、呼んでくる」

と言ってくれた。

マネージャーの鈴木さん呼びに行こうと、聖はドアの方向に向かって歩き出す。

でも、その足が愛海さんの言葉によって止まってしまふ。

「残念。足捻ったのなら、撮影は中止ね」

「愛海さ、他に言う事ないの？」

聖はかなりご立腹なのか、両腕を組んで愛海さんを睨んでいる。

その声のトーンはかなり低く、威圧感がすごい。

「わざとじゃないにしろ、この子怪我したかもしれないんだよ？君の下らない嫉妬のせいだ」

「っ」

端正な愛海さんの顔が歪む。

「正直、僕にもこの子の良さなんてさっぱりわからない。だってあまりにも……」

聖は私の方を見ると、ため息を吐く。

あまりに何！？まあ、大体予想はつくけど。どうせ普通って言いた

いんでしょ？

ほんと帰りたい。なんで私、今日ボロボロ言われなきゃいけないの！？

「この子はずば抜けて可愛いわけじゃないし、特別頭がいいわけじゃない。」

それにさしあたって、これだというものもない」

「ちよつと待って！！聖、私の事嫌いななの！？」

たしかにこれと言って得意だと言って言う事はない。

頭も良くも悪くもない中だし、顔もスタイルも普通。

本当の事ももしれないけど、さつきから酷くない！？

「え？別に普通だけど。なに？好きだと言ってほしいの？」

いや、そう言う事じゃなくて……

真顔で言う聖に、私は言葉を失う。

「だから愛海が気に食わないのもわかるよ。だって海とはあまりに釣り合わないさすぎる。」

でもさ、愛海だってもうわかってるんでしょ？海が本気な事。わからないわけないよね？

あの海がこの子のためにモデルのバイトしてるぐらいだから」

え？海って私の為にバイトしてるの？

とっさにそう聞き返そうとしたけど、雰囲気的に出来なく口を閉じる。

「だから君が何を言おうが何をしようが海の気持ちは変わらない。」

この子の格好より、嫉妬でやつあたりする君の方がよっぽどみっともないよ」

「じゃあ、海はこの女の何処が好きなのよ！？」

え？

ボロボロ言われテンションが下がりまくった私だったけど、その言葉によつて浮上する。

やっぱり海つて私の事好きでいてくれるの？思い違いじゃなくて？

「ねえねえ、海つて……」

隣にいる日下部君の服を引っ張る。

日下部君なら、海の好きな人わかるかも。

でも反応がない。

あれ？どうしたんだろう？

日下部君を見ると、目を大きく見開いたまま一点を見つめている。

それに気づいた聖たちもその視線を追う。

あ。あれは

「愛海、ちよつどいいじゃんか。この子のどこがいいのか、本人に聞いてみれば？」

第十三話 只今、かん口令発令中。

「一体これはどういう事なんだ!!」

スタジオの中に海の怒鳴り声が響く。

海は腕を組んで日下部君と聖を睨んでいた。

その視線は鋭く思わず後ずさりをしてしまいそうだ。

うわゝ、やっぱり大人っぽい。

そんな空気の中、私は一人海に見惚れていた。

いつもの制服や私服と違って、今日の海はグレイのストライプタイプのスーツに水色のネクタイ、

それに無地の白いワイシャツを着用している。

海は時々こうしてスーツで出掛ける時があつた。

それはほとんどが啓吾さんの会社に経営の勉強をしに行く時だったり、パーティーだったり、ほとんどがお仕事関係の時だ。

今日もスーツ着ているから、お仕事関係かもしれない。

「あゝ、これはなんていうかよ、あれだ。あれ」

私の隣では日下部君がしどろもどろになりながらも、なんとか誤魔化そうとしている。

一方の聖の方はというと、落ち着いて海の睨みを流していた。

「海、どうしてここにいるの?」

「今は俺の事なんてどうでもいい。それよりも桜音、一体その格好はなんだ」

「一応天使だよ」

私の今の格好はパフスリーブの白い膝上のワンピースに、紐で締めるタイプのコルセットを巻いている。

ワンピースは、裾の部分をパニエで膨らませたり、リボンやフリル

がふんだんに使用されるなど甘めだ。

そして首には花のコサージュのチョーカー、背中には天使の羽。その上、金髪のウィッグにブルーのカラコンをつけている。

「天使に見えない？」

「いや、見える。あまりに似合いすぎて、最初見た時本物の天使かと思っただくらいだ」

「……え。それはないと思うよ……」

だって日下部君なんて、これ見た時「幼稚園のお遊戯会か！！」って言っただもん。

なんかもつと神聖なものにしたかったのに、かなりイメージが違うものになったらしい。

そもそも私にそれを求めるにはハードルが高すぎると思う。

「それで、桜音はどうしてこんな愛らしい格好しているんだ？」

海は穏やかな微笑みを浮かべながら、私を見ている。

愛らしいのか……？という疑問は浮かんでくるが、海がそう言ってくれるなら少し嬉しいかも。

「内緒」

「そうか、内緒か。で？日下部、帰るならこの状況を説明してから帰れ」

あ。今、途中から声のトーン明らかに変わった。

海の言葉に扉に向かってこそそこそ逃走中の日下部君の大きな体がビクツと動く。

「つつか、なんでいんだよー！！今日お前入ってなかっただろ」

「親父の仕事の付き合いだ。ついでに聖に顔出しをしようとしたら、桜音もいるしお前もいるし。

それで、ここで何してんだよ？」

「まだ言えねえよ！！」

それにしてもなんで隠したがるんだろう？

ただ私をモデル代わりにして「撮影練習してました」って言えばいいだけなのに。

どうやら日下部君はこの事を海に内緒にしたいらしい。

そのため私を含めスタイリストさんなどスタッフ全員に、かん口令が敷かれている。

「まさか、また桜音使って妙な事考えてるんじゃないだらな？」

私に向ける柔らかな視線とは打って変わって、

海はまるで肉食獣が獲物を狙うような視線で日下部君を見ている。

その視線に負けたのか日下部君が口を開きかけたんだけど、

それが音となって私達の耳に届く事はなかった。

てつきり日下部君がしゃべると思っていたら、聖がしゃべり出してしまったからだ。

「ねえ、海。桜の姫が他の男に触られるの嫌？」

「は？急に何言ってるんだよ。そんなの当たり前だろ」

「そう。じゃあ、どうしようか？海が運ぶ？」

聖は顎にてをかけ首を傾げ、海に尋ねる。

「お前、一体何が言いたいんだ？それとこの状況何か関係あるのかよ？」

「関係はないよ。別に大した事じゃないけど、一応言っておかなきゃと思ってるさ。」

桜の姫さ、愛海に引っ張られて転倒したんだ。姫が海の寵愛を受けてんのがお気に召さないみたい」

「はあ！？大丈夫なのか！？」

「え？うん。全然平気」

っていうか、少し落ち着いて。

海は私の両肩に手をおき、ゆすりながら尋ねてきた。

「愛海、どういつつもりだ。話があるなら、俺が受ける。今後一切桜音には手を出すな」

愛海さんは青ざめて震えている。

無理もない。

だって海の周りの温度マイナスの世界だし、声だって地を這うような声だし……

「姫、足捻っちゃったんだって。これから病院に連れて行きたいんだけど、海どうする？」

あ、聖言っちゃダメっ！！

海、心配性だから絶対大騒ぎになっちゃっ！！

私の想像通り、数秒後私を抱きかかえた青ざめた海が廊下を全力疾走していた。

第十四話 恋の相談ならやっぱり。

なんだか、少し緊張する……

少しでも落ち着くため、紅茶を飲んだ。

そしてテーブルをはさんでむかえ側にあるダークブラウンの皮ばりのソファに座っている人に向ける。

するとそこには紺と白のマリントタイプの半袖のカットソーに、デニムのショートパンツという格好のみくがこちらを見ていた。

「足、大丈夫なの？」

「うん、平気。軽い捻挫だった」

私の右足には、ぐるぐると包帯が巻かれている。

あの後海に病院に連れて行ってもらい、お医者さんに見て貰った。

そして、下された診断は軽度の捻挫だった。

三日間は運動もせず大人しくしてれば、一週間ぐらいで治るみたい。これなら、海の誕生日パーティーにギリギリ間に合う。

「良かったね、軽くてすんでき。でもさ、なんで捻挫なんてしたの？」

「うん。実はその事も含め、みくに相談したい事があったんだ」

「相談？いいよ、何？」

みくはそう言うと、麦茶に口を付ける。

実は今日はみくに海の事を相談しようと思い、家に来て貰ったのだ。海は部活中で家にいないので、話すにはちょうどいいし。

「あのね、実は好きな人がいるの。それで……　　つてみく!？」

まだ肝心の内容を離していないのに、みくが麦茶を詰まらせたらしくゴホゴホと咳き込んでしまっている。

「だっ、大丈夫!？」

「だい……じよ……ぶ」

私が立ち上がるうとするの見て、みくはそれを手で制する。そして何度が咳き込むとやがて落ち着いたのか、大きく深呼吸し目に溜まった涙を擦った。

「あんた好きな奴いたの！？それってうちの学校！？っつか、そもそもそいつは誰よ!？」

みくはダンツとテーブルに手をつき、前のめりになっている。その迫力に、若干の恐怖心を感じずにはいられない。

「あつ、あのね隠してたわけじゃないよ。何度か言おうとしたの！でもみくその人の事苦手っていうか、嫌いっていうか……」

「はあ？私が嫌いな奴？」

「うん」

だつてみく海の話とか耳にすると、すぐにおもしろくなさそうな顔するじゃん。

それに前に「海の事苦手？」って聞いたら、「ムカツク」って言うてたし。

「で、誰なのよ。名前言ってくれなきゃわかんないよ。もしかして言えないとか？」

「言えなくない。あのね、海なの……」

「は？かい？かい……?」

みくは首を傾げながら、ぶつぶつと海の名前を何度も呟いている。もしかして、誰だかわかんないのかな？

やがて思いついたのか「まさか!！」と応援団顔負けの声で叫ぶと立ちあがった。

ちよつ、「ご近所さんにご迷惑が!！」

「まさか、海ってあの在原海の事じゃないでしょね!？」

返事の代わりに頷くと、みくは力が抜けたようにソファに座りこんでしまう。

えっ、ちよっ!?!みく!?!?

「ありえない。まさかこうなるなんて」

みくはそう言ったまま急に黙りこんでしまった。

どうしたんだろう……??

どれくらい経ったのかな?

それは数秒だったのかもしれないし、数分だったのかもしれない。

みくが黙りこんでしまっしてから、しばらくぶりにその口が開く。

そしてその言葉に、私はしばし呆然となった。

「あんた達が付き合ったら、アタシと桜音遊べなくなるじゃない!

!」

「は?」

なんで付き合うとかの話になるわけ?

というか、遊べなくなるってどういう事?

もし仮に海と付き合ったとしても、みくとは遊べるはずだよ。

「いい、桜音。あいつはね、あんたの事が大好きなのよ!!いやも

う好きっていうか、うっとおしいぐらいの溺愛レベルで。だからあ

いつは桜音の事になると、私にまで焼きもち焼くぐらい器が小さい

男なの!!」

「は?」

「は?じゃないっ!!」

思わず肩がビクツとなった。

えっ、何?なんなの!?!?

急に立ち上がり拳を握りしめ始め、みくは段々とヒートアップしてきはじめてしまった。

「いい？桜音。私は在原海の事を嫌いでもないし、苦手でもない。
ただムカつくだけなのよ！！」
ああ、思いだしただけでも腹立つ。あの時の事
」

第十四話 恋の相談ならやっぱり。(後書き)

一か月以上ぶりの更新って…

こんな亀更新でも読んで下さってる方、ありがとうございます…!!

第十五話 眠り姫と王子様

「ねえ、一体何があったの？」
首を傾げみくを見つめる。

するとみくは苦虫でも噛みつぶしたような顔をしていた。

えっ、ほんと何があったの……っ!?

なんかみくの様子を見てみると、すごく不安になってしまっ

た。
「パシリにされたり、無理やり携帯の番号とアドレス交換させられ

まあどれも元をたどれば、あいつの桜音バカのせいだけど」

「はあ!?!いつ!?!」

思ったより大声が出てしまい、慌てて自分の口を押さえる。

海がみくをパシリにしたなんて信じられない。

それと、私バカって一体何なの?それ。

「いつだったか覚えてないけど、あんた中庭に日向ぼっこしに行っ
た時あったでしょ?

クーラーで体冷えたからって言ってさ」

「え?」

いつのことだろう?

クーラーで冷えると、結構頻繁に廊下とか中庭に出ちゃってたんだ
よね。

そのためみくの話しているのがいつのことなのか、見当がつかない。

「桜音日向ぼっこしに行って、あの暑い中そのまま寝ちゃった時の
事よ。

ほら熱射病になると悪いからって、あんたが寝てる間に運ばれた時
あったじゃん」

「あつ、あの時のこと!!」

思いだした。あれはいつだったけ？

私もみくと同じではつきりとした日にちは覚えてない。

でもテスト勉強してたから、テスト週間より前のことだとは思う。

あの日クーラーで体の冷えた私は、中庭で日向ぼっこをしてたんだけど、

そのまま夏の暑い日差しの下で寝てしまったのだ。

だってあの時お昼ご飯食べ終わった後だったし、昨夜テスト勉強してかなり眠かったんだもん。

「あの時びっくりしたんだよ。だって中庭で寝てたのに、起きたら写真部の部室だったんだから」

目を覚ますと中庭のベンチにあった私の体は、なぜか部室のソファの上へと移動されてあった。

わけがわからずそばにいたみくに聞くと、「熱射病になると悪いから運んだ」との説明があった。

そう言えば、結局あれは誰が運んでくれたんだらう？

みくは、「引きずって運んだ」ってわけのわからない事言うし。

「その日、実は後からアタシも中庭に行ったのよ。学校抜け出してコンビニに行くために」

「コンビニ行くななら、昇降口から出るんじゃないの？」

中庭寄ってから行くんじゃないかと、直に昇降口に行つて外に出た方が早いと思うんだけどな。

「バカつ。そんな事したら守衛に見付かってすぐバレるでしょうが

!!裏門からこっそり行くのよ」

「でも、裏門って鍵掛かってないっけ？」

「……。」

みくの沈黙を聞いて、合鍵か何か持ってるってというのがなんとなくわかった。

一体何処で手に入れたんだろう。

「とにかく、中庭突き抜けて東棟に向かう。そこでその空き教室から裏門に抜けるルートを使うと、

最短コースなのよ。だから、アタシも中庭に向かったわけ」

「うん」

「そしたらそこで偶然見ちゃったのよ」

「何を？」

「……眠り姫が王子様にお姫様だっこされているところ」

「……眠り姫？」

「……ん？姫？」

あれ、なんだろう？急に背中に変な汗が。

合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負(前編) (前書き)

なんとか、バレンタインギリギリ間に合った。

蒼依から、いつも読んでくれていてる方にお礼小説です。

付き合ってる設定なので、未来編。

合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負(前編)

「サイズどう?きつくない?」

「うん、丁度いいよ」

「良かった」

私の返事に隣りに立っていた、制服にグレーのカーディガンを羽織っている女の子は、ほっと胸をなで下ろした。

少し脱色したセミショートの髪に、トレードマークの赤い太めのフレーム眼鏡。

彼女は、クラスメイトの日村ゆかりちゃん。

趣味が洋服を作る事らしく、部活も被服部に所属してるの。

「被服部って、ほんといろいろな衣装作ってるよね」

私は感心しながら、被服室の中央にある大きい鏡を覗く。

するとそこに映っているのは自分の姿は、白いフリルのブラウスに黒いミニワンピース、それに白いエプロンという格好。

ワンピースの裾やニーハイにはフリルが飾り付けられていて甘めだ。メイド服初めて着ちゃった。

この服はゆかりちゃんが製作したもので、試着を頼まれたの。すっごく着心地いいし、安っぽく見えない。

「被服部って人数少ないけどすっごく個性的な子ばっかでさ、イベントでコスプレする子からデザイナー志望の子までいろんな人が所属してるの。だから、結構いろんな作ってるんだ」

ゆかりちゃんはそう言いながら、紙袋をあさり始める。

そして何か白いふわふわしたものを取り出すと、私にイスに座る様に促した。

「ね、何それ?」

「ん？ちょっと待ってね。すぐわかるから」
髪を梳かれたかなって思ったら、何かクリップでも止めているようなパチンというような音が聞こえてきた。
もしかして、何かヘアアクセでもつけてるのかな？
なんてぼんやり考えてると、「桜音」という声と一緒に被服室のドアが開かれた。

あ、みくだ。

一瞬こつちを見て動きを止めたみくは、やがて「ちょっと、何それ！！可愛いんだけど！！」と言いながら、私達の方へと駆け寄ってくる。

「ゆかりちゃんが作ったの」

「すつげえ。この猫耳本物みたい。ふわふわして可愛いし！！」

……猫耳？

ゆっくりと手を頭上に持つていき、何かあるか手で確かめると、たしかにふわふわしたものに触れる事が出来た。

ちよつと！！なんで猫耳！？

手鏡を取り出し、見てみると私には猫耳が着けられていた。

しかも、生えてるみたいに違和感無いし！！

「でしょ。桜音ちゃんに似合うって思ってた徹夜して作ったの。

あ、でも桜音ちゃんウサギって感じもするよね」

「あ、わかるわかる。なんか、桜音って小動物って感じるもん」
いや、二人とも少し冷静になって考えてよ。

メイド服に猫耳だよ？

こつちというのは、それこそ似合う人を選ぶと思うけど。

「これなら、間違いなくどのチョコよりもインパクト大でしょ」

「もしかしてこの衣装って……」

「うん、そう。桜音ちゃん、バレンタインのことですごく悩んでたでしょ？だからこれなら他のチョコなんて記憶にも残らないくらい思い出に残るかなって思ったんだ。それあげるから、着てね」
そっち！？そっちの方向にいつちゃったの！？」

今度の日曜はバレンタインデー。

実はそのバレンタインが私の頭を悩ませているのだ。

この間日下部君とバレンタインの話になった時に、海が毎年すごい数のチョコを貰うって話を聞いてしまった。

学校だけじゃなく、実家にも送られてくるって一体どんな数なの……
そんな話を聞いてしまい、普通の手作りチョコじゃ太刀打ちできないと思ったのだ。

だから、「インパクトのあるチョコって何？」って、みくやゆかりちゃん達に聞いた事があった。

でも、さすがにこれは……

「あのね、気持ちは嬉しいけど……無理じゃないかな……」

「なんで？似合ってるよ」

「いや、無理でしょ！？これで海の前に出るんだよ？」

可愛い子ならありかもしれないけど。

「え、逢月さんなら大丈夫だよ。在原くんも喜んでくれると思うけどな」

「えっ？海ってこういうの好きなの？」

「ん、こういうの好きっていうか、在原くんは逢月さんが……」
「ゆかりちゃんという言葉を遮るように、みくの囁きが聞こえてきた。」

「桜音知らなかったの？あいつ、こういうコスプレとか大好きなんだよ。だから、桜音も時々着てあげなきゃ。そしたら、桜音の事もっと好きになるとおもっただけだな」

戸惑う私に囁く悪魔の囁き。

その囁きは数分続き、結局私はその衣装を賣って帰った。
猫耳付きで。

合鍵バレンタイン企画 インパクトで勝負（中編）

あの、せめて「なんて格好してるんだ!？」とかでもいいから、何か言葉を下さい。

じゃないと、この静寂に耐え切れないんです

隣りに座っている海を見ながら、私はそっと溜息を吐く。
海は斜めにソファに座り、隣りにいる私の事を見ている。
何処見てんだろう？

その瞳はどこか遠い所を見ているようだ。

今日はバレンタイン当日。

ゆかりちゃんに貰った衣装を着て、みんなと違うチヨコで差をつけようとしたんだけど……

私が視界に入ったと思ったら、海がこうなってしまった。

もしかして、引いちゃっているのかもしれない。

「海、海ってば!！」

ダメだ。揺らしても名前を呼んでも何の反応もしてくれないよ。

うくん、こうなったらみくから聞いた対処方法で。

実はこの間もしかして海がフリーズするかもしれないって聞いていたのだ。

そしてその時、ついでの対処方法も聞いておいた。

「海。起きないと、一週間キス禁止命令出すよ？」

「はあ!？」

ついさっきまで固まっていたのが嘘のように、海は体を大きく動かし

おおっ、さすがみく。

「キス禁止命令！？しかも一週間もだと！？まるで拷問じゃないか！！」

そんなの絶対に嫌だ。どうしてだ！？桜音」

両肩を海に掴まれ、激しく揺らされる。

拷問ってそんな大げさな。

海にとっては重大な事なのか、ものすごく真剣な顔をしていた。

「ねえ、海。冗談だから、少し落ち着いて。ねっ？」

肩にかかっている海の手にとつと触れ、なんとか静まるように促す。

「本当か？」

「うん」

「……桜音。あんまり俺をいじめないでくれ」

海は私を自分の膝の上へのせ、抱きしめるとほっと息を吐いた。

「それで、どうしたんだ？この格好。幻覚かと思って、しばらく動けなかったぞ？」

「引いてたんじゃなくて？」

「引くわけ無いだろ。こんな可愛いのに」

そう言っつて海は、ちゅと音をたてて頬にキスをする。
も〜。

思わずその場所を手で押さえたんだけど、その手を掴まれ今度はその指先にキスをされてしまった。

……たまに思うんだけど、海ってキス魔？

「しかし良く出来てるよな。衣装もだが、この猫耳。本当に生えるように見えるぞ」

「すごいよね〜。これ、ゆかりちゃんが作ったの。海、いっぱいチョコ貰うでしょ？」

だから、インパクトに残るチョコを贈りたいって言ったの。

そしたら、ゆかりちゃんがこれを着てチヨコあげたら？って」

「……たしかに、インパクトは残るな。でもな、桜音。」

俺は桜音からのチヨコ以外いらぬ。だからの全部、断ってるんだ」

「ええっ!？」

「机の上にあるものやロッカーに勝手に置かれた物は全部人にあげてるんだが、知らなかったのか？」

知らなかった……

も、誰か教えてよ!!そしたら、この恰好せずにすんだのに。

合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負（後編）

「で、桜音。俺、その……そろそろ欲しいんだが……」

「うん。ちゃんとあるよ。はい」

私はブラウンの包装紙に、ゴールドのリボンで綺麗にラッピングされている物を海に渡す。

すると海は「ありがとう」と言いながらそれを大事そうに受け取ると、目をキラキラと輝かせながらそれを見つめた。

よかった。すごく喜んでくれているみたい。

「あ、そうだ。あのね、海ってメイドさんの格好が好きなの？それとも、ナース服とかなの？」

私のその言葉に、海は生チョコを口まで持っていったまま動きを止める。

あ、また固まつちゃった。

やっぱこういう趣味って、人に知られたくないものだったのかも。

「……桜音。いつ俺がそんな事を言った？」

「え？違うの！？だってそう聞いたよ」

「佐々木か。佐々木だろ！！こういうこと言うのは、あいつしかない！！」

海が珍しく声を荒げて叫んだ。

すごい、海。よくわかったね。

「ほんとにあいつは、また桜音をからかって。いいか、桜音。

俺は別にコスプレとか興味ない。ただ桜音のは、ありだっと思ったけど」

「そつなの？興味ないのなら、着替え……」

「それはダメだ。まだ着替えるな」

そう言った海の目が血走っているように見えるのは、気のせいだろうか？

汚すと悪いし、この格好恥ずかしいから着替えたいんだけどな。

「まだ良く見てないし、それに」

「それに？」

首を傾げ海を見上げると、口角の上がった海と目があった。

あ。なんだろう。

これ、逃げた方がいいような気がする。

すぐさま逃げるため海の膝から降りようとしたんだけど、読まれていたらしく、腰に海の腕が巻きつけられ降りれない。

「桜音。メイドの仕事ってなんだ？」

メイドさんのお仕事って、紅茶持ってきたりするやつじゃないの？
うちにメイドさんいたことないから、ドラマとかの知識しかないからよくわかんないけど。

「ご主人様にお仕えるのが仕事だよな？」

「ん〜、まあそうだと思うけど……」

「そうだよな。なら、桜音。今の桜音の格好は何？」

「え、メイドさん」

それ以外何に見えるんだろう？

「良く出来ました」

海に頭を撫でられるけど、なんかいつもと違って落ち着かない。
むしろ、ちょっとした恐怖を感じる。

「しかも、今日はバレンタイン。ここに、桜音に貰ったチョコがあります。はい、桜音」

「ん」

「食べちゃ駄目だぞ」と言われ、唇にチョコを啜えさせられてしま

った。

「桜音がメイドさんなら、ご主人様は俺だよな」
待って!! おかしいでしょ!?

私、メイドの格好してるけど本物のメイドさんじゃないよ!?
しゃべれないので、首を激しく横に振る。

「可愛いメイドさん。ご主人様にチョコを食べさせて」
まさか

その予想通り、海は何の躊躇いもなく私の啜っていたチョコを食べ
た。

しかも、唇についたチョコなめられちゃったし。

「〜っ!?!」

「うん。旨い」

いや、待って!! 普通に食べてよっ!!

「せっかく桜音がそんな可愛い恰好してくれてるんだから、一緒に
楽しまないとな。

桜音手作りチョコまだいっぱいあるし」

血の気の引く私とは違い、晴れ晴れとした海的笑顔。

生チョコ八個作ったから、あと七個。

これをあと七回? 無理。無理すぎる。

海とは付き合ってるけど、いつまでたっても慣れない私にはハード
ルが高い。

そんな追い込まれた私に、良い案が浮かんだ。

そうだ。チョコ、全部食べちゃえばいいんだ。

すぐさま行動に移し、ものすごい勢いでチョコを全部平らげて問題
解決!!

……なんて都合良くなるわけもなく、数分後「このままチヨロを食
べさせればよかった」
って思っぐぐらいの目にあってしまった。

合鍵 バレンタイン企画 インパクトで勝負（後編）（後書き）

これでバレンタイン企画は終了です。

本編とブログの番外編は今書いている途中なので、

これからもお付き合いして下さるとうれしいです。

では、稚拙な文でしたが読んで下さった方ありがとうございました。

第十六話 秘密の崩壊

私のばかりっ！っ！なんて寝ちゃったのよ！！

赤面する顔を手で覆いながら、激しくあの時寝てしまった事をものすごく後悔していた。

もう嫌だ。穴があつたら入りたい。

みくが中庭で見たのは、海にお姫様だっこされる私だつたらしい。毎回思うけど、なんで私って一度寝るとなかなか起きないの？

この間だつてリビングのソファで寝ちゃって、そのまま海に部屋に運ばれちゃってたし。

今度からその辺で気軽に寝ないようにしなきゃ！！

って毎回思うんだけど、眠気には勝てない。

だめすぎるよ、私……

「普通そんな光景見たら、言葉も忘れ茫然と見るじゃん？それなのにあの王子め！！アタシに気づくと『そこでぼーっと突っ立ってるのなら、悪いが飲み物買ってきてくれないか？できれば、スポーツドリンク』って言ったのよ！？大体、なんでアタシが買ってこなくちゃなんないの！？自分で買いに行けよって話でしょうが！！……まあ、結局なんだかんだあつて行っただけ」

みくはテーブルの上にあつたタルトの苺に、フォークをざくつと突き刺すとそれを口の中に入れた。

なんだろう？食べてるだけなんだけど、ちょっと怖い。

「もしかして、さっき言つてたパシリにされたつてその事？」

「そうよ。あんた寝起きに飲んだでしょ？ちなみにあんときアタシが食べてたアイス、あれあいつの奢り。アタシの分も買ってきて良いつて言われたから」

「ええっ！？あれ海の奢りだったの！？」

写真部の部室で目を覚ました時、みくがペットボトルを渡してくれた。

寝起きだったからか、すつごく喉乾いてて美味しかったから覚えている。

まさか、あれが海の奢りだなんて……

てつきりみくのお奢りだと思ってた。だって「お金払うよ」って言ったら、「奢りだからいい」って言ってたんだもん。

後で海にお礼言わなきゃ。

「最初はいいつがなんで桜音を気にかけるのかわからなかった。でも部室に行ってから、あいつが桜音の事を好きだってわかったのよ」

「どうし」

「ただいま」

どうして？と聞こうとしたんだけど、玄関先から聞こえてきたその声に血の気が引き、言葉が出なかった。

「なんか今の声って……」

「ごめん！！ちょっと待ってて！！」

なんで！？なんで帰ってくるの！？

まだ部活中のはずなのに、海が帰ってきてしまったようだ。

こうなったら少しだけどっかで時間つぶしてもらうか、二階に上がってて貰おう。

そう思っただけで慌てて立ち上がった瞬間、足に激痛が走ってしまった。

「ちょっと大丈夫！？」

右足を押さえてしゃがみ込んでしまった私を見て、みくは慌てて私の傍まできてくれた。

「……平気」

「平気じゃないでしょ！！あんた捻挫してんのに、普通に体重かけ

て立ち上がるなんて」

痛い。痛いけど、海がこっちに来ちゃうかもしれない。
なんとか玄関に行かなきゃ。

そう思って、もう一度立ち上がろうとした時だった。
リビングのドアが開かれたのは

第十七話 他人には見えて自分には見えないもの

「桜音」

「は、はいっ!!」

みくに呼ばれ、思わず体がビクつく。

だって怖いんだもん……

目の前のみくは、腕を組んだまま般若のような顔でこっちを睨んでいる。

「説明しろ。なんでこの男がただいまって言いながら、家の中入ってきたのよ?」

「あの、その……」

「桜音!!」

どう話せばいいのかわからず、うまく言葉を発することが出来ない私にイラついたのか、みくはさっきより強く私の名を呼んだ。

ど、どうしよう!?!みくに海との同居バレちゃったよ!!

海にみくが来たことを言いに行こうとしたんだけど、その前に海がリビングに入ってきてしまったのだ。

ここはなんとか誤魔化すべき?

いや、もう誤魔化せないから正直に言うべき?

どうしたらいいのかわからず、視線で海に助けを求めた。

すると海はその視線の意味にわかってくれたのか、口を開く。

「大体想像出来ていると思うが、俺と桜音は一緒に住んでいる」

海は私の肩に手をかけると、みくに説明し始めてくれた。

だが、それを聞いてみくが顔を顰めてしまう。

「桜音バカになんか聞いてない。アタシは、桜音に聞いてるんだ」

「状況を説明するなら、別に俺だつたいいだろ」

「あんた、桜音バカは否定しないの？」

「自覚があるからな」

「でしようね。だつたら、黙つてな」

「だからなんで俺じゃ駄目なんだ？これは俺も関係あるだろが」

「アタシは桜音に聞いているの。あんた桜音じゃないでしようが！」

みくは烈火の如く怒りまくし立てている。一方、海は流水のごとくそれを流す。

温度差のある二人だ。

「か、海。私が話した方がいいみたいだから、話してもいい？」

このままじゃ埒があかない。

そう判断して、私はみくに自分の口から説明する事にした。

じゃないと永遠に二人の口論が続きそうなんだもん。

「大丈夫か？」

「うん」

海に笑顔で返事をする、深呼吸し、向かえに座るみくを見つめた。若干、口元がひきつるのは仕方ない。

「あのね、お父さん達が海外に転勤になったのは、みくにも話したでしょ？その時日本に残る条件を出されたの。それが、海と一緒に住むこと。なんか女の子の一人暮らしは危ないからだって。海もちようどお家の関係で一人暮らしをしようとしてたから、ちようど良いタイミングだったの」

「……ねえ、桜音。それはそれで危なくないかと思うのは、アタシだけか？こいつ男だよ？」

「私も最初思つたけど、海は大丈夫だよ。ねっ？」

私が海に同意を求めると、みくは海に憐れんだ視線を向ける。

その視線を受けた海は「放っておいてくれ」と言い、ばつが悪そうに顔をそむけた。

「ごめんね。事情が事情だから、言えなかったの」

「別に良いわよ。正直、話してくれなかった事については少しムカついている。でも、アタシも桜音の立場ならきつと言えなかったからしょうがないとも思う。だから、気にしないで」

黙ってた事怒られるかな？って思ってたのに、みくはあっさりと受け入れてくれた。

ごめんね、ありがとう。みく。

「で、在原海。あんたほんと巧くやったわね。外堀から埋めるなんて。これは作戦勝ちなの？」

みくは残っていた一口分のタルトを口に頬張ると、海に向かってそう言った。

「勝ちかどうかはまだわからない。ただ、桜音が『境界線』の中に入ってくれたのは確かだ。少し無理やり感があったのは、否めないが」

「境界線？ああ、『あの話』あんた知ってるの？」

「耳に入って来たからな」

「ふ〜ん。で？いつその結果がわかるのよ？」

「近々」

「そう。ヘタレも覚悟決めたってわけ」

「ヘタレって言うな。慎重って言え」

みくと海の会話に、私は首を傾げる。

ほとんどの会話が意味不明だ。

なんか、置いてけぼりって感じがするよ。

だって、二人の話ちつともわかんないんだもん。

そりゃあ私が知らない海の事を、みくが知ってる事もあるのは当たり前前だ。

もちろん、逆もある。

でも……

頭ではわかってても、焼きもちを妬いてしまう。

こんな風にみくと話してる海を見てるだけなのに。

焼きもちだけじゃなくて、自分に対してのコンプレックスとかも合
わさって不安もある。

みくは美人で大人っぽい。

よく町で声掛けられてるし。

海だって、そんなみくの事好きになるかもしれない。

そしたら勝ち目なんて全然ない。

人と比べるのは良くないし、きりがないと思ってても比べちゃう。

性格なのかな……？

涼には「桜音には桜音のよさがある」「って言うけど、そんなのわか
んない。

前に日下部君に「自分に自信持って、ちゃんと海に気持ち伝える」

って言われたけど、

どうやったら自身って持てるんだろう。

第十八話 そのメールは

うわ。カラフルなテディベアだ。

ゆったりとしたカントリー調のBGMを聞きながら、私は目の前のウッドタイプの棚に飾られているものに目が釘付けになっていた。

それはレッド、ブルー、イエロー、ホワイト、グリーンの五色のテディベア。

それぞれのテディベアの首にはリボンが巻かれ、胸の前に抱えるようにして本を持っている。

このお店オリジナルかなあ？

私はそつと、そのテディベアに手を伸ばす。

ここは、aliceっていう雑貨屋さん。

駅からかなり歩くんだけど、品ぞろえが多いためか店内には結構人が多い。

今日は海の誕生日のプレゼントをみくと買いに来たついでに、何か良いメッセージカードがないかな？って思ってここに覗きに来ただ。

「メッセージベアにすんの？」

「え？メッセージベア？」

首を傾げ隣りに居たみくを見つめる。

みくはボヘミアンタイプの白チュニックに、茶色のショートパンツという格好をしていた。

「知らない？この付属の本にメッセージが書き込めるようになってんのよ」

みくはそう言うと、テディベアの持っていた本を抜き取ると私に見

せる。
すると本だと思っていたそれは、メッセージカードのようなものになっていた。
へへ。一見すると本なんだけど、そのメッセージを書く所以外開けないようになってるんだ。

「……まあ。あんたの場合、赤だけどね」

「え？なんで？」

「これにはそれぞれテーマがあんのよ。たとえば、友情ならこの緑。お腹を押すと……」
「みんな仲良し。みんな好き」と
みくがクマのお腹を押すと、「みんな仲良し。みんな好き」と
機械的な子供の声が聞こえてきた。
どうやらこのテディベアはテーマごとの何かをしゃべるみたい。

「赤は恋愛。『好き好き、大好き』って言うらしいよ。いいじゃん、これ在原地。ちょうど、メッセージカード買いに来たんだしさ」
「たしかにメッセージカードを買いに来たよ？
でも、これを渡したら、私の気持ち気づかれちゃうじゃんか！」

「ほら、あんたはこっち」

「あ」

みくは私を持っていたグリーンの特ディベアと棚にあったレッドの特ディベアを交換してしまった。

「もっつ、みくー!!」

「いいじゃん。桜音が告げないなら、このクマにしてもらいなよ？
ほら、タグにも『キミの想いをボクが代わりに届けるよ』って書いてあるんだし」

特ディベアに着いていたちよつと大きめのタグを私に向ける。

するとたしかにそこには、『キミの想いをボクが代わりに届けるよ』とクマのイラスト付きで書かれていた。

告るなんて私には無理だもん……

私は棚にテイデベアを置くと、まだ何か言っているみくを置いて、メッセージカードのコーナーへと向かおうと足を踏み出す。

その時だった。

私の携帯が鳴りだしたのは。

「やばっ」

この着うたはメールだからすぐに切れると思うけど、店内には他のお客さんもいるから迷惑になっちゃう。

急いでカバンから出してキーを押し、大ニュースというタイトルがつけられたメールを開いた。

「……え」

時すでに遅し。

後悔しても仕方がないのはわかっている。
でも

送付者は友達からで、『大ニュースだよ。なんとあの王子様に、彼女がいるらしいよ！！さっき西公園で見つけて激写しちゃった』という文章だった。

何これ……

友達に私が海の事を好きな事を知らない。
だからたぶん、噂話というか、ゴシップ感覚で送ってきたんだと思う。

震える手で添付ファイルも開くと、そこには腕を組み微笑んでいるカップルの画像が出てきた。

それは海と知らない綺麗な女の人の姿だった。

第十九話 真相は本人に聞かないとわからない

世の中には似ている人が三人はいるっていう。だから私もそんな淡い思いを期待していたんだ。ほんのわずかの砂粒ぐらいのものだけど

私はピンク色の携帯画面をじっと見ている人を、テストの答案用紙が返却されるのを待つように、やや強張った面持ちで見っていた。その人は紫と白のタンクトップを重ね着し、迷彩のカーゴパンツという姿で、ソファに座っている。携帯を見ている人 日下部君は、ほんの三・四秒ほど画面を見たかと思うと、すぐ携帯をこっちに返してきた。

「そんで、どうなのよ？」

静まりかえったりリビングの中、隣りに座っているみくの声がやけに響く。

その催促を聞き、日下部君が口を開いた。でもそれはほんのわずかな希望を否定する言葉だった。

「海だろ」

「やっぱ、海なんだ……」

日下部君の言葉に私はうな垂れながら、受け取った携帯の画面を見た。そこに映し出されているのは、腕を組んで微笑みあっているカップル。

外国の女の人がプリントされたTシャツに、ブラックデニムという格好の海と、グラデーシヨンのかかった白と緑のマキシ丈ワンピースに、麦わら

帽子姿の美女。

綺麗な女の人は、海の腕に絡まる様にして腕を組んでいた。すっごくお似合いな二人。

それはきつと、他の人が見ても思っちゃうはず。

「双子の兄弟とかじゃなくて!？」

「いや、これどっからどう見ても海だろ。っうか、あいつ一人っ子だし」

「じゃあ、何?あいつ、桜音の事諦めて他の女と付き合ってるの!？」

テーブルから身を乗り出し、日下部君の襟元を掴み上げ詰め寄ってしまったみくを、私は慌てて止めに入った。

「みく!！」

そんなみくをなんとか落ち着かせようとするけど、なかなか上手くいかない。

すると、日下部君が「あゝ、うぜえ」と言いながら、自力でみくの手を掴んで引きはがした。

「あいつが逢月の事諦めるわけねえだろ!!お前だって知ってるだろっうが」

「知ってるっうの。だから信じられないのよ。アタシが桜音に抱きついたりしただけで、

あんな視線向けてくるような独占欲の塊みたいな男が、他の女と楽しそうにしてるなんて。何か弱みでも握られてんじゃないの!？」

「かもな」

……え。

私とみくは、その言葉に思わずお互い目を合わせてしまった。

「何、マジなの?」

「んなこと本人に聞かねえとわかんねえよ。ただ、この女と海がそ

ういう関係じゃねえって事だけはわかる」

「あんだ、この女が誰なのか知ってるの？」

「ああ。この女は、白石彩しらいし。お前ら、白石病院って聞いた事あるだろ？」

「うん。たしか、『日下部病院』と並ぶぐらい大きい病院だよな」
白石病院も日下部病院もこのあたりでは、有名な大病院。
だから知らない人なんていないはず。

「こいつは、その一人娘だ。顔は良いが、性格がものすごく最悪。まあ、甘やかされて育ったのか、すっげーわがままなんだよ。けど最近なんか好きな奴が出来たとかで、少しずつまともになって来るけどな」

「まさか、それが在原海の事!？」
みくの声がうるさかったのか、日下部君は一瞬眉を顰める。

「……違えよ。なんか、どっかの美大生。一回見た事あんだけど、すっげー冴えねえ奴だったような気がする。つつか俺なんか呼び出すより、海本人に聞けよ」

「それが、電話もメールも送ってるのに返事返って来ないのよ」

「なんだよ、アイツ気づいてねえのか。とにかく、あいつに聞かねえとわかんねえんだよ」

海が家に帰って来たら、ちゃんと聞いてみようかな。

もしかして、日下部君の言う通りかもしれないし。

でも、もし彼女とかだったら

そんな事が一瞬頭をかすめ、思わずスカートの裾を握った。

「つつか、腹減んねえ?ピザでも頼もうぜ」

「あ」

そうだった。

すっかりこの騒ぎで忘れちゃってたけど、私たちまだ夕飯食べてな

かつたんだっけ。
時計を見詰めると、七時半だった。
食欲ないけど、みくと日下部君はきつとお腹すいてるよね。

「ごめんね。今、ピザ屋さんに電話を……」
慌てて立ち上がろうとしたら、急に視界が闇に包まれてしまった。
うそっ。停電!?

「最悪。停電じゃん。桜音、懐中電灯かろうソクある?」
「う、うん。ちよつと待ってて」
まだあまり時間が経ってないから目が慣れてないため、あまり見えない。
たしかテレビ台の近くに懐中電灯が……

「テーブルとか気をつけなよ」
「うん。大丈夫……」
私の返事は鈍いガンっという音のせいで途中で途切れてしまった。

「っ
っ」
もう声にならない。
「おい、大丈夫か?」
日下部君の声が耳元で聞こえてくるが、大丈夫じゃない。
正直、痛すぎる。
スネと小指をテーブルにぶつけたあげく、バランスを崩して倒れてしまったのだ。
だが幸いなことに、倒れたのが日下部君が座っていたソファだったため、私は何とか抱きとめられた。
日下部君を巻き込む形にはなっただけ。

第二十話 ファーストキス騒動 はじまり

もうちょっと早く電気点いてよ……

さっきまでは暗闇の世界だったのに、いまではすっかり光が戻って来て、テーブルや観葉植物のある場所まではつきりとわかる。

ちょうどタイミング良く、私がバランスを崩し日下部君に倒れ込んだ所で停電が復旧し明かりが点いたのだ。

でも良かった。

日下部君が抱きとめてくれて。

じゃないと、テーブルとかに頭ぶつけてたかもしれないもん。

ただ、日下部君を押しつぶしてるみたいなき感じでちょっと申し訳ないけど。

「桜音、大丈夫!？」

「うん、平気」

もぞもぞと動き、顔を日下部君の鎖骨あたりからみくへと移そうとしている最中、ちよつと気になるのを見つけてしまった。

それは右鎖骨にある、ほくろ。

斜めに三つあって、普段は気付かないぐらいの大きさだけど、このぐらい至近距離だと見える小さいもの。

あれ……?これ、どっかで見た事あるような……

「おい、逢月。怪我とかねえなら、さっさと退け」

「え。あ、うん。ごめんなさい」

きつと気のせいだよな。

そう思い深く考えず上半身を動かし日下部君から離れる。

そしてピザ屋さんにデリバリーを頼むために、電話のある部屋の隅

へと移動した。

「漫画とかだと、こういう時って弾みでキスしちゃってたっつう事あるじゃん。ほら、事故チユーみたいな」

「縁起でもねえ事言っつんじゃねえ。そうなったら、俺の身が危ねえだろー!!」

何で身が危ないんだろう？

私は首を傾げながら、聞こえてくる日下部君とみくの会話に首を傾げた。

「は？何マジで返してんの？んなこと、実際にあるわけないじゃん」

「それが実際あんだよ。中学の時、坂上公園の階段で。歩いてたらヤンキー達に絡まれてる奴がいてよ、そいつが足滑らせて落ちてきたのに巻き込まれちまったんだよ」

……え。

「へー。そんな事、本当にあるんだ。まさか、あんたそれがファーストキスとか？」

「んなわけねえだろ。でも相手がそうだったらしくよ、泣かれちまった」

ちよつと待って。それって、何か……

その話に心当たりがあった私は、思わずピザ屋さんの広告を探す手を止めた。

*

*

*

私のファーストキスは、いわゆる事故チューってやつ。

中学二年の秋、お母さんに頼まれて学区外の北区にある、お兄ちゃんの家に行く途中だった。

その時暗くなってきたからって、近道がてらに坂上公園を通ったのが運が悪かったんだと思う。

私はたまたまそこにいた不良の人達に目を付けられ、追いかけてまわされてしまったのだ。

そしてさらに運が悪い事に、逃げる途中で階段から足を滑らし落下してしまった。

そっからは、漫画とかで良くあるパターン。

転げ落ちる時に、人を巻き込んでしまい一緒に転げ落ちてしまったのだ。

顔はあまり覚えてないんだけど、その人が金髪に学ラン姿の男の子と言う事だけは覚えている。

その男の子も私も幸いな事に大きい怪我とかはしなかったんだけど、二人倒れ込んだ弾みでその時に事故チューしてしまったのだ。

ただでさえ巻き込んでしまって悪い事をしたのに、私ってばその時ファーストキスだったから、号泣してさらに迷惑かけまくっちゃったんだよね……

あゝ、なんかだんだん思い出してきた。

その後その子が不良を追い払ってくれて、日下部病院に連れて行ってくれたんだっけ。

なんか頭とか打ってるかもしれないから、一応念のためだって言うて。

そう言えば、今思うとすっごく面倒見が良かった人だったような気が

がする。

お兄ちゃん達に電話して呼んでくれたし、迎えくるまで傍に居てくれたし。

あれ？その子名前なんだっけ……

何とか思い出そうとするけど、私の記憶じゃ無理みたい。

ただふと思いついたのは、検査を担当してくれた女医さんの事を「姉貴」って呼んでた事。

検査中とかその女医さんと話した時、ここの病院の娘さんって言うてたから、日下部病院のご令嬢って事は確かだよな。

あれ？って事は、その男の子も日下部病院の関係者って事じゃん。

……ん？日下部病院？

辿り着いてしまった答えに気をとられ、手から広告がするりと抜け床に散らばるように落ちる。

もしかして

「ねえ日下部くん！！私のファーストキスって、もしかして日下部君なの！？」

そう叫んで日下部君とみくの方を振り向いた瞬間、言った事を後悔した。

だって私の視界にはソファに座って口をぽかんと開けている日下部君とみく、それからドアに手をかけたまま目を大きく見開いている海が映し出されたから。

第二十話 ファーストキス騒動 終結？

「桜音のファーストキスがお前だと……！？」

呟く様に言った海の言葉を聞いて、私は思わず頭を抱えなくなった。

や、やばい。完全に聞かれちゃったよ。

でもあれは事故ちゅーだったし。

消毒とか言わないよね……？

前回の「罰と消毒」の件を思いだし、思わず頬に熱が集まってしまった。

だがそれと同時に、外国の女の人がプリントされたＴシャツに、ブラックデニムという格好の海を見て、やっぱり送られてきたのは海なんだって思ってしまった。胸が痛んだ。

「どういうことだ」

低く唸るような海の声に、日下部君の大きな体がびくつく。

「ちよ、待て！！俺は、何も知らねえっつうの！！」

「なら桜音が嘘ついたっていつのか」

「は？んなこと知らねえし！！っつか、俺マジ身に覚えねえんだよ。なんでこんな緊迫した状況になるの！？」

胸倉を掴まれ青ざめた日下部君に、眉がつりあがり鋭い眼で睨んでいる海。

とにかく、止めなくっちゃ！！

「え」

止めるために海達の上に駆け寄り海の腕に触れるが、私はそのまま動けなくなってしまう。

それはふわりと漂ってきた甘ったるい香りが原因だった。

もしかして、あの女の子の香水？
頭に浮かぶのは、あの写メの映像。

「嫌いつ！！」

気が付いたら、海から離れてみくの背後に隠れちゃっていた。
ギョツとみくの服を握りしめながら、唇を噛みしめる。

「どうしたのよ？」

「あの匂いやだっ」

「は？匂い？」

あの香水の香りが嫌なんじゃない。

あの女の子の香りが海についたのが嫌。

……うう。もしかして嫉妬深いのかな？私。

「あゝ、だそうだ在原海。桜音が嫌なのは、その甘ったるい香りなんだってさ。だから嫌われたとかじゃないから、そんな死にそんな顔する事ないんじゃない？」

は？死にそんな顔？

ちらつと海の様子を伺おうとしたけど、海がものすごい勢いでドアの方へと走り去って行ってしまったのでそれを見る事は出来なかった。

*

「さっきは心臓が止まるかと思った……」

それはこっちの方なんですけど……っ！！

私は海に背後から抱きしめられるような格好で、海の上の膝の上に座らせられている。

っっていうか、みく達いるのにつ……！！

「何を大げさな事をつて、あんたの場合は言えないわね。桜音バカだから」

……なんでみくも日下部君も普通にしてんの？

二人とも私と海が座るソファの反対側に座っているけど、何事もないようにしている。

「もう香水の香りしないだろ」

「……うん」

それはしない。

海はあの後シャワーを浴びに行ったらしい。

ちゃんと拭かないで戻ってきたから髪とか濡れたままだしTシャツには張り付いているしで、最初「雨に振られたの？」って感じの格好だった。

今はちゃんと髪も乾かして濡れていない新しい服に着替えて貰っている。

「なあ桜音。桜音のファーストキスの相手が日下部なんかって本当なのか？」

「おい。なんかってなんだよ。っつか、そもそも身に覚えがねえっって言ってるだろうが」

「うん。その事んだけど、実はね……」

私は中学の時自分の身に起こった事を全部話した。
不良に絡まれた事や階段から落下した事を話している時など、時々
私に回されている海の腕に少し力がこもる時があったけど。

「それで、お前は身に覚えがあるのか？……って聞くまでもなさそ
うだな」

海はため息を吐くと日下部君を見た。

日下部君ってポーカーフェイスとか苦手みたい。
もう、完全に目が泳いでいる。

「だから事故なんだよ！！事故」

「それはわかった」

「は？マジで？んじゃあ、お咎めなし？」

「咎め？なんでそんな事する必要があるんだ。お前が、いなければ
桜音が大怪我していたかもしれない。むしろ礼を言うよ」

海は日下部君にそう言うと、「無事でよかった」と言いながら私の
頭を撫でた。

よかった。これで全て丸く収まったみたい。

なんて安堵してたけど、数時間後みく達が帰った後このリビン
グに私の叫びが木霊する事態になるなんて知る由もなかった。

第二十一話 甘い囁き

静まりかえったりリビングの中、テレビのバラエティー番組だけが流れている。

それは11時からあるやつで、私が毎週楽しみにしているやつだ。通常ならソファに座り見ているはずなんだが、見ることができない。なぜなら

「だめっ!!！」

「なんで?」

「だめなものはだめなのっ!!！」

そう言っただけで逃げようと思っても、後方を壁、前方を海、そしておまけに左右を海の両手によって行く手が阻まれてしまっただけで逃げられない。

も。こうなる事がわかってたなら、日下部くんとみくに泊って貰ったのにつ!!！」

「だってあれは事故チューだもん」

「ああ。それはわかってる。でも、触れたんだろ?」

いや、触れた事は触れたけど。

って、唇指でなぞらないで!!！」

私は海との攻防戦を繰り広げているため、テレビを見る事が出来ない。

あれはキスじゃないから消毒なんて必要ないのに、海が「消毒する」って言っただけで聞かないのだ。

「俺じゃ駄目か?」

その問いに私は首を振る。
駄目じゃない。

だって私は海の事が好き。海とならキスしたいって思う。
でも最初が事故チューで、次が消毒なんて嫌だもん。
だから今度はちゃんとキスしたい。

「あのね、海がダメとかじゃなくてちゃんとしたいの」
「ちゃんと？」

「うん。最初が事故チューで次は消毒なんて嫌なの。だからね、ちゃんと海と普通にキスしたいの……って、海聞ってる？」
海の様子がおかしい事に首を傾げ海を見つめる。

すると海は口元に手を当てて顔を真っ赤にさせていた。

海の視線の先には、私がいるけどたぶん私の事を見てないと思う。
なぜなら、海の目の前で手を振っても何の反応もしないから。

どうしようか考えてると、ふいに携帯が鳴った。

この着うたは海の……

それは、海が好きな海外のアーティストの曲だった。

「ねえ、海。携帯鳴ってるよ」

服を引っ張りながら言うけど、何の反応もしてくれない。

もぐもぐ。緊急だったらどうするのよ。

私は海の元を離れ、テーブルの上にある海の携帯を取る。

するとディスプレイには、『白石彩』と映し出されていた。

これって、海と公園で腕組んでいた子だ……

そういえば私、まだ海とこの女の人の関係聞いてない。

ファーストキス騒動のせいで、私はまだ海とこの女の人との関係について聞いてなかった。

手の中の携帯はまだ止まず、今も私の手の中で鳴り響いている。

電話に勝手に出る訳に行かないのはわかっているけど、気になってしまっ。

「桜音！！それは俺とキスしていいって言う意味なのか！？」
え？

ぼーっと携帯のイルミネーションを見てみると、海の叫ぶような声が聞こえてきたので振りかえる。
すると海が左右を見回して私を探していた。

「あれ……？桜音がいない……」
後方にいるから、死角に入っていて見えてないらしい。

「こっちにいるよ。あのね、白石彩さんから電話」
私は海の傍に行き、携帯を差し出す。

すると海はその名前を聞くと、眉を顰めた。
海は私から携帯を受け取ると、携帯を切ったのか曲が止む。
そして携帯をソファに放り投げた。

「でないの？」
「今はそんな事より、さっきの事だ。桜音。あれは、俺とならキスしてもいいって事なのか！？」
その問いの返事は決まっている。
私はコクンと首を縦に動かした。

「海じゃなきゃいや……」
いまちよつと顔見られたくない。絶対ゆでダコ状態のはずだ。
私はそれを隠すために海にギュツとしがみ付く。
すると、私の体に海の腕が回され抱きしめられる。
そして海は耳元で囁やいた。
それは甘さを持った言葉。

「桜音。好きだ」

第二十二話 桜音だけ

『好きだ』その海の言葉に一瞬何もかもわかんなくなった。時間も言葉を発する方法も。

ただ一つだけわかる事は、私と海の鼓動の音だけ。

それはどつちらの音かわからないぐらいに溶け合っていた。

「……………ほんと？」

やっと出たのは、すぐにでもかき消されそうな声だった。

声が震えているように聞こえるのは、まだ現実に戻り切れてないからなのか、それとも本当に震えているからなのか。

「ああ、本当だ」

その言葉を聞き、海から体を離し顔をゆっくり上げる。

すると海が穏やかに微笑んでいた。

これは現実だよね……………？

まるで夢を見ているように、ふわふわと安定していない。

だって私だよ？

聖にも前に言われたけど、私は特別可愛くもないし、これと言って何も無い。

それなのに好だって言ってくれているなんて

「こんな気持ち初めてなんだ」

頬に触れたぬくもり。それは海の大きな手。

いつも海に触れられると恥ずかしさで逃げたくなる。

でも今はそれよりも心地よさの方が上回ってしまった。

「……………釣り合わないよ」

「わかってる。だが、ちゃんと桜音にふさわしいようになるから」

「違うよ。海がじゃなくて、私がかもん。私は愛海さんみたいに可愛くないし、みくみたいにスタイル良くないから」

「なんでそこで愛海と佐々木が出てくるんだ？」

海は首を傾げた。

だって海はカツコイイし、頭も良いし。

私は何も持っていないのに

「桜音は桜音だろ。俺は、桜音以外は何とも思わない」

「じゃあ、白石さんは？腕組んで歩いてたもん……」

さつき電話も来てたみたいだし。

容姿的にも家的にも海と合うと思う。

「違う！あれは言う事聞かないと桜音にバラすって言うから仕方なく、今日だけって約束で言う事聞いたんだ！」

「私に何をバラすの？」

「うっ。それは、その……」

海は口ごもりながら視線を泳ぎ始めてしまう。

「とにかく、俺は桜音だけなんだ。信じてくれ」

まるで捨てられた子犬のような顔をしている海と目があった。

無言でそれを見ていると、眉を下げた海に「桜音……」という、すがりつくような弱々しい声で名前を呼ばれてしまった。

「……うん。信じる」

「ほんとか！？ありがとう」

「えっ、ちよっ」

力いっぱいギョツと抱きしまられてしまった。

なんか、子供みたいで可愛い。

私は、海の背中に手を回した。

第二十三話 みく的サプライズ

「んで？王子に告られて、それから？」

「え？終わりだけど？」

みくの言葉に首を傾げ、スプーンでジェラードをすくって食べた。うんっ！お米のジェラード初めて食べたけど、これおいしい。

ゴマもおいしそうだったけど、こっちにして正解だったかも。

おいしさに思わず頬を緩ますと、隣りから何やら不穏な空気が漂ってきた。

「『え？終わりだけど？』じゃないだろうが！！しかもなに暢気にジェラードなんか食べてんのよ！！」

急にそう怒鳴りながらみくはベンチから立ち上がる。

えっ、なんで怒ってるの〜？

私を見下ろしているみくの気迫に、思わずジェラードを持つ手が弱くなってしまふ。

「だっ、だっって昨日の事はそれで本当に終わりなんだもん。それに、ジェラード食べたいって最初に言ったのみくだよ」

噴水の前を通る人たちが、不審そうにベンチに座る私達を見ている。

「アタシが言いたいのは、んな事じゃない。なんで在原海に告られたのに、そこで終わるのよ！？桜音も好きだって言えば良かったじゃないか！！」

「だって言うの恥ずかしいし、海じゃないとキスやだって言ったんだよ？だから、わかってくれるんじゃないかって思ったんだもん……。それにその後、二人でテレビ見始めちゃったし……」

「はあ！？テレビだと？」

え〜と、みくさん？目が座ってるんですけど？

あまりの気迫に目をそらす。
こ、怖い。

「テレビどころじゃないでしょうが！あなた達、二人して何やってんのよ！？せつかくの良い雰囲気なのに！！」

「じっ、ごめんなさい」

「あ〜っ！ほんとこいつらは……」

みくはカバンをこそごととあさり、何かを取り出した。
それはみくの携帯電話だった。

ストラップはシルバーの蝶のモチーフのものがつけられ、本体はライnstoneで綺麗にデコレーションされている。

「電話？」

みくはそれには何も言わない。

「あ。もしもし、アタシ。 は？別に何も無いわよ。桜音なら隣りでジェラード食べてる。……あんた前から思ってたんだけど、その桜音とアタシの態度の違いってどうなのよ？ムカつくわね。……

明後日、在原誕生日でしょ？ あ〜、よかつたわね。桜音に祝ってもらえて。……デレデレすんなキモイ」

本当にみくは海の事が嫌いじゃないの？

みくの話しか聞こえないため内容はよくわからないけどそう思った。

「 あ〜、も〜うるさい。電話口で大声だすな。 ……いいの

かな？切っても。まあ、アタシは別に切ってもいいんだけど？……

そうね、さっさと要件だけ言っわ。桜音があんたの誕生日にキスをプレゼントしようと思ってるんだけど、迷惑かな？って悩んでるの

よ………
「 ん〜！〜！」

慌てて否定しようとしたら、先を読まれみくの手によって口を塞がれてしまった。

ちょっと待って。本人が外野っておかしいでしょ！？
っていうか、そんなこと言ってないし！！

「マジで。……それで、あんたはもちろん迷惑じゃないわよね？

……ちょっと、雄叫びあげんのやめてくれない？うっさいんだけど。……は？桜音に代われ？今いないわ。アイスが手について洗いにいったから」

ここにいてるってば　！！
いくら叫ぼうと、全部ちゃんとした言葉にならない。

「じゃあ、切るわよ。……はいはい。わかってる。ちゃんと桜音の事見てるし、何かあったら連絡入れる。はい、はい。じゃあね」
みくは携帯を切ったのを確認すると、私の口から手を離す。

「良かったね。王子、狂喜乱舞」

「良くないっ！！しないから！！絶対にしないからね！！」
というか、なんでそうなるのよ……

カバンから携帯を出しますぐ否定しようとしたんだけど、ディスプレイを見て首を傾げた。

あれ？真っ暗。

「桜音、あんた携帯の充電切れてるの忘れてた？」

「あ」

「残念。かけられないわね」

たしかに、私の携帯からはかけられない。
でも

「みくの携帯貸してよー！！」

「え。無理」

「なんで！？意地悪っ！！」

「意地悪って酷いわね。とっととくっつけてあげようとしてんのに。いいの？桜音。あんた達両思いかもしれないけど、付き合っていないのよ？」

「え……」

「そうでしょ？あんた彼女でもなんでもないんだからたしかにそうだ。」

私達は付き合ってるわけじゃない。

「彼女になりたくないの？」

「……なりたい」

「だったら、ちゃんと気持ち伝えなきゃ。そしてちゃんと、カレカノになりなよ」

「うん、わかった。海にちゃんと気持ち伝えてみる。でもさ、それとキスするのって何か関係あるの？」

「は？別にないわよ。ただ、おもしろそうだからいつかなって」
「みくっ……！」

公園に木霊するのは、私の怒鳴り声。

それを聞いてみくはただ笑っていた。

もくっ。家に帰ったら、ちゃんと海に誤解かなきや。

海だって今頃絶対おかしく思ってるはずだもん。

だって、私がそういう事言うわけないもんね。

みくが勝手に言ったことだって普通考えればわかるはずだし。

そんな私の考えが安易なものだと、数時間後に思い知る事になる。

第二十四話 ちよつと落ち着いて

ん。今日の夕食どうしよう？

たしか、冷蔵庫に海老とイカが少し残ってたよね。

他の材料もあるし、シーフードカレーにでもしようかな。

頭で今日の夕飯を考えながら、材料を取り出すために冷蔵庫を開けた時だった。

玄関の方でなにやら物音がしたのは。

それは音を変え、こつちに段々近づいてきた。

何か急ぎなのかな？

廊下を走る音に、私は首を傾げた。

玄関にはちゃんと鍵をかけておいたから、他人には開けられない。なのでおそらくこちらに向かっているのは海だと思う。

一端開けた冷蔵庫を閉め、廊下へと通じるドアへと向かった。

緊急の用事とかだと悪いし。

ドアに手をかけようと腕を伸ばしたら「桜音っ！！」という声と共に、海によりドアが開けられてしまった。

入室してきた海は、バスケット指定のTシャツとジャージ姿。

そして肩にはスポーツバックを背負っている。

今日練習試合って言ってたから、買ったのかな？

その表情は何か良い事でもあったのか、海は極上の笑みを浮かべていた。

なんか、連都が欲しいおもちゃが手に入った時みたいな顔してる。

「なんでこんなに可愛すぎるんだ！！」

「は？」

脈絡もなくいきなりガバツと海に抱きしめられ、急に視界が遮られてしまう。

なっ、何事!?

何度抱きしめられれば免疫がつくんだろう。

未だになれないので反射的にジタバタと悪あがきをする。

そんな行動を起こしても腕の拘束は解けず、ただ体力の無駄遣いにならなるとわかってはいるんだけど……

「桜音。俺、こんなに誕生日が楽しみなのは初めてだ」

「何か欲しいものでもプレゼントして貰えるの?」

「そうだとしたら、海のテンションが高いのも頷ける。」

「どうしよう。腕時計とかだったらダブっちゃうよ……」

私は、海の誕生日プレゼントに腕時計を用意してしまったのだ。

腕時計なら、学校に行く時も啓吾さんの会社に行く時も使えるって思ったから。

まさか、ここでそれって時計?なんて聞けるわけもないし。

「ああ、最高のプレゼントだ。桜音が俺にキスしてくれるなんて」

「え」

その言葉に表情筋達が動くのを辞めた。

ま、待つて。まさか……

「それってまさかみくから聞いた話?」

「そうだ。そんな事で悩むなんて可愛い。悩まなくてもいいんだぞ?俺はいつでも大歓迎なんだからな」

「ええっ!?なんでおかしいって思わないの!」?

普通なら私が言ったんじゃないって気づくはずなのに、海はまったく気づいてない。

「あのね、海。その事なんだけど……」

「今年の誕生日は絶対に忘れられない。なんていったって桜音が祝ってくれる上に、最高のプレゼントまでくれるんだもん。夢みた

いだ

「どうぞしよづ。なんか言いたくないよ。」

「こんなに言はねると、言っつのを躊躇ってしまっつ。」

「みく、責任とってよね!!」

第二十五話 五分前行動ならぬ、一時間前行動（前書き）

長いのでわけようとしたけど、分けれなかった…
今回ちょっと長めです。

第二十五話 五分前行動ならぬ、一時間前行動

「ねえ、本当にここでやるの？」

私は案内された部屋を見て、思わず一緒に来た日下部君を見た。

今日は海の誕生日パーティー当日。

サプライズで海を驚かせるのに、一足先に私が驚かされてしまっている。

だって、まさかパーティー会場がホテルのパーティールームだなんて

私が今いる部屋は、30人は余裕で入れるぐらいの広さ。

室内には、五人は座れる大きなソファが上座に置かれ、左右には花が生けられてある。その他に、端には数十個のイスや所々にクロスのかけられた丸いテーブルが数個設置されている。

日下部君の話ではこの後ここに、食事や飲み物が台車で運ばれてくるそうだ。

「他にどっか良いところあったのかよ？なら早めに言えって」

「違つくて。ここホテルだよ！！しかも、タホナロイヤルホテル！」

ここは俗に言う高級志向の人達が泊るホテルとして有名なタホナロイヤルホテル。

全国や海外にも展開している大きなホテルでランクもかなり高く、一部のホテル施設を除き、ほとんど会員制を用いている。

そのためまわりに何気なく飾られている、シャンデリアや絵画など調度品なんかもきつと値段がそうとうするはずだ。

「あゝ。金の心配はすんな。パトロンがいるから」

「パ、パトロンっ!？」

「……お前、今変な風にとらえただろ」
えくと。実は、はい。

だって私の持つてるイメージそうなんだもん。

「 海の親父さんが払ってくれるんだよ」

「 えっ。啓吾さんが?」

「 ああ。それより、お前着替えて来いよ」

「 え。やっぱり正装じゃなきゃ駄目なの?」

そうだよね。こんなちゃんとした会場のパーティーだもん。

あ。でも私、海に正装してきてって言うてない。

それに私自体も着替え持つてきてないよ。

「 いや、別に普段着で構わねえ。だが、お前だけは別だ」

「 なんで私だけ着替えなきゃならないの?」

「 お前も主役みたいなもんだろ。おい、凧。こいつのき ……っ
て、お前、まだ落ち込んでんのかよ?」

日下部君の視線の先には部屋の隅でしゃがみ込んでいる凧さんがいる。
る。

どうしたんだろう?

「 凧さんどうしたの?」

私もしゃがみ込んで凧さんと向かい合う。

「 姫の……逢月さんの衣装に最初着物を用意してたんです。桜の姫
ですものやっぱり着物でしょう。それなのに、私のせいだ……」

「 何かあったの?」

首を傾げて凧さんを見る。

すると、私と凧さんを影が覆った。

どうやら日下部君がこっちに来たようだ。

「こいつが張りきりすぎた上に妥協しなかったから、着物がキ口単位にまで及んだんだよ。さすがにお前には重すぎると思って却下したんだ。長時間だしな。そんなに落ち込むなら、別に重ね着なんてしなくてもよかつたんじゃないのかよ」

「駄目ですわ！！桜の姫とい」

日下部君のあきれた声に、凜さんが急に立ち上がり声を荒だてた時だった。

ノックと共に、扉が開けられたのは。

あれは……

「啓吾さんっ！！」

そこには、啓吾さん 海のお父さんが優しく微笑んでこちらを見ている。

私はその人の姿を見ると、駆け寄った。

「今日は海のためにわざわざありがとう、桜音ちゃん。それに、日下部くんに凜ちゃん」

「まあ。小父さま。わざわざご足労頂いて申し訳ありません」

「仕事でこつちまで来たから、立ち寄ってみたんだ。本来ならゆっくりとお礼を言いたいんだけど、ごめんね緊急事態なんだ」

「どうかされたのですか？」

急に日下部君と凜さんの顔が引き締まる。

「……海がもう来てるんだ」

この啓吾さんの言葉に、私達三人は動揺した。だつて

「まだ待ち合わせ時間の一時間前ですよ？」

日下部君は携帯を出して、ディスプレイを見つめている。

「おい、逢月。お前ちゃんと11時って言ったんだろっな？」

「言ったよ！！11時にロビーって」

昨日、ちゃんと海に言ったもん。

海もちゃんと「わかった。楽しみにしてる」って言ったし。

「桜音ちゃんの言い間違えとかじゃないんだ。どうやら桜音ちゃんに祝ってもらうのが、かなり嬉しいらしく待ち切れなかったみたい」
そう啓吾さんは苦笑いで答えた。

「そっだとしても早すぎだろ……一時間も前に待って何してんだよ……」

「困りましたわね。ロビーから早々に移動して頂かないと。他の方達がいらっしゃっては、バれてしまいますわ」

たしかに。知り合いと1・2人と会っても偶然で片付けられるけど、何かおかしい事に何人もだったら気づくよね。

「ごめんね。海を連れ出したいんだけど、僕も仕事があつてちよつと無理そうなんだ。何気なく何処かで時間まで潰すようにって言ったんだけど、もしかしたら桜音ちゃんがもしかしたら来るかもしれないって」

「来るわけねえだろ。一時間前だぞ？あいつはまったく……」

日下部君が頭を抱え込んでしまう。

「あのね、もう私下行こうか？それで、海と2階のテラスでお茶して時間まで待つてるよ」

「そうですね。それが一番得策かもしれませんが、さすが、姫がこんな時間にいたら不審がりませんか？」

そう言われてみれば、そうかも。

「別にいいんじゃないか。待ち切れなかったみたいなら、今
のあいつなら、なんでも誤魔化せる気がする。一応何かバレそうになつたら、逢月。お前が色仕掛けでもなんでもして誤魔化せ」

「ええっ！？仕掛ける色なんてないよ！！」

「俺にはまったくわからないが、海には通じるから問題ない。とにかく、行け」

「う、うん」

プレゼントとかどうしよう。

でも後でここ来るよね。バックだけ持っていこうかな。

私はバックを掴むと、扉を開けて海の元へと向かった。

第二十六話 変わったのは君のおかげ

その人はすぐに見付けることが出来た。

ロビーには書類を眺めているスーツ姿の人や、パーティー前なのかドレスを着た人達など結構人が多く座っていた。

その中から海をすぐに見つけられたのは、彼の容姿が良かったからって訳だけじゃない。

どうしたんだろう……？

私はその光景に首を傾げる。

だって海は何度も携帯のディスプレイを確認したり、ロビーから見える正面入り口の自動ドアが開くのに一々反応しているんだもん。

そんな不審な行動しているから、すぐに見付けることができたのだ。

「海、なんか落ち着かないみたいですね」

そんな海の様子を少し離れた所から見つめ、隣りに居る人に話しかける。

すると私の隣りに立っている人 啓吾さんの様子もおかしい事に気付いた。

なにやら笑いを噛み殺すのに必死になっているらしく、右手で口を手を当ててる。

それでも殺し切れなかった笑いが漏れはじめていた。

「啓吾さん……？」

「ああ、ごめんね。あれが海なのかと思うと、ついおもしろくて「えっ！？おもしろいですか？」

「うん、おもしろいよ。だって、あの海があんな風になっているんだよ？親の僕でも信じられない。本当に桜音ちゃん効果だね。あゝ、DVDカメラとか持ってないのが悔やまれるよ」

そんなにおもしろいのかな？
私にとっては、ただそわそわしているようにしか見えないんだけど。
私と啓吾さんは、海の元へと向かった。

* * *

やっぱり驚いちゃうよね。

白いTシャツにロゴワツペンのついた黒の半袖シャツを羽織り、グ
レーのチェックのパンツ姿の男の人は、後ろを振り返ったままの姿
勢で固まっていた。
目を大きく見開き数回瞬きをしている。

「桜音……？」

海は私の名前をつぶやくと、携帯のディスプレイに目を向けた。
たぶん早く来すぎた私を見て、時間を確認しているのかもしれない。

「どうしたんだ？時間までまだかなりあるよな？」

「君と同じで待ち切れなかったんだって。だから早めに来ちゃった
んだよね？桜音ちゃん」

「え、あ、はい」

本当はパーティー準備で早めに来てただけだね。

海は私が啓吾さんの言葉に返事をする、満面の笑みを浮かべ「桜
音っ！！」と呼びながら急に立ち上がり、両手を広げて私の方にそ
の腕を伸ばした。

えっ!?

一瞬抱きしめられるって思ったんだけど、すかさず啓吾さんが私の肩を抱き体を横にずらしてくれたので抱きつかれずにすんだ。

た、助かった……

さすがにこの人がいっぱいいるロビーではかなり恥ずかしいもん。ほっとする私とは違い、海は不服そうだ。

啓吾さんを睨んでいる。

「何すんだよ。親父」

「ここはロビーだよ。少しは我慢なさい。桜音ちゃんに迷惑がかかるだろ?」

海は啓吾さんの言葉にしぶしぶ手を降ろすと、今度は私の手を握った。

「……これぐらいならいいだろ」

えっ!?!これってカップル繋ぎ!?

海とは手を繋ぐけど、こんな風に繋いだ事はなかった。

些細な変化なんだけど、気にしちゃう。

「うん。微笑ましいと思うよ」

啓吾さんはクスクスと笑っている。

「しかし、海は本当に変わったね。もちろん、良い方向にだよ?」

「ああ。それは自覚ある」

「だろうね。これも桜音ちゃんのおかげだ」

「え?」

「桜音ちゃん、ありがとう。君のおかげだ。前はまさか、こういう海が見れるなんて思いもしてなかったからね」

海、変わったのかな?

一緒に住む前って、私あんま接点なかったからよくわかんないよ。首を傾げる私を、啓吾さんは柔らかな目で見つめていた。

第二十七話 パーティー開始

「ここか？」

「うんっ！！」

私は手を繋いでいる相手に対して、頷く。

すると海は眉を顰めながら私から大きめの白い扉に視線を移すと、首を傾げた。

私達が立っている大理石に赤いカーペットが敷かれている廊下には、他にも数か所の扉が視界に入ってくる。

ついさっきまでテラスでお茶をしていた私達は、ここ5階のパーティー会場前まで来ていた。

予定時間より10分ぐらい早いけど、日下部君からのメールで「準備早めにしたから来い」との連絡がきちやったので問題はないみたい。

「桜音。この階は、パーティー会場ばかりなんだ。だから、ここもそうだぞ？」

「うん、知ってるよ」

「一体何があるんだ？」

「内緒。ねっ、早く開けて。開けて！！」

私は繋いでいた手を離すと、海の背中を押し早く開けるように促す。早く海の驚く顔が見たいって思うと同時に、少し緊張し始めていた。だって中にいるのは知らない人が多い。

その上、私はちょっと人見知りするタイプなのだ。

「……わかった。じゃあ、開けるぞ？」

「うん」

せかされるようにして海がゆっくりと扉を開けると、中には日下部

くんや凜さんの他に数十人の人達が立っているのが確認出来る。
ざっとみて、15人から20人ぐらいかも。
日下部と凜さん以外知らない人ばかりだ。

「海、誕生日おめでとう!!」

大勢のお祝いの言葉と一緒に、パンっという音と共に紙吹雪が飛んできた。

どうやらみんなクラッカーを手にしていたらしく、それを鳴らしたらしい。

海の反応はというと、想像通り。

視界に入ってきた景色に対し、海は目を真ん丸くし茫然と立っている。

大成功っ!!

そう思ったのは私だけじゃなく、室内にいた人達も同じだったみたい。

お腹を抱えて笑っている人や、お互いの両手を叩きあっている人などがいた。

「なんで、お前らがここに……?」

「喜べ。今日はお前の誕生日だろ?だから、俺達が祝ってやろうとわざわざ集まってやったんだ」

「もしかして、桜音も知ってたのか!？」

海はまだ取っ手に手をかけたままの体勢で、首を私の方に向ける。

「うん。ごめんね」

だって言ったらサプライズじゃなくなっちゃうもん。

予想通り、驚いてくれて私的には嬉しい。

「さあ、海さんも逢月さんもお入りになって下さい。みなさん、

主役もいらつしゃつたので、さつそくパーティーを始めましょう

この凜さんの開始の声に、室内にいたみんなの歓声が聞こえてくる。未だ上手く飲みこめないのか反応が鈍い海の手を引いて、私は室内へと海をエスコートした。

どんなパーティーになるんだろ？楽しみ〜。

すっかりパーティーに浮かれていた私は、まさかこの後想像もしていなかった状態に陥るなんて思いもしなかった。

第二十八話 サプライズプレゼント

海の誕生日パーティーも中盤となりかけた頃。

パーティー会場にある五人は座れるような大きいソファ。

そこを囲むようにして、今回集まった人達が全員集結していた。

みんなが注目しているのは、ソファに座っている海の手元。

それはシルバーの紙でラッピングされたノートぐらいのサイズの物体を、海が綺麗に包装をはずしているところだった。

ただ今、みんなで海にプレゼント渡しタイム中なのだ。

用意されたテーブルの上には、今まで開けられたプレゼントの品々が並べられている。それは香水や、デジタルフォトフレームなど様々な品物が並んでいる。

ちなみに海が開けているのは、日下部君が海に送ったプレゼント。

この渡す順番は何を基準にして決めたのかわからないけど、司会進行役の日下部君によって決められていた。

私の順番は日下部君の次でラストなんだって。

日下部君、何を送ったんだろう？

みんなと一緒に、私も海の手元を好奇心に満ちた目でみていた。

少しずつ覆われた物が取られていき、中に包まれていたものが現れ始める。

……え。

完全に中身の見えたプレゼントの品物に、私は思わず動きが止まった。

「あつ、写真集じゃん!!」
花柄のサロペット姿の女の子の声に、私はこれが現実なんだと改めて認識した。

赤いレトロ風なワンピースに黄色のベルト姿の女の子が、シャボン玉を膨らましている表紙。

これがただの写真集ならいい。
これは

「しかも、姫の写真集だ。可愛い」

「本当だ。すげえな、いつ撮ったんだ？日下部」

言わないでっ!!

そう。この表紙の女の子は、私。

日下部君に頼まれて被写体の練習になった時に撮られたものだ。

「返して!!」

海からとり上げようとしたんだけど、海の方がすばやかった。

私と反対の方に写真集を移動させたのだ。

その上、それを阻止しようとして身を乗り出した私の両手は海の左手によって拘束されてしまう。

「駄目。これは俺が貰ったんだから、俺のもの」

そんな事言われても、本人が知らない間に作られてたんだよ？

著作権侵害とかになると思う!!

「そんなもの燃やしてよ」

「何言ってるんだ。燃やすなんて勿体ないだろ。それにしても可愛いな。あの時これを撮っていたのか？」

海はソファに写真集を置き、右手でページをめくっていく。

その表情はどこか嬉しそうだ。

「ちよっ、見ちゃだめだつてば!!」

あゝっ、もう!!

こんなことになるのがわかってれば、被写体の練習になんて絶対に
ならなかったのにーっ!!

第二十九話 ファーストキスは突然に

「おい、逢月。次お前だぞ。時間限られてんだからな」
ちよつと、日下部君。私に何か言う事ないの!?

今度から先輩と遊ぶ時、絶対に声かけてあげないんだからねっ!!
私は日下部君を睨むと、しぶしぶ隣りに置いておいた紙袋を海に差し出した。

「お誕生日おめでとう、海」

「ありがとう」

紙袋の中身は、腕時計の入った小箱とそれから

「テディベア？」

海の手の中には真つ赤な本を抱えたテディベアがある。
これは、あの時みくに教えて貰ったメッセージベア。
私は自分の気持ちを、このメッセージベアに託した。
念のために、説明がついているタグは外している。

「これってメッセージベアじゃん。しかも赤だし!!」

「赤だと何かあるのか？」

海はその言葉に首を傾げながら、テディベアを見つめた。

「は？もしかして、海知らねえの？」

「知らない」

「え〜っ!?! 姫が赤のやつくれたのに!?!」

どうやらここにいるほとんどの人は、メッセージベアの事を知っているみたい。やっぱ、みくの言った通り有名なのかも。

「桜音。メッセージベアって何だ？」

「メッセージベアってそれぞれ色に意味があって、その人の気持ちを代わりに気持ちを届けてくれるの」

「気持ち……」

「うん」

「そっか。じゃあ、これには桜音の気持ちがあるんだな」

「え」

私は海の行動に思わず固まってしまった。

なぜなら、海がデイベアを抱きしめ始めたからだ。

ズイ。ボタンを押されると、しゃべっちゃう！！

「海っ！！だからそのデイベアとメッセージカードは、後で誰も居ない時に見て」

メッセージカードには誕生日おめでとうというお祝いの言葉と、この間の海の告白の返事が書かれている。

「ん？ああ、わかった」

海がデイベアをテーブルへと移動させたのを見て、安堵の息を吐く。

「じゃあ、こっちの箱開けて良いか？」

「うん」

海は腕時計の入った小箱のリボンをほどき始める。

よかった。まさか、こんな大勢の所で『好き好き大好き』『なんてしゃべり始められたら、ちょっと……いやかなり気まずいもん。』

「なあ、こいつデベソじゃねえ？」

「は？」

日下部君の声に顔を上げると、日下部君がメッセージベアを持っていた。

ちょっと、何してるの！？

それデベソとかじゃなくて、ボタンだし。

「押しちゃダメっ!!」

立ち上がり慌てて日下部君を止めようとしたんだけど、駄目だった。押しちゃダメというと、押したくなる人間がいる。

日下部君もそのタイプだったようだ。

「好き好き大好きっ!!」

時すでに遅し。静まりかえった室内に、機械的な声が響く。

「逢月さん、大丈夫ですか……?」

凜さんが気をつかってくれているけど、大丈夫なわけがない。

海には、一人で居る時に知らせたかったのにっ。

「ご、ごめんなさい」

なぜかわからないが、居たたまれなくなり謝ると、私は鞆を掴み脱兎の如く逃げ出していた。

* * *

早く来てよ!!エレベーター!!

祈るようにエレベーターの上部にある数字を見た。

数字は徐々に変わっていつている。

もう少し。

って、来た。

エレベーターが開くと私はすぐに乗り込んだ。

幸い中には誰もいない。

1のボタンを押し、閉のボタンを押し。

良かった。これで助かった。

閉まりかえる扉を見ながらそう思った瞬間、エレベーターが突然開いてしまう。

それは、誰かの手によるものだった。

「ええっ!？」

開かれた扉の前に居たのは、海だった。

近づいてくる海から逃げるにも、ここは箱の中。

海をすり抜けなければ、逃げ場はない。

慌てふためく私に海は何を言葉をかける事無く、ただ私の唇を塞いだ

第三十話 カレカノ

い、今キスしたのっ……!!?!

感覚の残る唇に、指を這わせる。

ファーストキスのシチュエーションについていろいろ勝手に想像したけど、こんなシチュエーションは全く想像していなかった。

相手が海なら場所なんてどこでもいい。

でも、いきなりすぎるよ〜!!

「桜音。これ本当なのか？」

「え？」

未だ真つ白な思考の中、急速に現実の世界へと戻されていく。海の手によつて目の前に差し出されたのは、小さめの本のようなもの。

そこには『海へ お誕生日おめでとう。私も海の事が大好きです』とかかれていた。

これって、あのメッセージベアのメッセージカードじゃん!!
他の人見てないよね!?

キスされたかと思ったら、自分の告白カード……

急激に動き出した物事に、何もかもがついていけない。

「桜音、ここに書かれているのは本当なのか？それとも誰かの悪戯か何かなのか？」

「はあ!？」

このメッセージ書くのに、すごく時間がかかった。

それはどう伝えていいかわからなかったし、こういう風なの書いた事ないから書くときすごく不安だった。

それなのに、まさかの悪戯扱って酷い。

「もう海なんか知らないっ!!」

デリカシーなさすぎだよ。

私は海の隣りをすり抜け、エレベーターから降りる。

冗談じゃない。人が勇氣出して書いたのに!!

こうなったら、みくに愚痴ってやるっ!!

そう思って携帯を取りだした瞬間、左腕を引っ張られ後方に倒れそうになってしまう。

「ごめん、桜音。本当にごめん。許してくれ」

耳元では、海のせつば詰まった声が聞こえて来る。

私が倒れ込んだのは、床ではなく海の腕の中だった。

どうやら、私は海に後ろから抱きしめられているらしい。

「酷いよ。悪戯とかって……」

「ごめん。信じられなかったんだ。まさか桜音が俺の事を好きだなんて」

「私が海の事好きなのかわかんないのに、キスしたの?」

「ああ。このカード見たら、何も考えられなくなっついで。ごめんな。出来ればエレベーターとかじゃなく、ちゃんとした場所だったら良かったんだけど……」

「海とだから良いよ」

そう答えると海の腕の力が弱くなり、拘束がとれはじめる。

自由になった体を、私はゆっくりと海の方に向かせた。

するとそこには、顔を真っ赤にしながらはにかんだ海がいた。

「俺の彼女」

いつもと違い、ちょっと浮かれているのか声が少し高い。

「えっ?彼女?」

私の言葉に対し、海のはにかんだ笑顔が凍りつく。

「彼女になってくれないのか!？」

「なりたいよ。でもさ、その……」

付き合っただけで下さいつて言われてないもん。

私の言葉が小さくなったのでわかったのか、海は「ああ」と何か理解したようだ。

ほら、やっぱり言葉にしてくれた方がはっきりするじゃない？

「逢月桜音さん」

「はっ、はい」

急にあらたまった言い方をされ、思わず姿勢を正す。

「大好きです。俺と付き合っただけで下さい」

「はい。お、お願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

なんだか良く分からないけど、お互い礼儀正しくお辞儀をしてしま

顔を上げると目と目があってしまい、私達はつい思わず笑いあってしまった。

第三十一話 無理でしょ

「なあ、桜音。体、柔らかい方か？」

「え？堅い方……」

自慢じゃないが、堅い。

前屈で手が床にまったくつかないぐらい堅い。

「みくは柔らかいよ。べたつくつくもん」

私はバスタオルとフェイスタオルを海へと渡すと、その隣にしゃがみこんだ。

海の周りにはTシャツや歯ブラシなどの他にジャージなど、さまざまなもの置かれていた。

これは明日から始まるバスケット部の夏の合宿の荷物。

4泊5日での泊まり込みになるため、結構大荷物だ。

スポーツバックもいつものと違い、合宿用に使っている大きめのを今回は使用するらしい。

「じゃあ、無理か」

海はその大きいスポーツバックを見つめながら、ため息を吐く。

それは無理すれば、大人一人は入れるぐらいの大きさ。

でも、かなり体柔らかくないと無理そう。

そういえば、こういうのに入る芸人さんいたっけ。

「何が無理なの？」

「桜音がここに入るのが」

え！？入るって、まさかこのスポーツバックの中っ！？

そんな事、考えるまでもないでしょうが……！

「もっつ。無理に決まってるでしょ」

「冗談だよ。こっそり連れて行きたいのは山々だけだな
そりゃあ、私だって一緒に居たいよ？」

両思いになったの、ついこの間の事だし。

夏休みだもん、一緒に出かけたりもしたい。
でも、部活はしようがない。

「四泊かあ」

「ちよっ、海っ!?!」

急に後ろから抱きしめられ、裏返った声が出てしまっつ。

た、体温が上昇していくっ!!

顔が赤くなっていくのは自分でもわかる。

元々免疫ない上に、まだ日が浅いためこっついうのに慣れていない。

「につ、荷造りしなきゃ」

「ん?後ですよ。今は、桜音」

つて、耳にキスしないで!!

なんか、お付き合いをしてから海のスキンシップが激しくなっつてい
く気がする。

「桜音、こっち向いて?」

海の拘束が解け、私はその言葉のまま海の方角に体を向けた。

すると、頬に手が添えられ海の顔が近づいてくる。

え、ええっ!?!?

目をギョツと閉じると、やっぱりキスされた。

触れるだけのキス。

いろいろ経験のある海とは違い、それだけでも私の限界は超えてし
まっている。

そのため、関係が進むのはかなりのスローテンポになるって事は明

確なこと。

それが不安だ。

だって、海に面倒とか思われそうで

「ほんと、可愛いな」

海は私の事をまた抱きしめると、ギュツとした。

可愛いって私が？思わず首を傾げた。

「四日も会えなくなるのか……」

「きつとすぐだよ。私も部活の合宿の時、あっという間に過ぎたもん」

「まさか、家庭部も合宿あるのか!？」

海は拘束を解くと、私の両肩に手を乗せ聞いてきた。

「え？無いよ。文化部だし。合宿は中学の時のやつ」

「……良かった。桜音も合宿だと、またすれ違いになってしまいかと思った」

「大丈夫だよ。中学の時、バスケ部で行った合宿の事だから」

私はまた荷造りの準備を始める。

早くおわして海とゆつくりしたい。

「桜音は、バスケ部だったのか」。以外だな、全く知らなかったよ。女子の試合応援に行ったりした時あったから、もしかして会ってるかもな。

何か録画したやつあるか？DVDとか。桜音のプレイしているの見たい」

「ん〜。そういうDVDは無いよ。私、マネージャーだったもん。

あ、でも会場では海と会ってるよ。だって、うちの学校と試合したから」

私は衣類を買ってきておいた圧縮出来るビニールを数枚取り出すと、

半分を海に差し出す。

これって便利なんだよね。

荷物の面積かなり減るから、結構旅行行くときとか愛用している。

って、海？

ビニールを海に差し出したんだけど、海は受け取ってくれない。

これにTシャツ入れて欲しいんだけど……

「ちょっと待て。まさか、男バスのマネージャーだったのか!？」

「あ、うん」

あれ？これって以外と知られてないの？

だから、男子バスケット部の人と仲良いんだけど。

涼が他校のメンバーと交流あったから、私も自然に面識があるようになっていった。そのためうちの学校の男子バスケット部の人達数人も、

先輩後輩関係なくその中学の時から面識ある人がいる。

「桜音がマネージャーか。良いな……」

海は何かを考えているのか、ぼーっとしている。

どうしたんだろう？

何か考え事でもしているのかもしれないし、少し放っておこうと。

第三十二話 お兄ちゃん

あゝ、やっぱり暑い。

デパートから出ると、外の日差しが容赦なく私達を照らした。

夏だから暑いのは当たり前なんだけど、今年は特に暑いように感じる。

室内ではクーラーが効いてたから、温度差のため余計そう余計感じるのかも。

「連都。ちゃんと帽子被ってる？」

「うん」

私は手を繋いでいる連都を見た。

連都の頭にはちゃんと麦わら帽子が被ってある。

ちゃんと熱中症対策はしておかないと。

水筒もちゃんと鞆の中に入れておいて水分補給もさせているけど、この暑さじゃちよつと心配だ。

「連都。具合悪くなったら、ちゃんと言えよ。熱射病とかなったら大変だからな」

連都を挟んで左隣りにいる彼も心配だったらしく、少し屈みこんで連都に話していた。

「うん。くー兄もね」

「おう」

くー兄こと、日下部君は連都の空いている方の手を握っている。

私達はさつきまでこのデパートであつた恐竜展を見ていた。

本来なら私が連れて来る予定だったんだけど、連都がどうしても「くー兄も一緒にいい」と言っただけで聞かなかったのだ。

日下部君と連都が知り合ったのは、ついこの間。

私が連都を公園で遊ばせてたら、偶然会った。

意外にも日下部君は子供好きらしく、連都とも日が暮れるまで遊んでくれた。

それはありがたかったと思う。

私も夏バテ中だったから、へろへろだったし。

でもその日から連都は何かにつけて「くー兄と遊ぶ」と言いだすようになったちゃって、連都が私と遊んでくれなくなってしまったのだ。プールに誘っても、「くー兄と行く」と言っし。

連都は私の甥っ子なのにつ！！

あまりの仲の良さに、ちよっと焼きもちを焼いてしまう。

「お前、海がない間は連都の家にいるんだって？」

「うん。一人で平気って言ったんだけどね」

海は今、男バスの合宿のまっただ中。

そのため合宿中は私一人で家にいなければならぬ。

心配性の海は、それを酷く嫌がった。

そのため私は海が合宿間、お兄ちゃんの家にお邪魔する事にしたのだ。

だって最初、女性専用ホテルを取るって言いだしたんだもん……

「海らしいな。あいつはお前のことを　　つと。連都どうした？」

急に手を引つ張られ、私も日下部君も連都を見た。

どうしたんだろう？

「とーちゃんがいるのっ！！」

「は？お兄ちゃん？」

連都が満面の笑みを浮かべ一点を見ている。

私もそこに視線を移すと、公衆電話の前に見知った男がいた。

姿をはつきりと確認出来るぐらい距離は近い。

「あ、本当だ」

仕事なのか、携帯で話をしながらスケジュール帳を見ていた。黒髪の短髪に、営業だから外回りが多いせいか日に焼けた肌。

お父さんと同じ目元に鼻。

彼は逢月那智私のお兄ちゃんだ。

「あれ、お前の兄ちゃんか？」

「うん」

三人の視線に気づいたのか、彼は視線をこちらへと向けるとほほ笑みを浮かべた。

だがすぐにその顔は厳しくなり、ある一点を睨んだ。

それにいち早く反応したのはその視線が集中している、日下部君。

「……なんで俺、睨まれてんだ？」

「さあ、なんでだろう？」

私と日下部君はお互い顔を合わせて首を傾げた。

まさかこの後私と海同居生活にピリオドを打つかもされない出来事が起こるなんて、

この時の私は知る由もなかった。

第三十三話 あっさりとしゃべる

なんでこんなに機嫌悪いのかなあ？

私は隣りに座っているお兄ちゃんを見つめた。

イラついているのか、左手の人さし指でテーブルをトントンと叩いている。

その視線は反対側に座り、連都を抱っこしている日下部君に向けられていた。

もしかして連都が日下部君と仲が良いから焼きもち？

連都は子供用のメニューの写真を指さしながら、「くー兄は何する？俺、ハンバーグ！！」とさっきからずっと日下部君にかまいつぱなした。

一方かまわれている日下部君は、視線で私に助けを求めている。それは連都のことじゃなく、お兄ちゃんのことだ。

私はそれに対し手を顔の前で合わせて、口パクでごめんと謝る。

「ねえお兄ちゃん、お仕事はいいの？」

「昼休憩」

「そっか」。もしかして、みんなでお昼食べたいからここに連れてきたの？」

「違うだろー！！」

そうツツコミをいれたのは、お兄ちゃんではなく日下部君。いや、うん。いくら私でもそれはないってわかってるよ。

でもだって、場所と時間的にそうなのかもしれないって可能性も捨てきれないんだもん。

私達がいるのは、カントリー調のカフェ。

表の道路に面した場所にあり、お兄ちゃんに「顔貸せ」と日下部君

を近くにあったここに連れて去られてしまったため、私達も強制的に來ている。

「お前、ずいぶん連都に懐かれていますな？」

あゝ。やっぱりお兄ちゃん、焼きもち妬いてたんだ。

うん、それはわかるよ。だって連都ってば、日下部君ばかり構うんだもん。

席だって一緒に座ろうって言ったのに、くー兄と座るって言うし。

「……はい。こいつ可愛いですね。俺、大抵子供に逃げられるんでそれは日下部君の顔が強面だからかもしれない。

本人は子供好きで迷子の子とか見るとすぐに駆け寄るんだけど、「怖い」って泣かれてる。

最初何も情報がない状態だと、人って外見で情報を得るもんね。

「当たり前だろうが。連都は俺の息子だからな。そして、桜音は俺の妹だ」

「それ、日下部君知ってるよ。さっきちょっと説明したもん。ねえ、それより何食べる？」

私はメニュー表を広げ、お兄ちゃんにも見やすいように私とお兄ちゃんの中間に置いた。

もしかしたら、お腹空いているから怒りやすくなっているのかもしれないと思っただの。

「私、Aランチのドリンクはアイスティーにする。みんなは？」

「桜音は少し黙ってなさい」

「え」

カフェに食事に来てるのになぜ！？

私はしぶしぶメニュー表を片付けた。

「どこの馬の骨かは知らないが、上手く連都を手なづけたな。その調子に桜音との距離も縮めようと企んでいるだろうが、俺の目が黒いうちはそうはさせない」

「……いや、俺は逢月の事別になんとも思っていないですって。それに、俺ちゃんと好きな相手いますし。ただ成り行きで連都共々面倒見ているだけで……」

「そんな事言つて、桜音のこと好きなんだろう!!」

「それは無いですって」

「本当か？」

「マジっすよ」

しつこいよ、お兄ちゃん。

お兄ちゃんは数秒日下部君を見たかと思うと、今度は私に視線を移す。

「桜音はこいつの事どう思ってるんだ？」

「え？友達だよ。何？もしかして、私が日下部君を好きだと思ってるの？あるわけないじゃん」

「そうか。じゃあ桜音がこいつの事好きとかこの男が狙っているとか、そんなんじゃないんだな。だよな、涼からなんの報告もなかったしな」

「うん」

涼からの報告がよくわからないが。

「そつか。兄ちゃん誤解してたみたいだ」

「も、なんでそんな勘違いしたの？大体私が付き合ってるのは、日下部君じゃなくて海だもん」

「そつか、この男じゃなくて海か。……　　って海って誰だ!?!」
いきなり立ち上がり叫びをあげたお兄ちゃんに、室内の視線が集まる。

あれ？私何かマズイ事言っただけ？

お兄ちゃんに見降ろされ、きよとんとする私に、「空気を読め!!」
という日下部君の言葉が覆いかぶさった。

第三十四話 二人の秘密が知られる時

「桜音。兄ちゃんに黙秘権は使用出来ないってさつきから言ってるだろ。いかげんに海という男が何処の馬の骨なのか言いなさい」

「いいからお兄ちゃん早く食べたなら？せっかくのランチ冷めちゃうよ」

私は隣りにいるお兄ちゃんにそう言つと、オムライスを口に運ぶ。

んぐ。家で食べるときはケチャップだから、ドミグラスソースが新鮮な感じがする。

今度うちで作る時も、ドミグラスソースで作ってみようかな。

「食べるがまず答えなさい。海という男は何処のどいつなんだ」

「もぐ、しつこい。お昼休み終わっちゃうよ？」

両親には海とお付き合ひしている事を電話で報告済みだ。

私は報告しなくてもいいって思ったんだけど、海が……

なんでもけじめとして必要だっと思ったらしく、アメリカに行つて直接私の両親に話すって言い始めたのだ。

さすがにそこまでしないでいいって思った私は、電話で報告するからと止めた。

あの時はなんとも言えない空気だったんだよね。

海が付き合うようになりまして話してくれたんだけど、お母さん大喜びだったらしい。

こっちまでお母さんの騒ぐ声が漏れて聞こえてきたんだもん。

そんでお母さんとは反対に、お父さんは絶句だった。

海から電話変わった時、「本当か？桜音はうちの桜音か？」なんて

わけのわからない質問されたり、

「涼君は知っているのか？涼君はどうしている？」とかなぜか涼の質問をされんだよね。

その時海と同居している事は「那智にバレるとうるさいから、一緒に住んでいる事は内緒にしておきなさい」お母さんに言われちゃったので言わない。

だから付き合っている事は内緒にするつもりはないんだけど、あまりのお兄ちゃんのしつこさにしゃべる気が失せてしまったのだ。

心配してくれるのは嬉しいけど、ちょっと過保護過ぎるよ。

私だってもう高校生だもん。

お兄ちゃんの後ろにくっ付いていた子供じゃない。

「父ちゃんは、海兄にあいたいの〜？」

あまりにしつこかったからか、連都はスプーン片手にお兄ちゃんに尋ねた。

「連都。お前、もしかして知ってるのかっ!？」

「うん」

あ、そうだ忘れてた。連都は海と面識あったんだっ!!

日下部君は巻き込まれるのが嫌で、海の事知らないって言ったけど。

「だったら、おじいちゃんの家に行けばあえるよ。海兄は、桜音といっしょにおじいちゃんの家にするから」

れ、連都。それ、一番言っちゃダメな事……

特徴とか言うかと思ったら、隠し通さなきゃいけない事を連都は言ってしまった。

ちょっとマズイかもしれない。

おそろおそろお兄ちゃんの方を見ると、目を大きく見開き、口もぽかんと開けている。そりゃあ、そうだと思う。だってお兄ちゃん、私が同居しているのは女の人だって思ってたんだから。

「一緒に住んでいるだと……？」

次第にお兄ちゃんが纏っていた空気がピリピリとしたものに変わっていく。

あゝ、これ絶対にマズイ。

もしかしたら、海に迷惑かけちゃうかもしれないよ

* * *

最悪だ。

潤む視界の中、私は昼にお兄ちゃんと会った事を激しく後悔していた。

「桜音！！開けなさい。帰るぞ」

扉を叩く音と、荒立てているお兄ちゃんの声が聞こえる。

でもお兄ちゃんは絶対に入っては来れない。

鍵はかけてあるから決して入れないはずだから。

絶対お兄ちゃんの所になんか戻らないもん……

私は見慣れた自分の部屋で布団を被り、扉の外から聞こえて来るお

兄ちゃんの声を少しでも遮断しようと試みた。

電気も着けてないため、外から入る光がなく室内は真っ暗だ。それでも目が慣れたせいかな、何処に何かあるかは少しはわかる。

「ここが私の家だもんっ!!」

「兄ちゃんは昼も言ったが、あの男との同居なんて許さない。桜音がうちに来なければ、あの男の荷物は全て業者に引き取ってもらおう。そして兄ちゃん達がここに引っ越してお前と暮らす」

「そんな勝手な事しないでよ!!」

お昼に海との同居がバレてから、お兄ちゃんは大激怒した。

よりにもよって私の携帯を取りあげたのだ。

合宿中の海との連絡手段これしかないのに。

その上、海との同居を許さないと、私をお兄ちゃん達のアパートに住まわせるとまで言った。

そんな事したら、海と暮らせなくなっちゃう。

だから私は香澄義理姉ちゃんが帰宅すると、事情を話して予定より早く自宅に帰宅したのだ。

まさか、帰宅して話を聞きつけたお兄ちゃんが来るなんて思ってもみなかったけど。

……どうしよう。

こんな事に海を巻きこんで、面倒だっと思われてお荷物になりたくない。

Happy Halloween 狼さんの正体は？ (前編) (前書き)

10月と言えばハロウィン。

という事で、碧威から読んでくれている人達にお礼番外編UPです。

*過去です(桜音・海一年の時)

あ。ここまで聞こえちゃってるよ。

しーんと静まりかえっている廊下から、窓の外へと顔を出し上を見上げる。

私が見ているのはこの三階上、つまり五階だ。

五階は家庭科室や被服室などがあるんだけど、この笑い声はたぶん家庭科室から聞こえてくるものだと思う。

しょうがないよね、すっごく盛り上がってるもん。

でも、少し声落とさないと先生に怒られちゃうかも。

家庭科室では、ハロウィンパーティーの真っ最中。

もちろんハロウィンという事で、ちゃんとコスプレもあり！！

衣装提供は被服部と演劇部で、お菓子は家庭部提供。

最初は三つの部活だけだったんだけど、どっからか話を聞きつけ乱入者が続出。

そのため飲食費300円の会費制とし、誰でも参加自由にしたのだ。

さすがに食べ物も飲み物も足りないのです、コンビニに買い出しに行っている。

だから大人数になってしまったので、家庭科室の声がここまで届くのかもしれない。

私も早くこれ届けてパーティーに戻ろうっと。

ちらりと手に持っている籠に目を向けると、足を速めた。

籠の中には一切れずつ切られたパンプキンケーキが入っている。

これは家庭部の手作りで、先生達へと渡すもの。

私はこれを家庭部の先輩に頼まれて、職員室に持っていく途中なのだ。

一人じゃなくみくも一緒だったんだけど、みくは途中で友達と会っちゃっておしゃべり中。

「赤ずきんちゃん」

「え？」

突然聞こえた男の人の声に思わず体がビクつき、足を止めてしまった。

だって放課後だからか、廊下には誰も居なく静かなんだもん。

それに、何か口調が冗談半分だからかかっているみたいだから。

おそろおそろ振り返ると、いつの間にか制服を着崩した二人の男が立っていた。

誰っ!？

顔を見ても相手は誰だかわからない。

ただその人達の態度や服装から、ちょっとガラが悪いように感じる。

スニーカーのラインの色が赤だから、三年生だよな。

その人達を見て、それ以外の情報がない。

ただ、ニヤ付いている二人の雰囲気にもズイって事はわかる。

こんな格好をしているせい!？

私の今の格好は、あかずきんちゃん。

これは演劇部に借りた衣装でハロウィンパーティーのために着ていたのだ。

みくを待つてれば良かった……
ただただ後悔だけが襲ってくる。

こうなったら逃げよう。それしかない。

巻き込まれないように咄嗟に走り出すと、後ろから追いかけてくる。
なんでついてくるの……!!

涙目になりながら、必死で走るものの、腕を掴まれ掴まってしまう。

「は、離して下さい……!!」

「え、なんで?」

「ダメだよ、赤ずきんちゃん。こんな所を歩いていると、悪いオカミさんに食べられちゃうよ?」

肩とか二人に馴れ馴れしくベタベタ触られ、嫌悪感で気持ちが悪い。
その上恐怖心で体が震えてきてしまった。

「どうしたの? 震えちゃって可愛い」

腕を掴んでいる奴が、ニヤニヤと笑いながら聞いてくる。

逃げなきゃと思うけど、体が自由に動かない。

涼、みく助けて!!

ギョツと目を瞑り心の中で叫ぶ。

涼は家庭科室でパーティーに参加中だし、みくは友達と談笑中。
だからここには来る可能性は少ない。

それでも、私はなぜか助けを求めてしまっていた。

「桜音……!!」

突然聞こえてきたその声に、先輩達が私の腕や肩から手が離れる。

え？

声の方向を見ると、オオカミさんが立っていた。
正確にはオオカミのキグルミを着た人だけ……

誰？もしかして、パーティーの参加者？

声の主に思い当たる人がいない。

オオカミさんは私の方へ来ると、先輩の前に立ちはだかってくれた。
どうやらオオカミさんは私を守ってくれるよう。

「なんだよ、お前」

「オオカミのくせに王子気どり？」

先輩達は私からターゲットをオオカミさんに変え、絡み始めてしま
う。

えっ、どうしよう！？オオカミさんが危ない！！

みくみたいに空手とか習ってたら助ける事が出来るかもしれないけ
ど、私じゃ足手まといにしかないよ。

どうしたらいいかわからずただ見ていると、オオカミさんが手であ
つちに行けと合図をしていた。

……でもっ！！

迷ったけど、私はオオカミさんのいう通り走った。

私に出来る事はない。

すぐに先生を呼んで来なきゃ！！

Happy Halloween 狼さんの正体は？ (前編) (後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございます。

「元気だしなよ？」

「だって……」

ピーターパンやメイドの格好をした人達が騒いでいる部屋の隅で、私は一人うな垂れていた。

魔女の格好をしたみくが励ましてくれているけど、私はオオカミのキグルミの人の事で頭がいっぱい。

あの後先生を連れてオオカミさんの所に向かったんだけど、オオカミさんも先輩もいなかった。

何処かに連れて行かれて、殴られてたらどうしよう。

無事でいて欲しいよ。

元々絡まれてたの私だったのに、巻き込んだじゃった……

「桜音。オオカミ探して来たぞ」

「えっ!？」

涼の声に顔を上げると、そこにはドラキュラの格好をした涼とあの時のオオカミが立っていた。

オオカミさんだっ!!

どうやら、涼が探してきてくれたみたい。

「オオカミさん!!」

私はすぐに立ちあがり駆け寄るとオオカミに抱きついた。
ふわふわの生地が体が埋もれる。

良かった。

「怪我とかしてない!？」

オオカミのキグルミを着た人は、私の問いにしゃべらずにただ首を

縦に動かす。

それを確認すると、私はほっと胸をなで下ろした。

「ごめんなさい。私のせいで……」

面倒なことに巻きこんでしまった。

私があそこで掴まらなければ、オオカミさんにも迷惑かけずに済んだのだ。

謝ると、頭をふわふわの手で撫でられる。

気にするなつて言ってくれてるのかな？

オオカミさんは背の高い人らしく必然的に上目ずかいになりオオカミさんを見つめると、なぜか頭を撫でる力が強くなってしまう。

あ、そうだ。お礼にこれを

私はオオカミさんから離れると、手に持っていた籠の中から透明な袋にゴールドの針金で封をされたものを取りだす。

これはカボチャのスコーン。

今日のイベントの為に家で作って来たのだ。

「助けてくれてありがとう。あのね、これお礼。手作りだからおいしいかわかんないけど、良かったら食べてね」

オオカミさんは、つぶらな瞳でスコーンをしばらく見つめる。

そしてゆっくりとそれに手を伸ばし両手で大事そうに受け取ると、首を縦に振った。

「良かったじゃん、桜音見つかった」

「うん」

「ねえ、このキグルミかなりふかふかしてそうじゃん？演劇部の衣装にしては金かけてるわね」

「うん。ふかふかだよ。こつこつ毛布欲しいよね」

私はみくの言葉に、また顔をオオカミさんに埋めギョツとしがみ付く。

するとオオカミさんはお菓子を器用に片手で持ち空いている方の手で私を強く抱きしめ返した。

……う、ちよつと苦しいかも。

「気持ちよさそうじゃん。私にも変わってくれない？」

「うん」

オオカミさんから手を離すが、オオカミさんは私の拘束を解いてくれない。

「オオカミさん。みくも抱きつきたいって」

私がそう言つと、オオカミさんは激しく首を横に振つた。

え？ダメなの？

「はあ！？なんで桜音が良くて私が駄目なのよ！！皮剥ぐぞ！！」

みくの目はすわり、口元は引き攣っている。

……け、喧嘩とかしないよね？

私がそんな事を考えているうちに、みくの手はオオカミさんの頭部へと向かっていた。

それをオオカミさんは阻止せんと、みくの攻撃を避けながら逃げる。

「逃げんな。顔見せる！！」

逃げるオオカミさんをみくが追いかけて行き、二人はドアを開けて廊下へといってしまった。

ど、どうしよう！？

「みくは魔女じゃなくて、獵師だな」

茫然としている私の横で、涼はかぼちゃプリンを食べながら二人が消えたドアを見ている。

「ねえ、あれ誰だったの？」

「赤ずきんちゃんにベタ惚れ中のオオカミ」

「も〜、涼。ちゃんと答えてよ!!」

「猟師の天敵のオオカミ」

「言う気ないでしょ……」

その後何度か聞くが、結局涼ははぐらかして答えてくれなかった。連れて来てくれたから、顔は知っていると思うんだけどな。

後で戻って来たみくは、途中で見失っちゃったらしい。

結局あれは誰だったんだろう？

答えは闇の中だ。

Happy Halloween

狼さんの正体は？

(後編)

(後書き)

狼の正体はもちろん海です。

最後まで出てこなかったけど^^^ ;

第三十五話 彼の心 彼女の決意

シックな家具や調度品により、落ち着いた感じのするリビング。私の家とは違い、それには生活感があまり感じられない。

私はそんな室内の中央にあるソファに座っていた。

テーブルを挟んで反対側のソファに座っているその人は、私が今一番逢いたい人に似ている。

でも正確には逢いたい人がその人に似ているということ。

そこに座っているのは、啓吾さん。

彼は海のお父さんだから似ているのは当然と言えば当然の事だ。

お互いの視線が合い、こちらを見て微笑む啓吾さんと海を重ねてしまい、無性に泣きたくなくなってしまった。

海、逢いたいよ……

「桜音ちゃん、どうぞ」

「ありがとうございます」

みちるさんがテーブルの上にティーカップを置いてくれた。

私はそれを「いただきます」と言い、カップを取り、口をつけ傾けて口に流す。

……おいしい。

ミルクの甘さと紅茶の香りは、私の心を不思議と少し落ち着きを取り戻し始めてくれる。

「少し落ち着いたかい？」

「はい。」ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

啓吾さんとみちるさんに頭を下げると、「謝らないで」と啓吾さんとみちるさんに制止されてしまう。

私は啓吾さんに連れられ、海の実家　啓吾さんの家に来ていた。啓吾さんは、全ての事情を知った海に頼まれて私の様子を見にきてくれたそうだ。

海がなぜ知っているか言っていると、どうやら日下部君がお昼の件でメールをしてくれたらしい。

それで心配した海は、私宛にメールや電話を何度かしてくれていた。でも私の携帯はお兄ちゃんに取られて連絡が取れず、海は義理姉さんに電話をして、私の様子を尋ねたそうだ。

そこで私が家に戻った事を知り、啓吾さんに様子を見て自分に連絡を入れてくれと頼んだくれたみたい。

「迷惑じゃないし、謝る事なんてないんだよ。この件は僕達にも関係している事なんだ。海が帰って来たら、一度お兄さんも交えてみんなで話し合おう。状況が落ち着くまで桜音ちゃんは、ここに居て自分の家だと思ってゆっくりくつろいでくれて構わないから。ね？」

「ですが……」

「ちゃんとお兄さん達にも連絡済みだよ。お兄さんはしぶしぶだったが、納得してくれた。ねえ、桜音ちゃん。海のためにもここにいてくれないかな？あの子、また心配しちゃうからさ」

でもただでさえ、ご迷惑かけているのに……

啓吾さんは私の顔を見て苦笑いを浮かべると、言葉を続けた。

「海はね、桜音ちゃんの事をずっと好きだったんだ。すごくわかりやすく、最初は笑えたよ。知っていた？去年のクリスマス辺りからかな？僕が桜音ちゃんに渡していたプレゼントあるでしょ？クリスマスや誕生日、それにホワイトデーとかの。あれ、全部海からな

「んだよ」

「……え」

思わぬ話に俯いていた顔を上げ、啓吾さんを見た。

「だって私、あの時まだ海の事知らないよ？」

「もちろん存在は知っていたけど、話した事とかもない思うし。」

「海が自分が選んで買うつて聞かなかったんだ。自分で稼いだお金で払いたいつてバイトまでしてさ。僕もプレゼントしたいのに。その上、僕が貰った桜音ちゃんの手作りのお菓子とかバレンタインのチョコとか全部一人占めするし。そんなんだつたら、話しかければいいと思わない？僕と言う接点があるんだから。それなのにヘタレだよ、あの子」

「えっ、本当ですか？」

「本当だよ。海は桜音ちゃんの事が好きで好きでしょうがないんだ。だからごめんね、愛情表現がうつとおしくなるかもしれない。あの子、付き合ってきた子達は居たけど、桜音ちゃんが初恋みたいなものだから」

海が初恋っ！？

「だっていつも余裕あるし、慣れてるみたいなのに。」

「だからこれから先、迷惑をいっぱいかけると思う。いや、桜音ちゃんにはもうかけているかもしれないね。だから、お互い様なんだから迷惑かけてもいいんだよ。それに海は迷惑だなんて思っていないとおもう。迷惑だと思ってもそれすら、嬉しいと感じるかもしれないね。あの子。それから僕とみちるも迷惑だなんて思っていないよ。だって桜音ちゃんは娘のような子だから……」

「そうよ。だから気にしないで。それに海君と桜音ちゃんが結婚したら、本当の娘になるものね」

「えっ！？」

二人はクスクスと笑い始めた。

赤くなつた頬を抑え、私は決心する。

私はこの件では、お兄ちゃんから逃げてばかり。

でも、逃げないでちゃんと話あう。

だって、こうして傍にいてくれる人達がいるんだから。

それに、お兄ちゃんも話せばわかつてくれるはずだもん。

第三十六話 小悪魔の不意打ち攻撃

私は小さい時は、ずっとお兄ちゃん子だった。

両親は共働きで家に居ない時が多かったし、お兄ちゃんも年が離れている私を可愛がつてくれたから、かなり懐いていた。

だから今回の事もお兄ちゃんが煩く言うのも、私の事を心配してっという事が良くわかつている。

でも私は海と一緒に居たい。

だから

「よし、頑張ってお兄ちゃんを説得するぞっ!!!」

見つめている時計の針は間もなく8時を回ろうとしている。

私はそれを見て、気合いを入れた。

もうすぐお兄ちゃんと香澄義理姉ちゃんがうちにやって来るのだ。

もちろん要件はただ遊びに来るのじゃなく、私と海の同居と交際について。

最初啓吾さんやお母さんも同席すると話があったんだけど、今回は私と海でちゃんと話をつけるから任せて欲しいって二人に話をした。もし私と海だけでは力不足な時は、力を貸して欲しいともお願いしている。

ちゃんと話しあって、きちんと海の事をわかって貰わなきゃ。

お兄ちゃんが心配するような事はなにもないよって。

安心してもらわないとね。

「……でも、もしお兄ちゃんがわかつてくれなかったら？」

もしもの事が頭をよぎり、気合いを入れたばかりなのに早くも心が弱くなってきた。

もしわかってくれなかったら？

私の話なんかに耳を傾けてくれなかったら？

そんな思いが浮かんでしまい、私の心にはくすんだ世界が広がっていく。

「桜音」

ぼうつと麻痺していた思考が、名前を呼ばれたため急速に戻ってくる。

私はなんとかマイナス思考から脱出しようと首を横に振ると顔を上げた。

「大丈夫か？」

海は眉を下げ心配そうに私を覗きこんでいる。

どうやら私は海が近くに来たのにも気づかなかったみたい。しっかりしろ、私っ！！

海に心配かけちゃ駄目。一人でちゃんとやらなきゃ！！

「うん、平気だよ」

私は海に向かって笑みを作る。

だけど海はそれを見て、辛そうに顔を歪め私を抱き寄せた。

「……海？」

「桜音ごめん。俺が不甲斐ないばかりに桜音に不安な思いさせて。」

しかも肝心な時、俺居なくて役立たずだな」

「海は不甲斐なくないし、役立たずじゃないよ。それにあの時、海部活だったんだじゃん。それに今回は私が巻き込んだじゃないかみたいなものだし……」

海はずっと私の傍に居れなかった事を悔やんでいる。

私がお兄ちゃんといういる会った時、海は合宿中だった。

だから仕方ないし気にしないですって何度も言っているのに……

「いや、これは俺も関係している事だ。だから桜音が巻き込んだとかじゃない」

「でもっ!?!」

「でもない。桜音。俺は桜音の何？」

「えっと……か、彼氏です」

「そう。だからこういう不安な事とか悩み事とかあった時は、一人で背負ったりしないで欲しい。頼りにならないかもしれないけど、俺にも分けてくれ。一緒に考えて一緒に対策練ろう？一人では出来ないかもしれないけど、二人なら出来る事もあるかもしれないから」

海はそう言うと、私の頬に手を伸ばす。

「な？」

「うん」

優しく撫でてくれる暖かい大きい手。

それがいつもより大きく感じる気がする。

私はその手に自分の手を重ねた。

好き。大好き。

海に対する想いが溢れてしょうがない。

言葉は大切だ。

けど抱き合ったり、触れあったりするって事も同じくらい大切。

恥ずかしいけどね……

私は海に抱きしめられるのも、触れられるのも好き。

鼓動が落ち着かないのに、どこか安心する。

それに、海が私の事を大事にしてくれているのも感じられるから。だからきつと海も同じだと思う。

「さ、桜音っ!?!」

突然抱きしめたせいか、海の声が裏返っている。
あ、驚かせちゃったつばい。

「ねえ、海は？」

顔を上げ、海を見つめた。

すると海は顔を真っ赤にさせ金魚のように口をパクパクとさせている。

あれ〜？ 苦しいほどギュッて抱きしめてないんだけどなあ？

いつも自分から抱きしめてくれるのに海は抱きしめてくれる気配がない。

そう言えば、前も不意打ちで私から抱きしめた時もこんな反応だったけ。

たしか、あれは前に啓吾さんに水族館の招待を受けた時だ。

嬉しすぎて海に抱きつくと、海は顔を真っ赤にさせしばらく固まっていた。

なんでだろう？

「ギュッてしてくれないの？」

そう言ったらいつもより強い力で抱きしめられた。

うっ、ちよつと苦しいかも。

「するに決まってるだろ！！なんでこんなに可愛いんだ！？もしかして桜音は小悪魔かつ！？小悪魔なのか？」

「……え」

そんな事言われた事一回もない。

というか、明らかに私とはかけ離れた言葉なんですけど。

「ちよつ、海！ー！」

「可愛すぎる」

なぜキス魔スイッチが入ったの！？

テンションのすっかり上がってしまった海によって、頬や唇にキスの雨が降ってくる。

ここ日本なのにくっ！！

もっつ。

お兄ちゃん達もすぐ来るのに、このまま顔真っ赤って不審に思われちゃうよ。

と、とにかく止めなきゃ！！

海をなんとか止めようとした瞬間、ピピピッと電子音が室内に鳴り響く。

その音に私と海も一瞬止まった。

なぜならこの電子音はうちに供えられた警備システムが作動したためだから。

第三十七話 いきなりプロポーズっ！？

「とにかく、俺はお前と桜音の同居も交際も一切認めない」

腕を組んであぐらをかいているお兄ちゃんは、テーブルの向こうに
対面するように座っている海を睨みながらそう言った。

はつきり言っただけのお兄ちゃんに威厳は感じられない。

私も香澄義理姉ちゃんもあきれ顔で見つめていた。

まじめに今回の事について話を聞いているのは、海だけ。

だって、お兄ちゃんってばさつき

「警察と警備員にさつき怒られていたくせに、何恰好つけてんのよ。
まったく。桜音ちゃん達を覗くために自分の家の塀をよじ登るなん
てバカな事してくれたおかげで、桜音ちゃんと海君にまで迷惑かけ
ちゃったじゃないの。まず謝りなさいよ」

お兄ちゃんの隣りでは、香澄義理姉ちゃんが冷めた目でお兄ちゃん
を突き刺している。

そうだよ。香澄義理姉ちゃんの言う通り。

さつきあのセキュリティの警報をならした犯人は泥棒なんかじゃな
くて、お兄ちゃん。

私達が二人つきりなので、如何わしい事してないかと思っただけ、
中の様子を伺うために塀をよじ登ってこっそり侵入を図ったんだっ
て。

「俺はただ桜音の事が心配だったただけだ！！大体なんでうちがセキ
ユリテイに加入してんだよ！？俺は知らされてないぞ！！」

お兄ちゃん、それやつ当たりじゃなか。

はあ、海の前なのに……

私はちらりと海を見た。

海、呆れてないかな？

「いろいろご報告が遅れてすみません。それはここに引越して来る時、俺が入れたんです。もちろん、前もっておじさんとおばさんの許可済みです」

「俺は聞いてないぞ」

「すみません。桜音の身に何かあると心配なので、対策はちゃんと置いて置きたくて入れさせて頂きました」

「……じゃあなんだ。セキュリティに加入したのは、桜音のためだと？」

「はい」

その海 of 言葉に、お兄ちゃんは口を噤んだ。

あ、大人しくなった。

さっきまで騒がしかったのに。

「お兄さん」

「お前のお兄さんじゃない。俺は桜音のお兄さんだ」

海の問い掛けに、お兄ちゃんは良く使われてそうなそんな台詞を吐く。

お兄ちゃん is 眉間に皺を寄せながらも何か考えてるみたい。

「では、那智さんと。桜音さんとの同居と交際を認めて下さいませんか？桜音さんの事は必ず大事にします。

桜音さんは可愛らしくて俺には勿体ない子ですが、彼女に釣り合うように俺努力しますから」

「海、違うよ。逆だよ、逆！！私が海に釣り合うように努力しなきゃならないの。」

だって海、カッコイイし優しいし、頭も良いし。私とは違うもん」
誰が見ても釣り合わないのは一目瞭然だ。

可愛いわけじゃない平凡な私と、王子様のような海。

そんなの比べるまでもない。

「お兄ちゃん。私ね、正直お付き合いって事がまだ良くわからなくて、戸惑うし不安な事とかもいっぱいあるんだ。

でも海の傍にいと、幸せなの。海に名前を呼ばれたり何気ない事が嬉しいの」

私はお兄ちゃんに対して、微笑んだ。

きつとお兄ちゃんだってそう。

香澄義理お姉ちゃんがいるんだもん、わかってくれる。

「だから、海との事認めて」

「……同居は絶対に認めない」

「お兄ちゃんっ！！」

私は思わずテーブルに身を乗り出す。

「桜音、頭を冷やさない。もし、この件が学校側にバレたらどうするんだ？まだ他の家族が同居していれば理解できるが、二人つきりというのは問題じゃないか？

今まで見つからなかったかもしれないが、今後はわからない。事情も知らないような奴らに、お前が誹謗中傷されるかもしれないんだぞ。

それに学校側がどう出るかもわからないんだ。お前は桜音が大事なからわかるよな？」

お兄ちゃんは海を射る様に見つめる。

その視線にぶつかった海の瞳がゆらゆらと揺れ動く。

まさか海、お兄ちゃんの見解に賛成するわけじゃないよね？

「お前がセキュリティを入れて対策を打ったように、桜音のために対策は打たなきゃならないんじゃないのか？傷つくのは桜音だ」

「平気だもん」

「……桜音、ごめん」

海は私の方を見ると、眉を下げ辛そうにそう呟く。
その声はか細く弱い。

「桜音さんとお付き合いの方は認めて頂けるんですよね？」

「それは考えてやらないでもない」

「わかりました。俺が出て行きます」

「海っ！！なんで!?!」

なんで勝手に決めるの？

「桜音。俺も桜音と一緒に暮らしたい。でも、那智さんの言う通りだと思っただ。肯定的に受け止めるような奴だけじゃない。」

おもしろおかしく言うやつも出て来るはずだ。そんな奴らに俺のせいで桜音の事を傷つけられたくない」

「大丈夫だもん。バレないように頑張るから!！」

私はさすがのように、海にしがみ付く。

「桜音。バレないように頑張るって、そんな気はった生活毎日続けるのか？疲れるぞ」

「疲れても良いもん。私は、海と一緒に居たい。お兄ちゃん、変な事言わないで!！」

「じゃあ、そんな疲れる生活こいつにもさせるのか？」

「っ」

お兄ちゃんは、視線を海に向ける。

そんな生活海にさせたくないよ。でも……

どうしていいかわかんなくなっちゃって、頭の中ぐちゃぐちゃになつたせいか視界が潤んできた。

泣いても解決なんてしないのに。

「桜音」

海はそう私に声をかけると、そつと膝の上に乗せていた私の手を握った。

「一緒に暮らせなくても、俺は彼氏として桜音の傍に居たい。もちろん桜音との生活に未練はあるよ。」

今は一緒に暮らせなくなっても、数年後にはずつと一緒に暮らせる時が来るからその時まで待っていて欲しい」

「数年後……？」

私は首を傾げ海を見上げる。

周りを説得するのに、それぐらい時間がかかるってわけじゃないよね？

「ああ。桜音と俺が結婚したら、ずつと一緒に暮らせるだろ？」

「うん、そうだね。たしかに結婚したら一緒に　つて、けっ、結婚っ！？」

予想もしてなかった単語の出現に、私の声がどもるのは仕方ない。結婚ってあの結婚だよね。

えっ、ちよつと待って。付き合っただけだし、まだ高校生だし！！

「お前、高校生の分際でプロポーズだと！？早すぎるにもほどがある！！それにうちの桜音はずつと嫁にはいかない！！」

「たしかに俺は高校生です。ですが、俺は桜音さんを愛しています。出来る事なら今すぐ結婚したいですが、俺はまだ親に養ってもらっている状態。」

なので社会人になって桜音さんを養えるようになったら、その時は正式にプロポーズを申し込んで結婚と考えています」

お兄ちゃんの怒号にきっぱりとそう言ったのけた海を、みんな口をポカンと開けてみた。

それはもちろん、私もだ。

第三十七話 いきなりプロポーズっ!?(後書き)

次で合鍵は最終話(予定)です。

ここまで読んで下さった方、ありがとうございました。
良かったら、次回もお付き合いください(^| ^)

エピソード

んー、そろそろだと思っただけだな。

私は白い皮のソファに座りながら、先に見てて良いよと海に言われたDVDを見ていた。

やけに大きいそのテレビは壁掛けになってあり、広い室内をより広く見せてくれている。

部屋にはあまり物がなから、余計広く感じるのかも。

室内をぱつと見てわかるのはテーブルにソファ、それから窓辺の観葉植物と壁側にあるシルバーのラックに収納されたDVDやCDそれにコンポ。あとダークブラウンの扉のついたラックぐらいだ。

全体的に生活感がない印象を受ける。

きっちり掃除だつてされてるし。

そういえば、一緒に住んでいた頃の海の部屋もそうだったっけ。

時々ふとした些細な事で思い出す。

まだ海と一緒に住んでいた時のことを。

あれから結構経っただけだなあ……

ここは海の住んでいるマンション。

私は海に合鍵を貰ってこうしてたまに夕食なんかを作りに来ている。

あの時のお兄ちゃんの話し合いで、私達はばらばらに暮らす事になった。

お兄ちゃん達がうちに引っ越してきると同時に、海は啓吾さん所有のマンションへ。

その上「交際を考えてくれる」って言って言っていたお兄ちゃんが

まさかの反対声明を発表。

妨害工作なんかも始めちゃったりして、私達は会える時間が減ってしまっている。

とりあえず妨害工作その一、門限をもっと遅くして欲しい。

だって、門限7時って早くない？

私、高校生なのに。せめて7時30分がいい。

「桜音」

あつ。帰って来たっ！！

玄関から私の事を呼ぶ聞こえてきた声に、慌てて立ち上がるとその声の方へと向かい走ったけど、どうやらあっちの方が早かったらしい。

扉を開け入室してきたこの部屋の主によって、私は抱きしめられてしまった。

そのため、「お帰りなさい」という言葉をのみ込んでしまう。

「ただいま」

「おかえりなさい」

私も海の背に手を回し、その体を抱きしめた。

しばらくするとゆっくり拘束が解かれたので、私も回していた手の力を緩める。

すると頬に海の手が添えられ、唇にキスを落とされた。

うっ、この新婚さんの感じはまだ慣れないよっ！！

「久しぶりの桜音とのキスだな」

あれ？久しぶりって、昨日いっぱいしたような気がするんだけど…

…？

私はその言葉に首を傾げる。

「昨日したよね？」

「ああ、でも今日はまだしてないだろ」
ほら、やっぱり昨日したじゃん。
私は日ごろ疑問に思っている事を海に聞いてみた。

「もしかして、海ってキス魔？」

「どうだろうな？でもそれは、桜音が可愛くてしょうがないからだぞ」

「私の事可愛いって言うの、それ海だけだよ」
だって私、可愛くないもん。

そりよあ、好きな人に可愛いって言われると嬉しい。
でも、みくもそうだけど私より遥かに可愛い子がいっぱいいるし。

「……いや、少なくとも二人は知ってる。しかもあいつらあきらめてないし」

海はなぜか忌々しそうに顔を歪めた。

「えっ？誰？」

「教えない」

海はそう言つと、私を抱き上げソファへと座らせると自分もその隣に座つた。

誰だろう？私の事可愛いって言うてくれた人って。

「ねえ、誰？」

「教えない。桜音は俺のだから」

そう言つて私を抱き寄せる海に思わず笑ってしまう。
海ってば、またやきもち妬いてる。

そんな風にやきもち妬く必要なんてないのに。
だって私は

「ねえ、海」

「ん？なんだ？」

私は海においでおいでと手まねきをする。

そして屈みこんだ海の耳元で「大好き」と囁いた。

しばらく茫然としていた海だったけど、現状が把握出来たのか急速に顔が赤くなっていく。

わゝ、耳まで真っ赤だ。

たぶん、私も同じくらい赤くなってると思うけど。

「桜音、俺も大好きだ！！」

ガバツと海に抱きしめられ、私は海と一緒に過ごしてきた日のことを思い出していた。

最初にうちの玄関であった時のことや告白された時のこととか。

きつとあの時海と同居しなかったら、こんな風な未来は描けなかったと思う。

シンデレラのガラスの靴じゃないけど、あの合鍵は私達にとってお互いを繋いでくれた大切なものだったのかもしれない。

今はその合鍵は無くなってしまったけど、私達はもう大丈夫。

きつとそれが無くても、二人ずつと一緒にいられるから

エピローグ（後書き）

あとがき

ここまで合鍵にお付き合いして下さい下さった方々ありがとうございますございました
た> (| |) <

これにて本編は完結です。もちろん、番外編は書きますよ。

感想を下さった方、お気に入りに入れて下さった方、読んで下さった方

本当にありがとうございます。

特に感想を下さった方一人一人の名前を出してお礼が言いたいんですが、

差しさわりがあると悪いので控えます^^;

自分の書いているものに反応があるっていう事がこんなに嬉しいんだ
っていう事を知りました。

自分の文章があまりにも稚拙すぎてどうしても他の人と比べてしま
い、

何度か落ち込んで書くのをストップしようかなって思った事もあっ
ただ、

完結出来て良かったです。

本当にありがとうございます。

2010・11・28

歌月 碧威

番外編 桜音風邪を引く1 side桜音(前書き)

ブログより転載です。

遮断された教室の外からセミの鳴き声が聞こえてくる。
それは窓を閉められて遮断されている室内のせいなのか、そもそもズキズキと痛む頭のせいなのか、耳に届くのが酷く鈍い。

どうしよう我慢できなくなってきた……

黒板に書かれてある数式を写す手を止め、半袖から伸びている腕を摩る。

寒い。

周りを見回してみると、三、四人だけクーラーが直に当たる人達は防寒の為に長袖ジャージを着ている。

頭も痛いし、もしかして風邪ひいたかも。

私も長袖のジャージを羽織りたいけど、ロッカーに置いてないから羽織るものがない。

……うう。寒い。あと何分？

黒板の上にある時計を見ると、授業終了まであと残り大体15分くらい。

あゝ、時間微妙。

私は少し考えると授業を継続する事にし、シャープペンを握りなおして続きを書こうと黒板を見る。

このまま授業が終わってから保健室に行こうと。

すると、右側から「先生」と呼ぶ声が聞こえてきた。

教壇に立ち教科書を開いていた数学の西川先生は、その声に顔を上げ、

声の方向を見る。

その視線を追うように一斉にみんなの視線が向いているのは、私の三つ隣りにいる涼の席。

「どうした、水谷」

「保健室に行ってもいいですか？」

涼はそんな視線を気にもせず、口を開いた。

え、涼も具合わるいのかな？

「それはかまわんが、どっか具合でも悪いのか？」

「いえ、俺じゃなく」

涼の視線がゆつくりと私に向けられる。

ん？どうしたんだらう？

私は首を傾げた。

「桜音、具合悪い時は我慢するなって言ってるだろ？」

涼はそう言うため息を吐いた。

だって大丈夫だって思ったんだもん……。

「なんだ逢月、お前具合悪いのか？」

「はい。頭痛が……」

先生の問いかけに返事をする、周りから「水谷すげえ何でわかつたんだ!？」とか「さすが!」なんて声が聞こえてきた。

周りの人が具合悪そうに見えないって事は顔色とか普段と変わってないのかな？

しかしほんと涼ってすごいから不思議。

だっていつも私が具合悪いのとかわかつちゃうんだもん。

「なら、念のため保健室に行つて来い。テスト前で夏風邪なんてひいたら大変だ」

「はい」

教科書とノート、そしてペンケースを机の端に片付け、立ち上がった。

やばっ。

足元がぐらつき、ガタンという音と共に床の上に座り込んでしまう。どうしよう。足に力が入らないよ……

「桜音!!」

「桜音さん!？」

みくと千里ちゃんの叫ぶような声がぼーっと聞こえる。

「大丈夫」

一応安心させるために言っではみたけど、正直しんどい。自分で思っているより、以外と重症みたい。

やっぱ熱あるのかも？

熱いように感じないんだけどな。

おでこに手を当てている私をよそに、教室内がざわつき軽く騒動となりかけてしまっている。

「だから無理するなって言ってるのに」

「わっ」

涼の声と一緒に急にひょいっと体が宙に浮き、床から離れてく。

「あ、お姫様だっこだ」ってわかった瞬間、周りから「羨ましい!

!」「私も!!」とかいろんな女の子の声聞こえてきた。

涼にお姫様だっこされて運ばれるのは、初めてじゃないけど、すごく恥ずかしい。

「桜音さんなら、僕が運びます」

千里ちゃんが、手を伸ばし涼から私を受け取るうとしたけど、涼は「いいよ。俺が運ぶから」

と言って千里ちゃんの申し出を断ると、歩き出す。

「……ごめんね、涼」

「気にするな」

温かい。人の体温ってこんなに温かいんだ。

涼の体温で暖をとりながら、私は目を瞑った。

桜音風邪を引く2 side海

外の暑さに比べれば、教室の中はクーラーがかかっている快適だ。昼休みも終わり、腹も膨れたところで眠気もやってくる。

その上授業があいつの苦手な英語とくれば、安眠できる要素はそろっていた。

寝るならそんな堂々と寝るなよ……

俺は若林が読み上げる英文を聞きながら、斜め右の方向を見ている。若林は俺らの英語の担任で、桜音のクラス担任だ。

髭を生やし、体系はかなりの大型。

桜音は「クマさんみたいで可愛い」って言っている。

何処をどう見たら、クマに見えるんだろうか。

ただ、ちよつと桜音に可愛いって言われる若林が羨ましい。

あいつは、もう少しバレない寝方は出来ないのか。

そいつは机にうつ伏せになり、読み上げられている英文を子守唄代わりにして寝ていた。

西野はもつとうまく寝ているぞ。

教室のドア側の一番前席の西野は、教科書を見ている振りして寝ている。

「ではこのページの訳を各自やってあると思うので 在原」

指されたのでノートを持って立ちあがろうとすると、先生によって手で制されてしまう。

「在原と思ったが、日下部。日下部香織」

やっば気づくよな。

呼ばれた上に皆の視線を集めているのに、日下部は一向に気づかない。

おい、起きろよ……
隣の奴が起こす前に、若林が教科書を丸めて頭をはたいてしまった。

「痛つてえ」

頭を摩りながらあいつはバツと起きると、現状を一瞬にして理解したようだった。

「どこっすか？」

「教科書、56ページの訳」

「はあ！？訳つてこれ英語っすよ？んな、海じゃねえから急に訳せつて言われても、俺が訳せるわけねえっしょ」

「急じゃない。この間の授業で課題として前もって言っておいただろうが」

「え、俺居ましたっけ？」

「居ただろうが！！たく、お前は少しはちゃんと真面目に授業受ける。あと、西野！！お前も起きろ」

やっぱバレてたのか。

西野は急に名前を呼ばれたため、飛び起きてしまった。

「お前ら、そんなに俺の授業は暇か？」

これから説教が始まるって時に、ドアを叩く控え目な音が聞こえてきた。

「若林先生」

ドアが開けられ、白衣の女性が入って来た。

あれは……保険医の高橋だ。

「今、少しよろしいですか？」

「あ、はい。どうなさったんですか？」

若林はドアの方へと向かう。

その後若林と高橋先生は何かを話しているらしいが、俺の席までは

聞こえない。

「マジで！？んで逢月さん大丈夫なの！？」

は？桜音！？

俺には関係ないと思っていた会話が、どうやらそうでもなかったよ
うだ。

西野の声によつて、見ていた空からドアの方向に視線を移動させる。

「お前な……」

「聞き耳立ててたとかじゃなくて、たまたま聞こえたんですって。
それより、大丈夫なんですか？倒れたって」

……倒れた！？

勢いよく立ちあがったため、イスが倒れる音と共に教室中の視線が
集まったが、それどころじゃない。

「どうした、在原……？」

皆怪訝そうに見ているが、唯一わかっている日下部だけは違った。

「具合悪いので保健室に行きます」

「ああ、行って来い。大丈夫か？お前顔色悪いぞ？」

「あの、でしたら私が保健室に……」

「あ、そうですね。丁度よかったな、保険医の先生ここにいて。で
は、高橋先生、在原を保健室に……つて、在原！？」

先生が何か言っているが、どうでもいい。
それより桜音だ。

俺は全速力で保健室へと向かう。

だが俺が行った時には、桜音はすでに保健室には居なかった。

一体、何処の病院に行ったんだ……？
階段に座りながら、いつ開くかわかない玄関の扉を見つめる。

俺が保健室に行くと、もう桜音の姿はなかった。
戻って来た保険医に話を聞いたところ、桜音の熱が高かったため、
すぐに付き添いの涼とタクシーで帰宅したそうだ。

どうやらその報告をしにきていたらしい。
それを聞き俺も急いで早退して帰宅したが、二人の姿はなかった。
おそらく病院に直で行ったのだろう。

肝心の病院を探そうにもかかりつけがわからないし、携帯も繋がらない。
そのため、現在自宅待機を余儀なくされている。

しかし、遅い。

腕時計を見ると、二時間はゆうに超えていた。
時計の針が進むごとに嫌な不安ばかりが募り、心配でたまらない。
病院が混んでいるのか、それとも

……やっぱり探してみるか。

玄関の扉に手をかけようと手を伸ばすと、玄関の鍵が勝手に開いた。
もしかして……

たまらずあつちが扉を開ける前に扉を開けると、想像通り桜音と涼
が立っていた。

桜音は涼に支えられるようにして立っていて、二人とも目を大きく
見開きこつちを見ている。

まさか俺が居るとは思ってもいなかったのだろう。

無理もない。普通なら、今は授業中のはずだ。

「…か…い…?」
首を傾げる桜音は、いつもより顔が赤く汗ばんでいる。
熱があるからやっぱ寒いのか、長袖のバスケット部のジャージを着ていた。

ジャージは桜音には大きすぎるらしく、全体的にぶかぶかだ。

「大丈夫か？」

なんの事だかわからなかったのか、桜音はきよとした顔をしている。

「具合はどうなんだ？」

「…うん。お医者さんに見て貰ったし、お薬も飲んだから。ねえ、海どうしてここにいるの？学校は？」

「詳しくは後だ。それより部屋に行こう。ここだと休めないだろうしくわしく聞きたい事とかあるが、ここで立ち話しても桜音の体に悪い。」

詳しい事は、後で涼にでも聞くか

俺は桜音を抱きかかえると、桜音の部屋へと運んだ。

* * *

「だから俺がやるって言ったのに」

「……。」

涼は絆創膏だらけの俺の指とまな板の上にある物体を見ながら、深いため息を吐きだした。

涼の視線の先にあるのは、酷い剥かれ方をした林檎の皮の残骸。

その剥きから方だと、実はかなりやせ細っている事は簡単に想像ができる。

しょうがないだろ、初めてだったんだから……

「一応出来たんだからいいだろ」

ガラスの器を涼に見せる。

そこには摩り下ろされている林檎が入っていた。

あんな剥き方したから、量が少ないけど。

「まあ、確かに。でも、皮捨てるなよ。もったいないから後で俺が食うから」

「……わかった」

「じゃあそれに蜂蜜かけて上に持って行ってくれ。俺は洗濯物干ししてくるから」

「ああ」

俺はキッチンから出て行く涼の背中を見送った。

涼は住んでもいないのに、この家の事をよく知っている。

氷まぐらの場所や、毛布のしまつてある場所とか。

何処にしまつてあるかわからない俺の代わりに、涼はそれを準備してくれた。

それだけじゃない。涼は、桜音の事も良く知っていた。

具合悪くて食欲無い時には、林檎のすりおろした物に蜂蜜をかけたやつなら食べるとか、

おかゆ派じゃなくうどん派だとか……

「付き合いたいし、桜音風邪引いた時何度も看病してたからな」と涼は笑っていたが、こっちとしてはへこむ。

だってそうだろう？俺がやった事と言えば買い物と。この林檎の皮を剥きぐらいだ。

他の事は俺がやる前に涼がテキパキとやっちゃっている。

その林檎の皮むきすら、まともに出来ていない。

なんて俺、使えないんだ……

ため息を吐きながら、俺は階段を昇り桜音の部屋へと向かった。

「どうだ？もう少し食べれそうか？」

「……うん。あと一口だけ」

俺はその返事を聞き、摩り下ろされた林檎をスプーンですくうと、それを口元まで持っていく。

すると桜音の小さい唇が開き、そのスプーンを口の中に招き入れた。

よかった。少しだけど、食べられたみだいな。

左手に持っているガラスの器には、摩り下ろされた林檎があと三分の二ほど残されている。

桜音はさきほどよりは、大分良さそうだ。

さっきはしゃべるのもだるそうだったからな。

おそらく、薬のおかげで熱が下がってきているからだろう。

今では、熱が37.5度まで下がっている。

涼の話では薬が切れるとまた熱が上がってくるらしく、一時的なものにしかすぎないそうだ。

「じゃあ、林檎も食べたしまた少し休もう。後で夕食持ってくるから」

「うん」

桜音は俺の言うとおり、ベットへと横になった。

寒くないのかな？毛布とか何か増やした方がいいか？

桜音が寒くないように布団をなおしながら、もう一枚毛布とか何か増やした方がいいか考えてると、「海」と桜音に名前を呼ばれた。

「どうした？もしかして寒いのか？寒かったら毛布増やそうか？」

「ううん、違うの。あのね、指どうしたのかなって」

桜音の視線は、俺の絆創膏だらけの指。

「これは」

思わず言葉に詰まった。

林檎剥いて指切ったなんてカッコ悪すぎる。

きつと涼ならこんな傷だらけになったりはしないだろう。

俺の頭の中には、また涼に対しての敗北感に占められ始めた。

「海」

俯く俺の顔に、温かいぬくもりが触れ、視界が桜音に切り替えられる。

頬に感じたのは、いつもと違い少し熱めの桜音の手。

「林檎の皮剥いてくれたの海なんでしょ？大丈夫？傷痛まない？ごめんね、私が風邪引いちゃったから海にいろいる迷惑かけちゃって……」

「なんで桜音が謝るんだ？謝るのは俺の方だ、俺は桜音のために何かしたい。でも俺、桜音に何もしてやれてないんだ。誰かの看病するの初めてだし、桜音の好みもわかんなくて……涼と違って足でまといにしかなってないんだ」

桜音が心配で早退してきたのに、俺は何もしてない。

一緒に暮らしているのに毛布などの場所も分からず、ほとんど涼が全部やってしまい、俺がやったのは買い物と林檎の皮むきだけ。

その皮むきすらまともに出ていない。

使えない上に、その上怪我の心配までされてしまうなんて申し訳なさすぎる。

「うっん、そんな事ない。海はちゃんとしてくれてるよ。だって怪我しながらも、一生懸命林檎だって剥いてくれたでしょ？だから嬉しい。ありがとう」

ありがとう。

その言葉がなぜかんと胸に降りて来る。

俺は桜音のありがとうを聞いて、さっきまでの沈んでた気分が嘘み
たいに晴れてきた。

それは惚れた弱みのせいなのか、俺が単純だからなのか、それとも
両方なのかはわからない。

ほんとすごい、桜音。

今まで当たり前のように使っていた「ただいま」も「おかえりなさい」
「なんか、桜音が関わると色づく。」

「なあ、桜音。早く元気になって、イチヤツこうな」

「うんっ!!……っつて、えっ!?!」

「うんって言ったな。言ったからには、有言実行だぞ?桜音が元気
になってくれるように、俺がちゃんと誠心誠意看病するからな」

早く元気な桜音になって、二人で些細な事で笑いあいたい。

だから、早く元気になってくれ。桜音。

番外編 甘く 優しく 蕩けるように 1 side みく(前書き)

これもブログからの転載。

最終章の十五・十六話でみくが、ちらつと話してた内容です。

みくが海の好きな人を知ったきっかけ。

暑い。暑すぎる。

日差しを手で遮りながら空を見上げると、雲一つない晴天だった。さつき校舎を出たばかりなのに、もう制服のワイシャツが肌に張り付き、気持ち悪い。

こんな暑い中、アタシが外に行く理由はただ一つ。

アイスだ。

アイスが無性に食いたくなって、今から学校を抜けて買いに行ってくるのだ。

この中庭を抜けて、東棟に向かう。

そこから一番奥の空き教室に向かい、裏門を出ればコンビニはすぐそこだ。

あゝ、でも自販機のジュースで我慢しときゃよかったかも。

あまりの暑さに外に出た事を後悔した時、ふいに視界に人の姿をとらえ足を止める。

あれは

アタシの視線は中庭の中央にある大きな桜の木の下にいる人物に釘づけになる。

そこには女子生徒をお姫様抱っこしている男子生徒の姿があった。

「あ。あれ、在原海じゃん」

そいつはうちの学校で千里に並ぶ人気を誇っている人物で、家は会社経営、容姿端麗、頭脳明晰 他人が欲しいものを全部持ってい

るようなやつ。

その為他の連中から王子だなんだって騒がれているけど、アタシにはどうでもいい。っつか、むしろ気に食わない。

なぜなら、新聞部主催の人気投票で一位を取っているから。

大体、千里を差し置いてアイツが一位ってなんなのよ!!

それに

時折妙な視線感じるんだよね。

いつもじゃないんだけどさ……

どれどれ、相手の女の顔でも拝んで行くか。

新聞部に提供してスクープになれば、人気投票ランキング落ちるかもしれないし。

そんな軽い気持ちで相手の女を確認するために、相手の女に視線を移す。

え。

「……桜音」

咳くアタシの声か風にかき消されてしまう。

たしかに中庭に行くって言うてた。

けど、なんで？

この二人の関係って一体なに？

わけがわからず茫然と立ち尽くしていると、「佐々木」と呼ばれ我に返った。

呼ばれた方を見ると、在原海がこっちを見ていた。

「そこではーっと突っ立ってるのなら、悪いが飲み物買ってきてくれないか？できれば、スポーツドリンク」

「はあ？」

ただでさえ理解出来ない状態なのに、なぜこいつにパシリにされなきゃならないんだ!？」

「つか、ぼーっと突っ立っているのならって何だよ。」

「なんか、アタシが暇そうじゃんか。」

「俺のズボンのポケットから、財布取ってそれで買ってきて欲しい。佐々木の物も買ってきていいから」

「ふざけんな。なんで、アタシがあんたのパシリにされなきゃならないのよ？」

「俺の分じゃない。桜音の分だ」

「は？桜音？」

「ますます理解不能。」

「ああ。大分汗かいてるから、起きた時きつと喉乾いていると思うから」

「たしかに、桜音の額や鼻には大粒の汗を見る事が出来た。」

「まさか桜音、この炎天下の中寝てたんじゃないでしょうね!？」

「……寝てた」

「在原の返答に思わず頭を抱えた。」

「きつと桜音の事だ。」

「日向ぼっこしてたら睡魔が襲ってきてそのまま寝ちゃったんだろう。ほんとに桜音は一度寝ると起きないんだから。」

「あゝ。外で寝るなどか注意しておけばよかったかも。」

「この暑さの中、外で寝てたら熱射病にでもなっちゃっうじゃんか。」

「この炎天下の中寝てて、熱中症にでもなつて脱水症状でも起きたら大変だ。だから、写真部の部室で寝かせる事にする。俺が運んでいる間、悪いが佐々木、飲み物を買ってきてくれないか？」

「……わかった」

桜音の分じゃしょうがない。

アタシの分も買っていていいって言っし。

アタシは在原から財布を受け取ると、コンビニへと向かった。

甘く 優しく 蕩けるように2

マジかよ。

写真部のドアを開けて最初に視界に入ったのは、ソファで眠る桜音を床に座りながら愛しそうに見つめている在原海だった。

時折桜音の頭や頬を撫でながら、甘ったるい空気を醸し出している。

「あんた、桜音の事好きなの？」

思わず出た言葉に在原より先に答えたのは、イスに座っている金髪バカ猿だった。

「は？お前、あれ見てわかんねえの？」

イスに座っている金髪バカ猿 日下部が携帯片手にこっちを見ながら言った。

やつの机の上には、昼御飯の途中だったのだろうかパンや紙パックの飲み物が乗っている。

「……わかるわよ。ただの確認だっつもの」

あんなの見てわかんない人間なんていない。

蕩けそうな表情で桜音を見つめているそいつは、人がいるにも構わず桜音の事を好きすぎたしょうがないオーラを全開にしているから。普段無表情に近く、愛想の欠片すら持ってないような奴なのに。

「買って来たんだけど？」

「ああ、ありがとう」

名残惜しそうに桜音の頬から手を離すと、在原はこっちに来た。

そしてアタシから財布とコンビニの袋を預かる。

その表情はさつき桜音に向けていたものとは違い、すっかりいつも

のクールな王子様に戻っていた。
別にこいつの事はどうでもいい。
いや、むしろ気に食わない。

だが、こうも差をつけられるとムカつく。

「しかし、まさかあんたが片思い中だとはね〜」

「……………なんで片思いだっと思って思うんだ。付き合ってるとか考えないのか？」

決め付けた言い方に少しムツときたのか、在原の声色がほんの少し変わった。

「思うわけ無いじゃん」

そりゃあ、ここだけの話ちらつとは思ったわよ。

でもアタシは桜音にそんな事聞いてないもの。

まあ仮にここで在原が肯定してたら、今すぐ桜音叩き起こして問い詰めてやってたけどな。

「ねえ、桜音は気付いてるの？」

「……………」

その反応だと気づかれてないな。

やっぱ、桜音じゃ無理か〜。

そりゃあ、そうだよね。桜音鈍いし、アタシも気づかないぐらいわからなかったし。

「海。時間大丈夫なのか？」

日下部の視線が黒板の上に向かう。

そこには壁に掛けられている時計があった。

「もう少しなら平気だ」

王子はそう言つと、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

「佐々木、携帯出せ」

「は？なんでよ。桜音の番号なら教ええないから」

「それは交換しているから知っている。とにかく出せ。これからバスケ部の集まりがあるから時間がないんだ」

「ちよつと！あんた達番号交換してんの！？」

「してる。いいから、け」

「良いわけ無いだろうが！！」

こいつらいつの間。

学校でそんな様子見た事ないっつうの。

でも、あきらかに何かあるはず。

ちよつと桜音。アタシ何も聞いてないんだけど！！

未だにすやすや寝ている桜音が恨めしくなり、睨んだ。

すると桜音はごろりと寝がえりをうち、こちらに背中を向けた。

「俺と桜音の事は、理由があつて言えない」

「何よ理由って？」

「俺からは言えない」

「もつたいぶらないで言えよ」

「そうやすやすと言えない事なんだよ。だから桜音も佐々木に言えないんだと思う」

「……わかった」

今ここで無理やり聞きだしてもこいつは絶対に答ええないと思う。

桜音なら問い詰めれば教えてくれるかもしれないけど、できれば自分から言っつてほしい。

仕方ない。桜音が自分から言っつてくれるのを待つか。

「それで、佐々木。悪いがほんとに時間がないんだ。赤外線使えるよな？俺に送っつてくれ。後でメールで俺のアドレスと携帯番号送るから」

「あんたの番号とか必要ないんだけど」

「万が一、桜音に何かあった時のためだ。そうすれば、真っ先に俺に知らせられるだろ？一応防犯ブザー持たせているが何が起こるかわからないからな」

「……あれお前が持たせたのか」

桜音の通学カバンには、一見キーホルダーにしか見えないキャラクター物の防犯ブザーがつけられている。

その他にも私服の時に持つカバンには、バックチャームと一緒にハート型の防犯ブザーをつけるなど桜音は防犯ブザーの使い分けをしていた。

なんでも、「危ないからって着けられたの。外すと怒られちゃうんだよね……」って言ってた。

あれ、この王子の事言ってたのか!!

甘く 優しく 蕩けるように3

あいつ何様のつもりだったの!!

アイスを貪りながら、アタシはさっきあった事に対してムカついていた。

普通時間無いからって、無理やり人の携帯奪って赤外線通信するか!?

こっちは交換したいなんて一言も言っただけなのに。

あの王子は無理やりの赤外線通信を終えると、足早にバスケのミーティングへと向かって行った。

時間がないって言ってたわりには、ちゃんと桜音の寝顔を見てから行く所がムカつく。

「そんなに一気に食うと痛くなるぞ?」

「うるさ…… 痛っ」

頭を押さえて、その痛みが遠のくのを待った。

どれもこれも在元のせいだ。

「だから言ったじゃねえか、あいつの事はしょうがねえと思って諦めるって。逢月が関わるとあんな感じになっちまうんだ。なんせ、初恋真っ只中だから」

「は?」

日下部の言葉に、スプーンが止まる。

「誰も思いもしねえよな。あの在原海が今まで恋した事なかったなんてよ。この天然女の事好きになるまで、女きたことなかったし」あの王子の初恋が桜音……?」

たしかにカレカノって言ってもお互い好き同士で付き合っている奴

らばかりじゃない。

アタシも千里の事を忘れてたくて違う奴と付き合った事あるし。

「まったく海といい水谷と藤原といい、逢月の何処かいいんだか…」

「桜音可愛いじゃん。女の子らしくてふわふわした感じで。ピュアで、ついこつちが守ってやりたくなるもん。だから、涼も千里も惹かれたんじゃない？」

桜音には悪いけど、羨ましいを通り越して妬ましく思う時もあった。アタシじゃ桜音みたいになれないから。

もし、アタシがこんな風なら千里は好きになってくれたかもしれないって思ってしまった。

「そうか？俺はお前みたいな女の方がいいけどな」

「はあ!？」

やばい。一瞬ときめきかけた。

不覚だ。日下部なんかときめくなんて!!

「何赤くなってるんだよ。あ、お前もしかして勘違いしてるのか？悪いけど、俺は部長命だから」

「黙れ、金髪猿」

こいつが同じ写真部の部長が好きなら事ぐらい知ってる。

犬みたいにまとわりついて追いかけているのは、もう日常の光景だ。

「逢月だって、お前の方がいいって言っぞ？こいつは、お前に憧れてんだからな」

「桜音が？嘘でしょ。アタシ言われた事ないもん」

「マジだって。起きたら聞いてみるよ」

「んなこと聞けるか」

私がそう言つと、日下部は「しょうがねえな」と言つて口を開く。

「お前のさばさばした性格も出るところ出た体も、お前が嫌がついてその身長だつて、逢月にとってはモデルみたいで羨ましいんだとこれが……？」

私にとっては、身長はコンプレックスだ。

174？の私は、155？の桜音が羨ましいってずっと言ってきた。

「もし自分が男なら、絶対みくの事彼女にするって言うぐらいだぞ？」

「桜音が男ならね〜」

桜音の男バージョンなんて全然想像出来ず、思わず笑つてしまう。

「人つてそんなもんなのかしんねえな。自分の事はよく見えてなくて、他人の事はよく見える」

「たしかにそうかもね」

「まあ、でも良かったな。お前、女で。海の嫉妬それぐらいで済むじゃねえか」

「は？嫉妬？」

「……もしかしてお前も鈍いのか？」

「鈍いなんて言葉、生まれてから一度も言われた事ないっつうの」
そう言つと、日下部はため息をはいた。

「いいか、逢月がそう言つてるぐらいお前の事が好きなんだぞ？」

「あんだ、アタシの性別わかってんの？」

「あいつには、んな事関係ねえ。お前、突き刺さるような視線とか感じねえか？」

「あ〜。そう言えば」

アタシには身に覚えがある。

時折感じる妙な視線。

その視線に気づき振り返ると、必ず在原海がいた。
あいつ、人の事睨むようにしてこっち見てたっけ。

……ん？

「ちよい待て！！まさかあれ嫉妬されてたからなの！？アタシ女な
んだけど!？」

そう言えば妙な視線を感じる時、いつも桜音が傍にいた。

「だから、男とか女とか関係ねえって言ってるだろうが」

「まさかあいつそこまで器小さい男だなんて……」

桜音は大丈夫なの？あいつかなり嫉妬心強いじゃん。

しかも器小さいし。

急に桜音の事が心配になり、自然と視線は桜音に向く。

人の心配をよそに、起きる様子もなくまだすやすや眠っている。

「大丈夫だ。海は、逢月の傷つくような事はしない。飴玉に砂糖と
蜂蜜つけたぐらい甘く溺愛してるからな」

「何その胸やけしそうな例え……」

「それぐらい甘いつて事だ。だが、それにも逢月はまったく気付か
ない。たまに海が可哀想に思えてくる」

「桜音だからね」

そうやすやすと桜音のことを落として貰っては困る。

だって桜音が王子の事を好きになったら両思いになってしまう。

そんな事になったら、アタシが桜音と遊べなくなるじゃん？

あの独占欲の塊のことだ、絶対桜音の事を離さないはずだもん。

そんな風に思っていたアタシだったが、まさかこの時すでに桜音が
王子の事を好きになっていたなんてしてるわけもなかった。
私はその事を知るの、そう遠くない夏休みの事になる。

番外編 無防備誘惑 side 日下部(前書き)

ブログ転載。

しっかし、この炎天下の中良く走れんな。
外は相変わらず雨の気配すらなく、ひらすら太陽が照らし続けている。

俺はそんな外とは対照的にクーラーのきいた教室で、ソーダーアイ
スに齧りつきながら、グラウンドで走るサッカー部や陸上部を見て
いた。

すると、後ろからため息を吐くのが聞こえてきた。

珍しいな。あいつがため息なんて。

振り返ると海の奴が机に頭を抱え、うな垂れているのが見えた。

「何で夏なんてあるんだよ」

そう吐き捨てると、またため息を吐きだす。

珍しく愚痴っぽく吐き出したあいつのその言葉には、たしかに同調
する。

俺は暑いのは嫌いだか、クーラーのような人工的な空気もあまり好
きではない。

その為、一番過ごしやすい春や秋が一番好いている。

「んだよ、海。夏バテか？」

「違う。桜音が……」

「逢月？」

「ああ。ここんところ暑かっただろ？桜音が家でショートパンツと
かキヤミソールとか履くんだよ……。しかも風呂あがり。桜音は俺
が男だって忘れてんのか？」
それか。

まあたしかに、生き地獄だよな。

自分の好きな女がそんな格好でウロウロしてて、手出せないなんてよ。

「まったく、逢月ももうちょっと気いつける。どんだけ鈍いんだよ。」

「このままだと、誘惑に負けそうだ」

「んなら、夏の間だけ実家帰れよ」

「そんな事したら、桜音の無防備な姿が見れないだろ！！無防備な桜音も可愛いんだよ。それに、一人暮らしなんて桜音には危険だ」
「たしかに危ないかもしれねえけど、一人暮らしをしている女なんていっぱいいるぞ。」

それにこいつが逢月の家に引っ越した時、セキュリティ会社と契約して機械とか取り付けて貰ってるはずだ。

なんでも自分が留守中の、逢月が心配だからって。

「んじゃあよ、見慣れればいんじゃない？」

「は？見慣れる？」

「ああ。俺が今度逢月の水着姿写真撮って来てやるから、もうちょっと待ってるって」

「キヤミソールやショートパンツより露出が多い水着姿を見慣れれば、そんな気にならなくなるんじゃないかねえ？」

「水着の方が露出が多いしな。」

「さすが、俺。良いアイデアだ。」

「おい」

「は？」

「ナイスなアイデアなのに、海の声は低く冷たかった。」

「なんでお前が桜音の水着が撮れるんだ？」

「んなもん、夏休みに一緒に海に遊びに…… あ」

やべえ。逢月に口止めしてたくせに、自分からしゃべっちゃまった！！
おそろおそろ海を伺うと、案の定眉を上げ目を吊り上げていた。
こいつは逢月の事に関する、器が小せえ。
そのため、しばしば嫉妬している。

海に行くのは俺だけじゃねえのに！！
藤原だって水谷だって佐々木だっているっの。
それに俺は逢月に誘われた方なんだ。

「ちよつと、話しあおう。っつか、今回は見逃せ。代わりに、逢月
から抱きつかれる方法教えてやるから！！」

「……桜音から抱きつかれる方法だと？」
海は怪訝そうな顔でこちらを見ている。
よし、話が逸れたぞ。

「定番かもしんねえけど。逢月よ、ホラーがダメなんだよ。そのく
せ怖いもの見たさで、そういうテレビや映画を見ちまうんだ。ホ
ラー映画でも借りて見てみれば、怖がってくっついてくるというわ
けだ」

許せ、逢月。
元はといえば、お前が原因だ。

「桜音が、怖がってしがみ付いてくる……ありだな」
その後、海がレンタルショップに行ったのは言うまでもない。

番外編 きっかけは、雨（前書き）

ブログから転載。

番外編 きつかけは、雨

自分の靴音に交じって遠雷の音が耳に届く。

降ってこないと良いんだけどなあ。

窓に近づき、雲を眺める。

どんよりと曇っていて、今にも降り出しそうだ。

せめて駅に着くまで降らないでくれると助かるんだが。

そう思いながら、足早に昇降口へとむかった。

降ってきたか……

俺が昇降口について見えた外の景色は、地面に叩きつけているような雨だった。

雲を見る限り、止むのを待つという選択が出来ない。

弱くなったら駅まで走るか。

そう思いしばらく雲行きを見守る事にした俺は、せっかく履き変えた外履きを内履きに履きかえるべく、また足を元来た道に戻しかける。

その時だった。

「海」と声をかけられたのは。

その方向を見ると、左側の数メートル離れた所に涼がいた。

普通ならすぐにいつものように何か返事を返すはずだが、この時の俺は返事をする事が出来なかった。

なぜなら、涼の隣りに桜音がいたからだ。

涼の体に隠れるようにしていた桜音は体を少し前方にずらし、こちらを見ている。

桜音っ！！

いつもは降ろしている髪を今日はお団子にしている。

お団子姿も可愛い。

桜音の姿に、つい表情筋が緩んでしまつのを必死に抑えた。

「髪型いつもと違うな」とか声かけたら変か？

それとも、「親父がいつも世話になつている」とかか？

俺は桜音と話した事がない。

これまでも何度も話しかけようとしたんだが、なかなか話をかける事が出来ないでいた。

ヘタレと言われてもしょうがないぐらい、桜音を前にすると駄目になつてしまつ。

「海。もしかして傘ないのか？」

「あ、ああ……」

涼が近づいてくる中、乾いた返事が自分の口から洩れる。

俺の視界には相変わらず桜音しか入ってない。

一方の桜音はというと、こちらを気にすることなく雨の様子を伺っているようだった。

「傘貸すよ」

涼は傘を差し出してきている。

涼の申し出はありがたい。

「でもお前はどつするんだ？この雨だぞ」

「ん？桜音の傘に入れて貰うよ」

「いや、いい」

俺は、傘を涼につき返す。

そんなことしたら、涼が桜音とあいあい傘になるじゃないか！！
しかも桜音の傘は男物と違い、女物だ。

そのため作りが小さいからますます密接してしまっ。

「この雨だと、やむの待つのはキツイと思うぞ。まさか、濡れて帰るのか？」

「俺の事は気にしなくていい。待たせてるんだろ？行けよ」

「……わかった」

涼は苦笑いを浮かべると、桜音の元へと向かって行った。

「じゃあな、海。また明日」

涼がこつちを見ながら手を振ると、桜音が小さく会釈した。たったそれだけなのに、俺にとってはささやかな進歩だ。

どうするかな……

離れてはじめた桜音と涼の後ろ姿見つめながら、これからどうやって帰るかを考えていると、急に桜音が振り返って俺を見た。

「！？」

なんだ？どうしたんだ？

心臓がいきなり早くなり始める。

涼に何か話しかけると、こつちに向かってきた。

やばい。桜音が来る！！

いや、ただ忘れ物を取りに来ただけかもしれない。

だが、俺に用事があるって可能性もある。

どうする俺！？

「あ、あのっ！！」

カラフルなドットに傘を持った桜音が、俺の元へと近づいてくる。そんな桜音に俺は動揺を隠せないでいた。

「な、なに？」

「傘、お貸しします。やっぱり、この雨で濡れちゃうと風邪ひいちゃうから」

「ありがとう。でも、迎えの車呼んだから傘もういいんだ」
呼んでなかったが、そんな事したら桜音が涼の傘に入る事になってしまふからとっさに言ってしまった。

「そうなんですか？ だったら良かった……じゃあ、さようなら」
桜音は俺に小さく手を振ると、少し離れた場所にいる涼の元へと向かって行った。

桜音に話しかけられた！！

もう人目をはばからず、嬉しすぎて叫びたかった。

桜音にとっては、こんな事忘れてしまふような事かもしれない。
でも、俺にとっては忘れられない出来ごとの一つになる。

番外編 練習しましょう(前書き)

久しぶりの合鍵です(^ | ^)

番外編 練習しましょう

「……え」

言葉を失った私の目の前でにこにこ営業スマイルを浮かべているのは、赤い制服を着ている係のお姉さん。

なぜ私が固まらなければならなかったのかは、それはお姉さんによってさつき耳に届いた言葉のせい。

彼女はここ、臨海公園にある大観覧車の係員さん。

私と海は学校帰りのデートで、今日はここに遊びに来ているのだ。

想像もしていなかった言葉に、私は思考を一時中断させられている中、お姉さんもお仕事だと割り切っているのか、同じ言葉をまた繰り返し返した。

「本日はカップルデーとなっております、カップルの皆さまに対して割引が適用されます。もちろん、お子様連れなどの家族にも適用されていますよ。頬にキスをされますと観覧車の50円の割引と実にお得なんです。いかがですか？」

「50円も割引してくれるのは正直嬉しい。でもこんな公共の場で！？企画したの誰っ！？」

戸惑う私の隣で海は「良いイベントだな」と呟く。

私はそんな海を睨むが、何が嬉しいのか海は私を見て顔を緩まると、私と手を繋いだままの状態で軽く屈んだ。

「えっ！？ちよつと、まさかするの！？」

「もちろん。ほら桜音早くキスして」

そう急かされても……

たしかにお姉さんもお仕事って割り切ってると思うし、する場所もほっぺだし。

それに海と付き合ったのは夏。

それから大分月日が経っているから、私もそれなりに経験を積み頼りにキスぐらい出来る　はずがないっ！！

海と私のお付き合いは海が私に合わせてくれているため、かなりのスローテンポ。

そのため自分から海にキスしたのなんて、海がみくと日下部君に追試対策として勉強を教えたご褒美としてねだられてやった2・3回ぐらいだもん。しかも頼だし。

うう……どうしよう。いけるかな？

羞恥心と闘っている、「すみません。通常料金で高校生二人お願います」という海の声が隣から聞こえてきた。海はそう言つと、私の手を離すと財布から1000円を取り出し置く。

「……いいの？しなくて」

てつきりしなきゃいけないと思つて身構えていた私は、どこか拍子抜けした。

「ん？桜音こついうの苦手だろ？無理強いはしないよ」

「あつ、お金私が払うよ」

だつて海には毎回払つてもらっているもん。

だから毎回奢つて貰つてばかりじゃ悪いから、飲み物代なんかは私が持つようにさせて貰っている。

「いいよ」

「でもっ！ー！」

「あの。本当に宜しいんですか？」

私の声を遮るように耳に届いた係員のお姉さんの声に、私も海も視

線をそちらに移す。

「別に彼女さんからじゃなくてもいいんですよ？彼氏さんからも
お、お姉さん……」

そうにつきり微笑まないで下さい。

出来るならこのまま完結させたかったのにっ！

だってそんな事言ったら海は

「ああ。それなら」

海はそう言つと、私の頬にキスを落としました。

うう……恥ずかしいよ……

「はい。では割引適用させて頂きますね」

早く観覧車の中に入りたい。

羞恥心から顔が火照っているのを隠すため、私は俯いた。

これ、いつになったら慣れるんだろう。

* * *

「可愛いな。まだ顔が真っ赤だぞ」

「だって慣れないんだもん……」

熱くなつた頬を両手で押さえる私を海は顔を緩めて見つめている。

そんな顔をされると、ますます赤くなつちゃうよ。

私は視線に耐えられなくなり、視線を観覧車の窓から見える景色へと移す。

すると町並みが小さく見え、さっきまで私達が買いたしていたあんなに大きいショッピングモールも小さく見えていた。

「観覧車って逃げ場ないよな」

「え？」

何の脈絡もないその言葉に視線をまた隣りに座る海に向けると、口角を上げた海と目があう。

……あ。なんだろう。今ものすごく嫌な予感がする。

なるべく距離を置こうと、空いている向かえの席に移動しようとしたけど、動きを読まれていたのか、すでに海の腕の中にいた。

「じゃあ、慣れる練習してみようか」

「えっ！？ちよっ！！ええっ！？」

「大丈夫。こんなに高いと外から見れないし、それにほら前後のゴンドラに乗っているカップルも自分達の世界にいるから問題ない。だからいっぱいキス出来るぞ」

「お、降ろしてっ！！」

そんな私のささいな叫びは届くはずもなく、結局私は練習をせざるを得なかった。

番外編 もう一つの合鍵をキミに 1 (前書き)

ちよつとデータを書き換えて番外編です。

短期集中連載というか、もう書きあげているので見直ししてアップしていくので、短期集中更新予定。

番外編 もう一つの合鍵をキミに 1

「自分で歩けるよっ!!」
廊下をすれ違ふ生徒達が、私ともう一人の生徒に視線を集中させている。

それも当然。

だって私は日下部君によって米俵のように担がれているんだから。

も〜、なんなんだろう。

せつかく涼から貰ったクッキー食べようと思ってたのに〜っ!!

私は諦めを含み、右手に握られているものに視線を向けた。

それは水色と白のボーダーのリボンだ。

今日は私の誕生日。

そのため、友達から誕生日プレゼントを貰った。

その中の一つに、涼から貰ったチョコチップクッキーがある。

この右手に握られているこれが、そのラッピングされていたリボン。

涼ってクッキー作るのが、すっごく上手なの。

特にチョコチップクッキー!!

「プレゼント何が欲しい?」って聞かれた時にすぐに「チョコチップクッキー!!」って毎年リクエストするぐらい。

だから食べるのすっごく楽しみにしていたの。

それなのに、さっそく食べようとラッピングを解いた瞬間に、突然現れた乱入者のせいで中途半端に中断させられ、肝心のクッキーは机の上に放置されたまま。

乱入者の日下部君は、私の意思など関係なく、私を教室から連れだしたのだ。

もうそつからはあつと言つ間。
私は担がれて今に至る。

「ねえ、降ろしてつてば!!」

「うるせえな。耳元でガタガタ騒ぐんじやねえよ!!」

……え。なんで怒られなきゃならないの？

なぜか私は怒鳴られてしまい、口を結んだ。

だって日下部君見た目もそうだけど、声的に怒ると迫力あるんだもん。

*

*

何、この空気？

教室のドアから中を覗くと、みんなの様子が違っていた。

他の教室からは朝の登校時間ともあつてか、賑やかな笑い声が聞こえてくる。

それなのに、この教室はしんと静まり返っている。

でもそんな様子の原因も、今ここにきたばかりだけど、すぐにわかった。

それは窓側の一番後ろの席に座っている人。

頬づえをつき窓から校舎の方を見ているため顔は見えないけど、醸し出している雰囲気と周りの生徒の視線などから原因は明らかに海だという事がわかる。

「海、機嫌悪いの?」

「わかってるんだつたら、とつとで行け」

「日下部君の方が海と付き合い長いんだから、海の機嫌なおるよう

な事知っているとと思うよ……?」

「だからこうしてお前呼んで機嫌とろつとしているんだろ。ほら、早く行け。あの王子の頭に花咲かせてこの教室を平穩にしる」

「えっ!?!?急にそんな事言われて…… って、ちよつと!?!」
とんと日下部君に背中を押され、私は教室内に足を踏み入れてしま
う。

いいのかなあ?他クラスに勝手に入って。
そう思いながらも、私の足は進んでいく。

「海」

海の傍に行きそう名前を呼ぶと、海はすぐにはじかれた様に私の方
を見た。

最初大きく目を見開いてたんだけど、やがて少し目じりを下げ始め
た。

あっ、少し戻ったかも。

海の表情がさつきより、緩んだように感じたのでそう思った。

海は私の名を呼ぶとトントンと自分の太ももを右手で軽く叩き、腕
を広げて自分の所に誘う。

えっ、もしかして座れって事っ!?!?

ここ教室なんですけど!?!?

ぶんぶん横に首を振ってただんど、「逢月さん、座ってやって
くれよ!?!」と教室中から声が私に集中する。

各自言い回しは違うが、みんなクラスマッチの時並みに団結力を誇
っていた。

それらの懇願は、私に拒否権を与えてくれないぐらいのもの。

何、このクラス……

「し、失礼します」

完全に私に反する空気が流れている。

そんな中逆らえるはずがない私は、大人しく言われるがまま海の上の膝の上に横向きに座った。

すると落ちないように海の腕が私の体に絡まり引き寄せられ、お互いの体が密接してしまう。

ちよつと！！朝から！？しかも、ここ教室っ！！

「もういい！？もういい！？」

あまりの恥ずかしさに、今すぐ自分の教室へ帰りたい。

だってそうでしょ？クラス全員の視線が集中してるんだよ！？

だが、首を振り拘束を全然といてくれない海にそれが出来ない。周りも周りで「良かったな、在原」って言ってるし。

ちよつとおかしくない？この教室。

あ。でも機嫌は直ってるみたい。

海は私の首すじ辺りに顔をうずめ、ぎゅっと抱きしめている。

わずかに見えるその様子から、その表情はいつもの海みたいと思う。

「逢月さん、ありがとう。これで海の機嫌良くなるよ」

「ほんと。助かったよ、逢月さん」

海のクラスメイトと思われる男の子達に声をかけられるけど、お礼を言われる理由が見つからない。

っていうか、助かったって？

その疑問は、同じ部活のあんなちゃん言葉が解決してくれた。

「元はと言えば、あんだ達がクッキー食べたのが悪いんでしょ？せっかく在原くんが、桜音の誕生日に手作りクッキー作ったのに」

腰に手をあて、あんなちゃんはため息を吐きながら、さつき私にお礼を言った男の子達を見ている。

「いや、だってさ、まさか海が作るなんて思うわけないじゃん!!」

「そうそう。それに海の机の上に置いてあるものや、ゲタ箱に入っている手作り系は食べていいって暗黙の了解があるしさ」

あゝ。もしかしてあの話かも。

私には思い当たる事があった。

海が誰にも手作りは貰わないって話は有名。

付き合う前から知ってたけど、その事かもしれない。

渡されたら断るし、勝手に机の上に置かれたり、ゲタ箱に入っているやつは自由に食べていいんだって。

みんなそれをわかってるけど、もしかして食べてくれるかもっていう想いがあるので置いていく。

その気持ちは私には痛いほどわかる。

気まぐれで食べてくれるかもしれないって思うんだよね。

海に片思い中に机の上に置いて貰ったことがあるもん。

「でも逢月さん、食べなくて正解だったって。あれ、すっげえマズイから」

「マズイって何だ！旨いに決まってるだろ！！」

今までずっと黙っていた海は、眉をあげながら口を開く。

「いや。お前あれ旨いって感じるなんて、味覚やばいって……。なあ、田中」

「ああ。ちよつとあれは酷い」

「それは、たまたまお前らの味覚に合わないだけだろ。ちゃんと旨いって言ったぞ？日下部は」

みんなの視線は、こっそり逃げようとしている日下部君の背中に注がれる。

あゝ。日下部君お菓子も作れるもんね。

見た目とは違って料理もするし。

「お前つー！！」

逃げる日下部君に対して、海の怒鳴り声が降り注ぐ。

日下部君はそれに、大きい背中をビクつかせたかと思うと、ゆっくりとこちらを振り向いた。

「だつてしょうがないだろ、何回教えてもお前上達しなかったじゃんかよ。しかも、失敗したやつ俺に寄こすし！！大体どうしたらあんなに不味く作れるのか、俺には理解出来ない」

「そんなにマズイ物を、俺の桜音に食わせようとしたのか！？」

「食わせようとしたのは、お前だろ。大体味見ぐらい自分でしろつての。それに、元々はお前が作った物だろうが!!」

とりあえず、海のクッキーがおいしくないって事はわかった。

一見完璧な海だけど、料理関係は全く駄目。

海、お菓子作りも苦手だったんだ。

「そもそも水谷に張り合ってクッキーなんて作るから悪いんじゃないか!!」

「俺のせいか!？」

「他に誰がいるんだっつうの。無難にお前が三ヶ月かけて選んだプレゼントだけにしておけばいいんだよ!!それなのに、オプシオンでクッキーなんてつけるから駄目なんだろ!!お前自分でも料理も菓子作りも壊滅的に駄目な事知ってるくせに」

「……だって桜音が、毎年チョコチップクッキーを美味しいうて食べているから。だから俺もチョコチップクッキーを作ったんだ」

たしかに私が涼に毎年プレゼントと一緒に貰うのは、チョコチップクッキー。

海、もしかして涼に聞いたのかな?なんてことを思っていると、「えっ」という声が耳に入っていた。

「あれチョコチップクッキーだったのか!？」

田中君達の重なった叫びに対し、海は鋭い視線で突き刺す。

すると彼らは震えあがり、日下部君の陰に隠れ「逢月さんっ!!」と私に助けを求めてきた。

海ってば、一体どんなクッキーを……？
でも、どんなのでも海が私の為に作ってくれたのなら嬉しいって思
う。

それが苦手なお菓子作りならなおさらだ。

なんか悪戦苦闘する海を想像すると、可愛いかも。

だって、絶対にポウルとかひっくり返してそうだもん。

お料理手伝ってくれる時もそうだったんだよね。

なんでも器用にこなすのに。

そう思ってたなら、思わず笑っちゃった。

「桜音？」

「ごめん。なんか、海のそういうところも好きだなんて」

そう言っただけにもたれかかり海を見上げると、ぽかんとしていた海
の表情がみるみるうちに真っ赤に染め上げられていく。

あれ？耳まで真っ赤だ〜と思ったなら、なんか震え始めちゃっている。
寒いのかな……？

海の不自然な様子に問いかける間もなく、私は強く抱きしめられた
かと思うと体がぎゅーに宙に浮くような感覚に包まれた。

どうやら私は海に抱きかかえられてしまったみたい。

私はそのまま海に教室の外へと連れて行かれそうになってしまった。

「おい、海。逢月は授業までは戻せよ」

手を振り見送る日下部君がものすごく速く小さくなっていく。

そんな光景を見ながら、私はただ何処に行くんだろ？と他人事の
ように思っていた。

* * *

空は晴れ渡り、時折温かな春の風が吹き抜けている。
屋上だから何の障害もないので、その風をよりよく感じるのかもし
れない。

このまま眠ってしまいたくなるようなそんな日差しの中、私はただ、
自分を抱きしめている人に縋りついていた。

こういう事だったのか。そう気づいた時には遅い。
私は学習能力がないのか、いつも後で気づく。

「が、学校ではキス禁止って言ったでしょ!!」

「ん？」

海は目を細めて笑いながら、私の頭を撫でる。
うう。またそうやって弱点を……

「誕生日おめでとう。桜音」

そんな耳元での海のささやきに、体温が一気に上昇してしまった。
駄目なのに!! そう思っても勝手に体が反応してしまう。
だって赤くなったら、なかなか戻らないもん。

これから数分後に授業だから、顔赤いとみくに絶対に突っ込まれち
やうじゃんかつ!!

「あ、ありがとう」

「学校早く終わって欲しいな。そしたら、桜音とゆっくり出来るんだが……」

「まだ、1限目すら始まってないよ？」

「そうだったな」

「そうだよ」

二人して額をくっつけクスクス笑いあった。

海と付き合って、本当に些細な事にすら笑うようになっていった気がする。

こうして海と一緒に時間を過ごせるのはどれくらいなんだろう？って時々頭によぎり、不安になっちゃう。

海はお兄ちゃんに結婚とか言ってくれたけど、この先いっぱいいるんな人と出会う事になるはずだ。

綺麗な人だっているし、家柄だってちゃんとした人もいるはず。

海がそっちの人を好きになることだってあるから。

もう一つの合鍵をキミに 4

「……桜音。どうした？」

ほんの数秒間の出来ごとだと思っていたら、以外に結構間があったみたい。

海が不審に思ったのか、私の頬に海の手を添えられ顔を上向きにされていた。

あ……ちょっと考えすぎちゃったかな。

「ううん。なんでもないよ。あのね、来年も一緒にお祝して欲しいなって思ってたの」

とっさに出たその言葉。

これは決して嘘なんかじゃない。

今はたしかな保障なんてないけど、ただその言葉だけが欲しい。

「当たり前だ。来年だけじゃない。この先もずっとずっと俺は桜音の誕生日をお祝いするぞ。出来れば一番におめでとつを言いたいけどな」

「え？海、朝一番の電話で言ってくれたよ？」

私、朝方に生まれたから朝起きた時には、もう自分の誕生日が過ぎている。

だから、朝起きて一番に聞いたのが海だった。

モーニングコールってわけじゃないけど、海からの電話で起きたから、一番は海だ。

「ちがうよ。こうして顔見てちゃんと言いたいんだ。那智さんは泊まりすら許してくれないから、同棲なんてたぶんもつてのほかってタイプだろ？やっぱり、顔見て言えるようになるのは結婚してからかもな。大学出て社会人として桜音を養えるようになってからだか

ら、やっぱり長いな……」

「結婚してから……?」

「ああ。那智さんだって、結婚してから桜音と一緒に住むのに文句言えないさ。結婚自体は反対されるかもしれないが、そこはなんとか通いつめて理解して貰うよ。幸いな事に桜音のご両親にはもう許可貰っているし」

「……は?」

「知らなかったのか?大分前だぞ。桜音と付き合った事を報告した時だから。もしかして、言っただけじゃなかったか?」

その問いに首を左右に大きく振りまくった。

聞いてないし!!お父さん達も何も言っできてないし!!一言言っ
てよっ!!

お父さん達、どうとらえたのかな?もしかして本気にしてないとか?それとも私と同じようにまだ高校生だからか思っているのかな……
どちらにせよ、聞いてないということには変わらない。

432

「それでな、桜音。本当は指輪にしようかと思っただが、やっぱり指輪は本番にして欲しい。だから、これを」

海はズボンのポケットから何かを取り出すと、私の手を取りそれを私の手を包むように片手を添えながら、私の手の平へとせた。冷たい鉄のような堅い感じがするその物体。

海の手が離れて見えてきたのは、アンティーク調の鍵だった。

「言うておくけど、これ誕生日プレゼントじゃないぞ。プレゼントは他にちゃんと用意しているから」

「え、うん。ありがとう」

「出来れば大切に持っていて欲しいんだ」

「うん、もちろんっ!!でも、この鍵何の鍵なの?」

「それはまだ秘密。俺が小さい時、母さんと約束したんだ」

「お母さんと？」

たしか、海のお母さんって海が小さい時に病気で亡くなられたんだよね。

いいのかな？私が貰っちゃっても……

「ねえ、本当に私が貰ってもいいの？」

「ああ。俺の大切な人は桜音だから」

「ええっ!？」

思わず大声が出てしまい、口を押さえる。

うう……ここ学校だった。

幸いなことに、海と私しかないけど。

「なんだよ、その反応」

海は眉を顰めながら私を見つめている。

「だって、大切って……私のこと……？」

「伝わってないのか？だったら、時間かけて伝えるぞ？俺がどんなに桜音の事を思っているのか」

「いい!!いいから!!」

やけに接近してきた海に、ちょっとした恐怖というか、身に危険を覚えたので少し後ろに下がって距離を取った。

「これ、使えるの？」

「もちろん。メンテナンスして貰っているからな」

「メンテナンス……」

呟き鍵を見るけど、海が言っている意味がわからない。

わけがわからずじっと見ていると、持っているものと同じ形状の鍵が目の前に差し出された。

「あ。同じ……？」

「ああ。合鍵だからな」

「合鍵……」

確認するように呟くと、海が頷く。

「桜音。それちゃんと大事に取っておいて欲しいんだ。ちゃんと使
う日が来るから」

「うん」

私は無くさないように、ハンカチを取り出し包み込んだ。
家に帰ったらチェーンでもつけて、ネックレスにしよう。
そうすればきつと無くさないだろう。

「ねえ。でも、この鍵そもそも何の鍵なの？」

「まだ内緒」

「うう。ケチ」

「そのうち　もう少し未来みきになったら教えるよ。その時は、桜音
が開けて？」

「だから、何を？」

「だから内緒」

急に意地悪になったのか、海は教えてくれない。
気になるじゃんか。

結局その後も海は教えてくれなくて、私とその鍵の秘密を知るのは、
海の言葉の通り未来になってから。

それは私が在原桜音になり、二人で新居に引っ越した時のことだ。

もう一つの合鍵をキミに 4 (後書き)

また気まぐれに番外編を更新するかもので、その時はまた遊びに来て下さい。

では、ここまでお読み下さってありがとうございます！
< ((

番外編

Happy Halloween

前編(前書き)

10月なので、企画物を。

よし、4つめ完成!!

シャーペンを萼の形をしたメモから離し、それを半分に畳んでからまた半分に畳む。

そしてそれをペンケースの隣りに置いてある、某キャラクターの描かれた缶の中へと入れた。

缶の中を覗くと、同じように畳まれた紙が丁度4つばかり入っているのが見える。

その折りたたまれたメモの中には、『ある事』が書かれていて、内容は全部バラバラ。

ん〜。4つかあ……もう少し増やして、5つにしようかな？選択肢多い方が良いと思うし。

ぼんやりと缶を見つめながらいろいろと考えていると、私の座席の前の椅子がガタガタと揺れ動く音が耳に届いてきた。

音と一緒にふんわりとムスク系の香りが漂ってきている。

この良い香りの香水は

「みくっ!!」

みくは椅子に斜めに座りながら腕を組んでこっちを見ていた。

左手の薬指に嵌められてあるものが教室のライトに反射して、輝いている。

それは猫をモチーフにした指輪。

「桜音。あんた、何してんのよ？」

「ん？これ？これね、今日はハロウィンだから準備」

「準備？」

「うん。ハロウィンってお菓子を持ってないと悪戯出来るじゃん。

それでその悪戯を決めるのに、くじ式にしようかなって。罰ゲーム感覚にさ。ほら、海ってお菓子持ってなさそうでしょ?」

海は普段からお菓子を持参してない。

キャンディーやガムすらも。

なんか、甘いのが苦手なんだって。

でも、口の中に尾を引かない甘さのレベルなら大丈夫みたい。だから私が作って海に渡すのは、ちゃんと甘さを抑えたちょっとピタータイプのお菓子ばかり。

「あゝ、今日ってハロウィンか」

「うん」

今日はハロウィン。

今年は海の家で学校の課題をしながらハロウィンを楽しむ予定なんだ。

別にパーティーとかそういう大きな事はしないよ?

ただおやつにカボチャのパイ食べたり、ハロウィンパッケージのお茶を飲んだりして、ちょっとだけハロウィンを楽しもうかなって考えてるんだ。

「んで?どんな悪戯するの?」

「ん〜とね、3分間くすぐられる刑とか」

「……。」

みくが口を固く結んだまま、頬杖をつきながらこつちをじっと見ている。

それに対し、すごく居た堪れなくなった。

「え?駄目……?」

「こつちか、それって色気なさすぎだろ」

「ハロウィンに色気って関係なくない?」

首を傾げながらみくを見つめると、深くため息をはかれた。

えっ？なんで？

ハロウィンと色気について考えていると、「逢月さん」と遠くから名前を呼ばれ一瞬思考が停止した。

なんだろう？

その声のした方向に視線を移すと、それは教室のドア付近。

ちょうど開け放たれているドアの前に、同じクラスの翠ちゃんとA組のさゆりちゃんが立っていた。

あー。もしかして、教科書でも忘れたのかも。

「ごめん、みく。ちょっと行くね」

私はみくにそう断ると席を立った。

まさか、この行動が後に激しく後悔することになるとは知らずに

「か、海っ!!少し落ち着こっつ!!」

私は両手でそれを持ち、顔を隠しながら日本史Bと書かれたっそれ越しに彼を説得していた。

こんなんじゃ防ぎきれないのは分かっている。でも唯一の防御がこれしかない。

だが、これが私を守ってくれる可能性はゼロに等しい。

これは、ちょうどリビングのテーブルの上にあった日本史Bの教科書。

今日の日本史の授業でちょうど課題が出てたので、つい数分前までそこでやっていたのだ。

「俺は落ち着いてるぞ。むしろ落ち着いてないのは、桜音の方だろ？」

大好きな彼氏の声が近づいてくるのに、私はなんとか彼と距離感を一定に保とうと、足を後方へと少しずつ進めて行く。

視線は絶対に海の顔を見る事は出来ない。

たとえば大好きな人でもだ。

もう気分はホラー映画の主人公。

確実にゆっくりと追い詰められていく

「うう……みくのばかーっ!!なんでくじの中身を入れ変えたりするのよ!?!」

後で電話で文句言いまくってるんだからっ!!!

私はうらめしく、右斜め方向に視線を移した。

そこにはリビングに設置されてある黒い長方形のテーブルがあった。テーブルの上には、マグカップが2つとパンプキンパイがのっている真っ白い皿が2つ。

その他にも、ノートとペンケースなどいろいろのっている。

私が睨んでいる先は、そのテーブルじゃなく、下にある鞆。

携帯はその中に入っているため、今すぐ文句を言いたいが、かけることはできない。

「何言つてんだ？これは桜音の字だ。俺が桜音の字を間違えるはずないじゃないか」

「それ明らかに違うよ。私斜めに字かかないもん」

そう言いながら教科書から顔を覗かせると、海は右手に持った苺型のメモ帳を見つめていた。

もう片方の左手にはキャラクターの描かれた缶が持たれている。

そう。全ての元凶はアレだ

「いや、これは今日だけ桜音の字に見える。明日からは佐々木の字に見えるけどな」

「やっぱ、私の字じゃないってわかってるじゃんか！！」

おかしいと思つたんだ。海は私の字知ってるもん。

それに補習になるたび、海のマンションに押し掛けてくるみくと日下部君に勉強教えているから、みくの字も知ってるはずだし。

「だからそれは無効なのっ！！」

私は海が手にしているそれを指さしながら告げた。

アレは休み時間に私が作っていた『ハロウィンくじ』

案の定、私の想像通り、海はお菓子を持ってなかった。でも「海に悪戯出来る〜」って喜んだのもつかの間。なんと海が引いたくじは、「キス100回」という作成した本人が驚愕するような内容だったのだ。

あとはいつもの通り。

顔を綻ばせながら喜ぶ海と青ざめる私の図。

我にかえり、慌てて罇型のメモ帳を海から奪ってみるとなんとその字はみくの字。

考えられる事は、ただ一つ。みくが中身を入れ替えたのだ。

たぶん、私が翠ちゃんに呼ばれた時。あの時私が席を外したから……

も〜。みくもみくだけど、海も海だよ。

私の字じゃないって知っているくせに。

「キス100回なんておかしいな」

「うん、うん。おかしいよね」

「ああ。どう考えたって足りないだろ」

「た、足りない!? いや、どう考えても多いでしょ!?! ……っ

て違う!! 論点ずれてる。だからそもそも私の字じゃないの。それ

はみくの字だからくじは無効なんだってば!!」

「他の悪戯の内容はなんだろうな?」

「ねえ、海。人の聞いている!? 私が書いたのは『3分間くすぐられる刑』とか『何かモノマネをする刑』なんだけど!?!」

海は私の話の耳を傾けず、缶の中にあるメモ帳を次から次へと取り出し広げていく。

「え〜と、これはハグ10分間。こっちは桜音の好きな所を全部言う。なんだ、こんなの悪戯じゃないだろ。日常だ。で? 他には

……あ。これ良いな」

何か気に入ったのがあったのか、海が私の前に毒型のメモ帳を差し出した。

そこには、黒インクで『桜音を好きにしていよいよ』とくっきりと書かれている。

「もうそれ海に対しての悪戯じゃなくて、私に対しての悪戯じゃない！！」

「桜音どれがいい？」

「だから何度も言っているけど、くじは無効なのっ！！」

「そうか、全部か。わかった。じゃあ、残りも開けてみよう」

「人の話聞いてっ！！」

そんな私の叫びは、すっかり盛り上がってしまったている海にスルーされてしまう。

結局その後、私は海にすべてその刑を実行されたしまったのは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258d/>

合鍵

2011年10月10日07時52分発行